薔薇のまねごと

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薔薇のまねごと

【Ｎコード】
Ｎ１７２１Ｕ

【作者名】
るうあ

【あらすじ】
吸血鬼の青年ユエルに仕える、元人間の少女で「眷族」のミズカ。ある日ミズカは「眷族」の存在理由を知らされます。　それはただ従属するための存在ではなくて…。　夏の避暑地、何かが変わってゆくような、そんな予感にとまどいがちなユエルとミズカの物語。
【こちらは当サイトにおいて掲載していた「まねごとみたいな恋でも」の改題・改稿したものです】

1．深緑の森にて

針葉樹の緑が艶やかな、今は葉月。

わたしとわたしのご主人様は、避暑と商売を兼ねて、高原の別荘地に来ている。

お盆前後の夏季は大賑わいを見せる、観光地としても有名な高原の別荘地。

わたしのご主人様は何度か訪れたことがあるようだったけど、わたしは初めて訪れる所だった。

唐松と苔と羊歯の緑が美しい閑静な別荘地で、木々の隙間から寄棟屋根や三角屋根の木造建築が広い距離を置いて建てられているのが窺える。場所によって、ぎゅうぎゅう詰めに並んで建っているところもあるらしい。コンクリート舗装されている道もあれば、土が剥き出しになって轍が続いている道もあって、行き止まりなってしまう道も多かった。

わたしのご主人様が選んだ現在の住処は、賑わった場所から少し離れた、奥まった場所にある。

木造総二階建てで、銅板葺の白い洋館。緑の中にあって、白がよく映える。それほど大きくはない建物だけど、もとはどこかの国の貴族だか富豪だかの別荘だったらしく、外装もさることながら、内装も美しい。何度か修復・改装工事はしたらしいから、百年近く前に造られたとのことだけど、古びた感じはしない。半円形に張り出されたベランダが殊に目を惹く。

どういう経緯でこの屋敷を手に入れたのか、ご主人様にはあえて訊かない。どうせ、「あまり大きな声では言えない」手を使ったに違いないから。

その洋館の、正面入り口に看板が立てられている。

『占いの門』

ネーミングセンスを疑う店名だけど、商売の名が記されているのは、わかりやすくていいのかな。
この看板を見るたび、毎度首を傾げてしまう。
こんな胡散臭そうなネーミングの店にも来客はそこそこあって、このひと夏である程度は稼げそうだ。
……愉快なことじゃないけれど。
いかにも重々しいチーク製の建具枠の外側に、石製の太いアーチ状の額縁が廻らされている。
それを何とはなしに眺めやり、ひとつため息をついてから、重い扉を開け、屋敷の中に入った。
朝の散歩から帰宅したわたしを出迎えてくれる人はなく、広い屋敷の中、おそらく一階の書斎か二階の寝室のどちらかにいるだろうご主人様の元へ向かった。

わたしのご主人様は、意外なことに、書斎にいた。
ゆったりとくつろいだ姿勢で寝椅子に腰かけ、本を読んでいる。熱中している風ではなく、ぱらぱらと流し読みしているようだった。
「ただ今戻りました、ユエル様」と報告すると、本に落としていた緑色の目をこちらに向けて、「おかえり、ミズカ」と微笑みかけてくれた。
それはもう目も眩むような美しい微笑みで。
自然と紅潮してしまう頬と胸の動悸をごまかすために、平静な口調でユエル様に尋ねた。
「何を読んでいるのかと思えば……。いったいいつの間にそんなに揃えたんですか、ユエル様？」
サクラ材の丸卓子に山積みになっているのは、少女漫画と小説。小説は、「ライト」が上につく類のもの。表紙を見ただけでは小説とは分からないような、そんな装丁の本だ。

小説と「ライトノベル」の違いについて、いつだったかユエル様に説明してもらったことがあるけれど、なんだかよくわからず、結局ちゃんとは理解できなかった。少女向けと少年（青年？）向けでは、文体や内容に差異があったりするそうだけど、

「それもまた、その時の流行次第で変わるから、一概にこうだ、とは言い切れないジャンルで、良くも悪くも、不変のものではないね」

とのことらしい。

ユエル様が勧めてくれたものを何冊かの本は、ライトがつくかつかないかの区別はわからなかったけど、読んで、面白いと感じた。

「久しぶりに、ミズカも読んでみる？　こっちの少女向けファンタジーなら、ミズカでも楽しめると思うし、なかなか興味深いよ」

「今はけっこうです。そんなことよりユエル様、せめてお召し替えなさってください」

だってユエル様、夜着のままなのだ。シャツのボタンは上四つをはずしているせいで、胸元がはだけてしまっている。女ではないから見えても……まぁ、いいのだけど。

それでもやっぱり目のやり場に困るんですってば、ユエル様！

わたしが仕えている「ユエル様」は、貴公子然とした青年。年の頃は、見た目で二十代半ばといったところ。

緑色の瞳が白絹のような肌に映える。白髪と見まごうつややかなプラチナブロンドは長く、肩にかかっている。

ユエル様が手にしている少女漫画に登場してきそうな耽美な容姿で、「白皙の美青年」の見本みたいな美貌の持ち主だ。もちろん、日本人ではない。

わたしは日本の生まれだけど、ユエル様の生まれ故郷は北欧の方らしい。

詳細を聞こうとしても、

「国名？　さあ、当時は何と言ったかな？」

ユエル様はそう言って微笑み、はぐらかされてしまった。だから詮索されたくないのだろうと、それ以上聞くのはやめた。

ただ、ヨーロッパ中を転々としていたとのことで、ユエル様は何ヶ国語かを自在に操れる。日本語も、日本人のわたしより流暢に話せるぐらいにお上手だ。英語にフランス語に、ポルトガル語、それにドイツ語なんかも不自由なく喋れるユエル様だけど、それらを披露する機会はめったにない。

実のところ、不思議だったりする。

ユエル様はどうして日本に来て、そして居続けているんだろう……？

不思議なことだらけのユエル様は、わたしに着替えをせっつかれてもなかなか腰を上げてはくれない。不思議で、ちょっと困った方なのだ、わたしのご主人様は。

「ユエル様、もういい加減、着替えを済ませて、開店準備をしてください。そろそろ開店時間になりますよ？」

「ミズカ、これを表に下げてきて」

「なんですか？」

手渡されたのは、木材の小さなプレートだった。そこには、『臨時休業』の文字が記されている。

「お休みするなんて聞いてません」

「臨時の休業だからね」

「……ユエル様」

「そうしかめ面をしないで、ミズカ。実は今日……だと思うんだが、客が来るんだよ」

「お客様、ですか？　占いのお客様ではなくて？」

「そう。遠方から遥々とね。連絡があったことを忘れてて、それでミズカに知らせるのが遅くなった。たぶん、二人……だと思うが」

「ユエル様のご友人ですか？」

「一人はたしかに友人だが」

ユエル様は苦笑して答えた。ちょっと意味ありげで複雑そうな微笑みに見えた。

「わかりました。でも、その漫画は片付けてください」

「何故？　面白いのに」
どういう意味の「面白い」かはわからないけど、ユエル様のような美貌の青年が読み耽っていていいものじゃない気がします。……なんてことは言えなかったけれど。
「吸血鬼を題材に扱った漫画や小説というものは、少女向けに多いのだね。しかも偏っていて興味深い」
「吸血鬼って……ユエル様」
今度はわたしが複雑な表情をする番だった。
「吸血鬼とやらは切なく哀れで耽美な存在のようだな。残忍で酷薄、しかし意外に一途、と」
それが今まで読了した漫画や小説から集積した「吸血鬼」の総イメージらしい。
「私に男色の趣味はないが、……たしかにそうした趣味の奴もいたな」
くすっと、悪戯っぽく笑う。まさに、艶然と。イメージ通りに。
「的を射ていることもあるね。血を吸うのではなく、“生気”を吸うというのは、確かにその通りだ。不老で長寿なのも、たしかにそうだね」
かつての吸血鬼のイメージといえば、血に飢えた亡者、牙をむいて処女に襲い掛かる怪しい夜の魔物、といったところだろうか。ブラム・ストーカーが書いたような。
「にんにくや十字架、日の光が弱点じゃないことも、よくわかっているね。まぁ、作者によってそのあたりは変わってくるようだが。人間の信仰心が弱点と描く者もいるが、これはどうだろうね？」
こういう場合の信仰心というのは、主にカトリックだろうか？
そうしたことに詳しくないから何とも言えないけれど、実際、現代の日本で、カトリック教の信仰心の篤さに畏怖するような場面には出くわさない。
だから、「どうだろうか」と問われても、わたしとしては答えようがなく、困ってしまう。

それよりも……――

「……ユエル様、吸血鬼という言い方は嫌ってらっしゃったのに」

「他にないからね、日本語では。妖怪という言い方は広義すぎるしね。化け物には違いないが」

「……」

――つまり、「吸血鬼」なのだ。わたし達は。生き物の“生気”を吸って生きる、不老で長寿の「吸血鬼」。

厳密にいえば、わたしはユエル様とは違う。

ともあれ、人間ではない、人外的な存在であることはたしかで、便宜上「吸血鬼」と言っている。誰に言うでもないのだけど。

占いなんてふざけた商売を、ひと夏限定で始めたのは、容易く人間の生気を得るため。もちろんお金も要るので、「一石二鳥のいいアイディアだろう？」と、ユエル様は言うけれど。

もっと他に方法はなかったのかしらと思う。

当たるのかどうか微妙な占いなのに、客の入りはいい。それも女性ばかり。占いが目的というよりは、鑑賞に値する美青年を一目見ようとやってくる。しかも料金を払って。

「当然のことだね」

と、ユエル様は嘯く。

まったくもって、自意識過剰なユエル様だ。もっとも自惚れてもいいほどの美貌の持ち主には違いないのだけど。

謙遜という言葉を教えてさしあげたい……。

ため息まじりにうっかりこぼしたわたしの独語を、耳ざといユエル様はしっかと聞きとっていて、不快な顔をするどころか慢気な笑顔を浮かべている。

「謙遜よりも、自己を正しく評価することこそ、美徳だと思うが？」

「過大評価に陥りがちなんです、ユエル様は」

「ミズカは私と違い、遜恭としすぎるきらいがある。ミズカこそ自己を正しく評価しても良いと思うが、まぁそれが、ミズカの美徳でもあるから、相変わらずでいてほしいとも思うよ」

「ユエル様こそ相変わらずの驕気っぷり、ある意味、安心します」
本当は、驕り高ぶったような人じゃないって分かってるから、優しさに甘えて、つい軽口をたたいてしまう。
だけどユエル様は怒りもせず、
「それはよかった」
と言って、艶然と微笑んだ。

気恥ずかしさをごまかすために、別室から段ボールを持ってきて、そこに漫画本を詰めこむ作業を始めた。
「ミズカ、それらをどうするつもり？」
「売ります。たいした金額にはならないでしょうけど、邪魔になりますから」
吸血鬼のわたし達の食料は、人間の生気だ。
だから食料を調達する費用は必要ないけれど、人間のフリをし、生活をしていくには何かとお金がかかる。そのために働くこともある。
そうしなくても、ユエル様には豊富な私財…主に貴金属類…があって、時々それを現金化して持ってくる。贅沢さえしなければ、それで一、二年は楽に暮らせるくらいのお金をぽんっとわたしに渡してくる。
何もせず遊んで（というか、だらけて）暮らすこともあるけれど、何食わぬ顔で学校に通ったこともあった。
わたしは生徒、ユエル様は教師になりすまして。
「秋になったら、またどこかの学校にもぐりこもうか。生気が楽に得やすい場所だしね」
「ユエル様がそうなさりたいのなら」
「ミズカも、短い間だが、学生生活を楽しめるだろうしね？」
「……」

かつて……ただの人間だったわたしは、学校などに通える身分ではなかった。だから学校に通えたのがすごく嬉しくて、その時のわたしのはしゃぎようをユエル様は思いだしたのだろう。
ユエル様は優しく微笑み、わたしを見つめてくる。穏やかなような、切ないような、深い深い、緑の双眸を。
「ミズカは、たしか十七歳……だったね？」
「たぶんそうだと思います。はっきりとは分かりませんけど……」
もう何十年……いや、百何年か前の話だ。わたしが「十七歳」くらいの年齢だったのは。
わたしが、わたしのことで知っている事といえば、「水果」という名前と、孤児だということ、そしてたぶん十七歳くらいだということ。
親なしだったわたしは孤児の収容所のような施設にいて、読み書きを覚えた頃になってから、とある子爵家のお屋敷に奉公にあがることとなった。そこにどのような経緯があったかすら、知らない。
下働きとして雇われたわたしの待遇は、「下の上」といったところだった。残り物の寄せ集めという内容の食事が二度と、蚤の涙ほどの給金。給金が出るだけでもありがたかった。
「みすぼらしいという言葉がぴったりだったね、あの頃のミズカは」
あの頃、たしかに、みすぼらしいの一言に尽きるわたしだった。身なりもまともに整えられず、痩せて、這いつくばるようにして働いていた。
今では小奇麗な服を着られて、一般常識や勉強もユエル様に教えてもらい、学校にまで通わせてもらった。
食事の心配は……ユエル様が傍にいる限り、保障されている。
「ユエル様のおかげです、何もかも」
「もうすっかり、みすぼらしさは抜けたね、ミズカ」
「……っ」
わたしの手を取り、ユエル様は匂いたつ薔薇のように笑う。
突然手を握られて、胸がドキリと高鳴った。

ユエル様の幻術に、わたしはかからない……はずなんだけど。
顔どころか、全身熱くなってきて、慌てて手をひっこめた。
「のっ、喉、渇きませんか、ユエル様！　何か冷たいものでもお持ちします」
「……」
「あ、温かいものの方がいいですか？　目が覚めるように、コーヒーとか」
「……いや」
ユエル様は何かを言いかけ、けれど一度口を噤んだ。
それから、ふっとため息をつき、
「そうだな、冷たいミントティーがいい。淹れてきてくれるかな？」
そう言った。きっと、言いたかった事ではないだろう。なんとなく、そう感じた。
「わかりました。すぐに用意しますね！　それじゃぁユエル様、その間にこの本、段ボール箱に詰めておいてください」
「はいはい」
主人に対しての口利きは、かつて奉公に上がっていた家で身につけたはずだった。
ましてや主人に「命令」するなど、言語道断。
だけど、過去の思い出と一緒にそれらは忘れてしまった、現在のわたしだ。
ユエル様は、困ったような、呆れたような、そして安堵したようなため息をついて、笑う。
「ミズカの分も淹れておいで。一緒に、朝のティータイムといこう」
「はい…っ」
応えてから、わたしは大急ぎでキッチンへと向かった。

2. 訪問者

窓越しに、臨時休業の看板を見て、残念そうに立ち去っていた女の子達を見送った。

きっと情報源の曖昧な口コミを聞きつけて来たのだろう。再訪問の子達もいたかもしれない。

絶世と称してもあながち言い過ぎともいいきれない美形の占い師を一目見ようとやってきた女の子達に、無駄足を踏ませてしまった。

申し訳ないような、ほっとしたような。

ユエル様の食事となる女の子達の大半は、学生のようだ。あとは主婦かな？

まだお盆前だけど、存外客数は多い。もう夏休みには入ってるから、さすがに観光地なだけあって、ぼちぼち賑わいをみせつつある。

「それで？　お客様はいついらっしゃるんですか？」

ミントティーを用意し、テーブルに置いた。

「さあ。今日中には来ると思うが」

わたしがミントティーを用意している間に、ようやく着替えを済ませてくださったユエル様は、書斎ではなく、居間の方へ移動し、そこで寛いでいる。

臨時休業ということもあって、着替えてはきたものの、夜着よりはきちんとしているという程度の衣服だ。

グレンチェックのパンツをはいた長い足をゆったりと組んで座り、ソファーの背もたれに片腕を投げ出すように置いている。長袖のシャツだから、露出は少ない……と言いたいところだけど、淡い浅黄色のシャツのボタンは下半分しかとめてない。

もうっ、ユエル様！　目のやり場に困るんですけど！

と、苦情を申し立てたいところだけど、恥ずかしくって、とても言えない。

「……あの、ユエル様。一応確認しておきますが、お客様というの

は、その……やっぱり同族の方々でいらっしゃるんですか？」
「ん、ああ、そうだよ。……そう、“同族”だ」
ユエル様は冷えたミントティーをとり、口をつけた。氷がカランと涼やかな音をたてる。
わたし達は、固形物は食べられない。けれど液体ならば、摂取できる。
どういう仕組みなのかは解からないけれど、なんでも液体は体内で蒸発するらしい。だから「飲む」ことはできて、ゆえに味覚もちゃんとある。
付け加えると、わたし達は人間の生気を「吸う」わけだけど、それを「飲む」という言葉に置き換えている。誰が聞いても怪しまれないように、ということらしい。
ユエル様はミントティーで喉を潤し、一息ついてから話し出した。
「ミズカに話しておかねばならないね、私達のことを」
「はい？」
私達のこと？
吸血鬼だということ以外に、まだ何か説明が必要なことが？
珍しく真面目な顔つきのユエル様だ。深刻な話なのだろうか。
ユエル様に座るよう促され、差し向かいのソファーに腰かけた。
「もっと早くに話しておくべきだったかもしれないと、今さらに思うが」
「……」
戸惑っているユエル様を見るのは、ずいぶんと久しい。
「長寿の代償として、子孫を残すことはできないと、これは以前話したね？」
「……はい」
「だが、私達は不死ではない。どんな形であれ、いずれ死は訪れる」
消滅する、らしい。人間の死とは違う。塵になり、肉塊は残らないと聞いた。
それを怖くないといえば嘘になるけれど、人間だって死んでしま

えば骨が残るだけ。さほどの違いはない。自分に、そう言い聞かせていた頃もあった。
「さて、ミズカ。不思議に思わない？」
「はい？」
「私達は長寿だが、いずれは消える。そして伝説の吸血鬼のように、血を吸う行為で仲間を増やすということはしない。とすれば、私達は自然全滅してしまってもおかしくないのでは、と思わない？」
「あ…っ！」
その通りだ、言われてみれば。
わたしは目を瞬かせ、ユエル様を見つめた。

＊　＊　＊

かつて、ただの人間だったわたしは、ユエル様によって、吸血鬼の「眷族」にされた。
血を吸われると吸血鬼になる、という伝説に多少は似ているけど、実際はそんなものではない。
わたしはユエル様によって、生気を分け与えられ、たしかに吸血鬼の仲間になった。
わたしのような存在を「眷族」というのだという。そして、「眷族」は「主」の生気のみを糧に生かされている。
だからわたしはユエル様の生気しか受けつけない。人間の生気を直接「飲む」ことができないから、ユエル様がいなくなってしまったら、わたしは飢えて消えてしまう。……それだけの存在だ。
「ミズカ、誤解をしないで。“眷族”はただ従属するだけの存在ではないのだよ。とても……大切な存在なのだから」
ユエル様が悲しそうに、そう言った。本当に、申し訳なさそうな顔をしたのだ、あの時。

わたしを眷族にし、吸血鬼たる自分の素性を明かした、あの時に。

――遠い……遠い記憶。

不思議と、いつまでも色あせない思い出もある。

雨の港で行き倒れている銀髪の異人さんを見つけた。

放ってはおけず、行き倒れていた異人さんを、奉公していた屋敷に連れて帰った、あの日。

あの日が、すべての始まりだった。

わたしの雇い主は当然いい顔をしなかった。

わたしがとるに足らない下賤の奉公人だということもあったろうし、そのわたしが引きずるようにして連れ帰った異人さんの正体も不明で、厄介事に関わりたくないと思ったのだろう。

部屋も貸してはくれず、風雨をどうにかしのげる程度の、狭い使用人用の宿舎で、わたし一人、意識の混濁している異人さんを介抱するしかなかった。

意識もなく、苦しげに息をつく異人さんを薄っぺらな布団に寝かせ、その上にわたしの持ち合わせのぼろ服をかけて、温めた。そして一晩中、手を握っていた。そのくらいしかできなかった。ただ傍についてあげるだけしか。

ぼろ布を被せているのが申し訳ないほど、異人さんは美しかった。

介抱の甲斐があったのかどうなのか、翌朝目を覚まし、意識を取り戻した異人さんは、わたしと、そして一応はわたしの雇い主に礼を述べ、屋敷を出て行った。

それから数日後、異人さんが現れた。

身なりを整え、豪奢な格好し、最新式の車に乗って。

外国の貴族の子息で、相当な財産家だと知り、わたしの雇い主は

あからさまに態度を変えた。
米搗きバッタもそこのけにぺこぺこし、両手をこすり合わせて言い訳と世辞とを繰り返した。けれど、異人さんは表情一つ変えず、淡々とした口調で用件のみを述べた。
「その娘を買い受けたいのだが、幾らならば手放してくれようか」
その娘……つまり、わたしのことだった。
来訪の理由に、わたしは仰天した。
――結局。
わたしはあっけなく売られてしまった。
わたしは、ただの一面識しかない異人さんのお屋敷に上がることになった。
わたしが働いていた子爵家の屋敷の何倍もある立派な邸宅を唖然と眺め、……絶望した。
手のあかぎれが消えないほどの掃除が、わたしを待っている。朝から晩までこき使われるに違いない。
そう思っていたのに。
わたしを買い取った新しいご主人様…ユエル様は、わたしの手をとって、「すまない」と謝ったのだ。買い取る、という行為に対して、ユエル様自身、気分を悪くしていたらしい。
「人身売買など、恥ずべきことだ」と。
ユエル様はわたしにキレイな服を着せてくれ、女学校で習うような勉強は一通り教えてくれた。
仕事も、させてもらった。これは、わたしの方から頼み込んで。ただ飯食いなんてイヤだったから。
でも使用人は他にも沢山いたから、残っている仕事は僅かしかなかった。せいぜい、ユエル様の私室を掃除させてもらうくらいで、いつの間にか、わたしの手からはあかぎれが消えていた。
どんな目的でこんなに優しくしてくれるのかと、最初は気味が悪かった。
でも、いつしか、わたしは現状に慣らされた。不安感と疑問は僅

かに残ったものの、暗い疑惑は薄れていった。
ユエル様の元に召されて、二年が経った。瞬く間に。
……そして、その二年の後。
わたしはユエル様の「眷族」になった。

＊　＊　＊

わたしは話の続きを急かすようにユエル様を見つめた。
ユエル様はふうっと長い息をつき、わたしから目線を逸らした。
「眷族の意味についても、ちゃんと話しておかねばならなかったんだが」
「え？」
話が逸れた？　吸血鬼の絶滅危機についての話じゃなかった？
わたしが首を傾げ、ユエル様が再びわたしのほうに向き直った、その時。
ビーッという、味気ない電子音が鳴った。
玄関のドアの横に設置された呼び出しブザーの音だ。
わたしは腰を浮かせた。中座することに多少戸惑ったけど、行っておいでとユエル様の目に促され、急いで玄関へ向かった。その間にもブザーは三度ほど鳴った。
せっかちな人だな。
施錠していなければ、勝手にドアを開けて入ってきそう。
ドアを開けると、そこにユエル様目的の訪問客がいた。
「あら、あなた」
反射的に、わたしは軽く会釈をした。
茶系のサマーニットと麻素材らしいドレープのきいた膝丈のスカートを召している、権高な態度の若い女性客。
日よけのためにではなく被っているつばの狭い帽子の下から、突

き上げるようにしてわたしを見る。美人といえなくもないけど、赤く塗りたくった口紅と、キツイ香水の匂いが、美しさを損なわせている。
「ユエル様はいらっしゃる？」
客には違いないけれど、ユエル様が待っているというお客様ではない。
この方は常連客だ。ここ一週間、ずっと通い詰めている。
「あの、今日は臨時休業なのですが」
「でもユエル様はいらっしゃるのでしょう？」
言葉遣いは丁寧だ。だけどそれは礼儀正しいと同義語ではない、この方に限っては。
「あなたに用はないの。ユエル様を呼んで」
「……」
一歩、彼女は前に進んだ。わたしを押しのけて屋敷に入ろうとする。
「ちょっとあなた、邪魔。ユエル様にお会いしたいのよ。どいてくれないかしら」
「あの、ですね」
あまりに不躾ではないかと、非難しようとした。
どこかの財閥の令嬢だとかいうけど、あまりに礼儀を失している。
「お待ちください、今、わたしが」
「どいてったら。……あらっ」
屋敷内に侵入しようとする彼女の足を踏みとどまらせるのに成功したのは、結局、ユエル様だった。
「ユエル様」
声も顔も、さっきのそれとはまったくの別人に成り変り、彼女のわたしを押しのける手にさらに力が加わった。
ほんの少しわたしがふらついたのをユエル様は見過ごさず、とっさに手を差し伸べて、わたしを寄せた。というか、わたしを盾にしている。背後からわたしの肩に手をおいて、そして押しかけてきた

来客と対面した。
「やあ、いらっしゃい。……亜矢子さん」
名前を呼ぶ一瞬前の「……」は、名前の記憶をたどるための「……」だ。思いだせたのは良かったけれど、その短い間と、わたしの肩に置かれている手が、「亜矢子さん」はお気に召さなかったようだ。
紅く濡れたような唇が、歪む。そして鋭くわたしを睨みつけてきた。
「今日は、店は休みなのですが」
「看板を見ましたから、それは存じておりますわ」
それなら何用ですか。そうユエル様が問う前に、亜矢子さんは片手に持っていた瓶を差し出した。
「こちらをお持ちいたしましたの。シュペートレーゼの白ワインですわ。それから」
ユエル様は瓶を受け取った。紙に包まれているから、ラベルは見えない。ドイツのワインらしい。
「こちら、招待状ですの」
つまり、こちらが本命ということだ。
ユエル様は、亜矢子さんが差し出した封筒を、ワインの時とは違ってすぐには受け取らなかった。
「三日後、わたしのホテルでパーティーがありますの。ぜひ、ユエル様もいらしてくださいな」
「……それは、ありがたいお申し出ですね」
ユエル様は返答を避けた。けれど亜矢子さんは諾と取ったみたいだ。満足げな笑みを浮かべている。
亜矢子さんはたぶん、脳内でユエル様の了承を聞いたのかもしれない。あるいは、断られるはずがないと高をくくっているのか。
それにしても「わたしのホテル」とはまた、ずいぶんと簡略したものだ。「わたしの泊まっている（だけの）ホテル」という意味ではないことくらいは、わたしにも分かるけれど。

とりあえず招待状は受け取った。わたしが、代行で。
「それでユエル様。今日はこれから、お時間をとれまして？」
せっかく訪ねてきたのだ。何の収穫もなく帰るつもりはないらしい。
「もしお時間がおありでしたら、わたしのホテルへ遊びにいらっしゃいません？　ちょうど昨日……」
「亜矢子さん」
ユエル様は優しげな、それでいてきっぱりとした声と態度で、亜矢子さんのお誘いを断った。
「残念ですが、実は今、来客中なんです。とても大切な客なのですが、亜矢子さんがいらしたようなので中座してきたのですよ。が、そろそろ戻らなくては。ミズカ」
ユエル様の手が、わたしの肩から離れた。
「ミズカ、そこまで亜矢子さんを送ってさしあげなさい」
「あ、はい」
「いいえっ、結構ですわ」
この時の亜矢子さんの表情は、とても複雑なものだった。
亜矢子さんが来たから、わざわざ顔をだしたのだと言ってくれたそのことは特別扱いされているようで嬉しかったみたいだけど、反面、追い出されている気分にもなったらしく……実際、追い返そうとしているのだけど……ユエル様の申し出は即座に「遠慮」した。
もちろん、ユエル様は断るとわかっていて、わざとそう言ったのだろう。それまでは気付かなかったようだ。
「それではまた、ユエル様。ごきげんよう」
挨拶だけ聞いていると、育ちも品も良いお嬢様そのものなんだけどな、亜矢子さんって。
小走りになって屋敷から遠ざかる亜矢子さんの姿をユエル様は一瞥もせず、そのまますぐに踵を返した。
ようやく帰ったかと、ほっと胸を撫で下ろしている。
「ユエル様、そのワイン、ワインセラーにしまっておきます」

「ああ、頼むよ」
「それにしても、とっさの機転でしたね、来客だなんて」
「いや」
「え？」
居間に戻ると、さっきまでユエル様が座っていたソファーに見知らぬ美女が座って、微笑んでいる。
「ええっ？」
わたしは思わず、素っ頓狂な声をあげてしまった。

3. 佳風

ゆるやかに波うつ豊かな長い金の髪、シミ一つない白珠の肌、瞳は海面を映したかのような青色。

黒ずくめの衣装なのに、全身から煌めくような輝きが溢れだしている。

黒地のノースリーブカットソーには、有名な国外ブランドのロゴが左胸に小さく入ってて、ブランドに疎いわたしでも、そのブランド品がいかに高級か知っているほどに有名なデザイナーズブランドだ。きっとスカートも同じブランドのものだろう。黒地のスカートは、膝上何センチなのか、ついはかりたくなってしまうほど短い。マネキンも尻ごみするくらいの美脚を惜しげもなく見せてくれている。

露出の多い格好なのに、下卑た感はない。高級な衣服につりあう雰囲気があって、シンプルなデザインがよりいっそう美しさを際立たせていた。

目を奪われるような美女っぷりに、わたしは、それはもう間の抜けたようにぽかんとして、突如現れた美女に魅入っていた。

豪華絢爛という言葉がぴったりの美女ぶりで、映画女優か一流のモデルのようなスタイルのよさは、なるほど、吸血鬼のイメージを損なわないと思う。

「あらぁ、あなたがユエルの眷族になった子ね！　嬉しいわ、会いたかったのよぉ！」

したったらずな口調だけど、妙な訛りのないきれいな日本語だ。

金髪碧眼の美女はやにわに立ち上がり、わたしに近寄ってきたかと思うと、――

「――っ！」

いきなりわたしに抱きついてきたのだ。

わたしは声も発せず、そのまま硬直してしまった。

もちろんイヤじゃないんだけど、なにしろ突然でっ！
「話で聞いていたよりもずっと可愛いわ！」
と言って、わたしの髪を撫でたり、頬擦りをしてきたりした。
「ちっちゃくてふわふわしてて、ほんとになんて可愛いの！」
「……っ」
もしわたしが男だったら、きっと鼻血を出して卒倒したに違いない。だって、……頬にあたる豊満な胸の感触や、甘くて爽やかな香水の匂いが心地好くて。
「アリア、そろそろ離れたらどうだ。ミズカが固まってる」
「あんっ」
ユエル様は金髪美女の肩を掴んで、半ば強引にわたしから引き離した。
「んもぅ、ちょっとくらいいいじゃない」
「せめて自己紹介を済ませてからにしたらどうだ？」
「あら、そうね」
ここは神々のおわす天空の国か、はたまた極楽の園かと思うくらい、目も眩むような美しい情景が、今、わたしの前にある。
白銀の髪の美男と黄金の髪の美女が並んで立っているのだ。
目がチカチカしてしまう！
美男の方は不機嫌そうに眉をしかめているけれど、美女の方は大輪の花のように微笑っている。
「あらあら。呆けちゃってるわね、大丈夫かしら？」
だっ、大丈夫なんかじゃないません！
ユエル様の美貌にすらまだ慣れず、ドキドキしてしまうというのに。
眼前に、衝撃的とも言える美女と美男が並び立っていて、平静でなんかいられません！
「――ミズカ」
「はいぃっ」
ユエル様の冷たい手が、わたしの頬に触れた。

「ミズカ、落ち着きなさい」
「はっ、はいっ、すみません」
我ながら、持っていたワインを落とさなかったのは上出来だった。
「紹介しよう。彼女は古くからの友人の――」
「アリアレーリ・ロズモントよ。アリアって呼んでちょうだい。みんなそう呼ぶわ。よろしくね」
「……っ！」
言うのと同時に、アリアさんはまたわたしに抱きついた。
「アリア」
そしてまた、ユエル様に強引に引っぺがされた。
「はっ、初めまして。ミズカと言います、わたし、あの……っ」
「あなたのことは聞いていたわ、ユエルからね。会えるのを楽しみにしていたのよ」
「は、はあ……」
「聞いていた通りね。ユエルがようやく眷族を持ってくれて、それがあなたみたいな子で、本当によかったわ」
「え？」
「あたしの人を見る目は確かよ。ねぇ、ユエル？」
「……」
アリアさんは暁の女神のように笑み、その笑みを受けてユエル様は苦虫を口に入れられたような渋面になっている。気恥ずかしげにも見えたのは、きっとわたしの目の錯覚なのだろうけど。
そういえば……
わたしは首を傾げた。
眷族といえば、その説明をしてもらえるところだったんだ。
そう思ってユエル様を見ると、また、ユエル様はわたしから目を逸らした。
「アリア、一人なのか？」
「ええ。でも、あいつもすぐに来ると思うわよ」
「来るのか、結局」

「そりゃぁ、来るでしょう。先輩風吹かしにね」
「……」
ユエル様は小さく舌打ちして、黙ってしまった。
「あっ、あの、ユエル様。わたし、お茶を淹れてきます」
気まずい沈黙が流れているようなことはないのだけど、ユエル様が困っているような気がして、なんとなく、話題を転じる必要を感じた。
「ああ、そうしてくれ。アリア、まずは座って。話したいことがある」
わたしは「はい」と応え、アリアさんは「はいはい」と応えた。
声が重なって、ユエル様が呆れたようにため息をついた。

ユエル様のリクエストで、アリアさんに、とっておきのアールグレイティーを用意した。
「ミズカは茶を淹れるのが上手い」
そう言ってくれたことがあった。
食事をしなくていいわけだから、料理の腕はあげようがなかったけど、その分お茶を淹れるのは上手くなろうと頑張った。その努力を認めてくれて、すごく嬉しかった。
その自慢の腕をふるうべく、骨董品的価値のある（らしい）磁器のカップに、紅茶を注ぐ。
わたしがお茶を用意している間、ユエル様とアリアさんは居間で何やら話を続けていた。
わたしが居間に戻ると話は中断してしまい、何を話しているのかはわからなかった。けれど、どうやら眷族のことを話していたらしい。
アリアさんがわたしに訊いてきた。
「眷族のことについて、詳しい説明はされてなかったのね？」

わたしはユエル様を見ることで、その問いに答えた。
そしてまたユエル様は、今度は瞼を伏せるようにして、わたしから目を逸らしたのだ。
……いやだ。どうしてそんな顔をするの、ユエル様？
まるで悪いことをしたみたいに。それも、わたしに対して。
「話そうとしていたところに邪魔が入ったんだよ」
「それ、あたしのことを言っているのかしら？」
「……否定はしないが」
わたしは運んできたお茶をテーブルに置いた。
反論しかけたアリアさんの注意が、甘い香りのたちのぼるアールグレイティーに移ってくれるように。
「あら、よい香り」
うまくいったみたいで、ほっとした。
一口飲んで「美味しい」とも言ってくれて、その一言にも安堵した。
「ミズカの淹れる茶がまずいはずがない」
とユエル様が付け足してくれて、もっと嬉しかった。
「あらあら」
アリアさんはからかうように笑って、わたしとユエル様とを見比べる。何か言いかけたようだったけれど、ユエル様に睨まれて、肩をすぼめるにとどめた。
「そういえば、アリアさん」
「なぁに？」
「アリアさん、どこから屋敷の中に入ってらしたんですか？」
「二階からよ。二階のベランダの窓が開いていたから。人が来るのが見えたから、玄関は避けたの」
ということは、亜矢子さんが来た時とほぼ同時にやって来たということなのかな？
それにしても、二階のベランダなんて……。よじ登ったとも思えないし、どうやってベランダに上がったのかな。

それに、泥棒じゃあるまいし、どうしてそんなところから屋敷内に入ってきたんだろう。
こそこそしなくちゃならない理由なんてないはずなのに、どうして人目を避けるのか、まずはそれを訊いてみた。
「そうねぇ、つい、身を隠す癖がついちゃってるのよ」
アリアさんは述懐し、苦笑した。
人間に、「人間ではない」と知られるのが怖い……というより面倒なのだと。同じことを、ユエル様も言っていた。
「余計な手間を増やしたくないってこともあるわね。面倒事は、極力起こしたくないの」
アリアさんは穏やかに微笑んでいるけれど、ちょっと寂しげにも見えた。
「それにしても占いとは、いい商売を思いついたのね、ユエル。容易く人間の生気を得られそう」
「ああ」
ユエル様は素っ気なく応えた。そんなユエル様を、アリアさんはなんだか可笑しげな様子で眺め、真意を窺測(きそく)しているようだった。
「このためにわざわざ手相を研究したりはしてないんでしょう、ユエルのことだから。というより、そもそも占い自体まともにやってあげてないんじゃない？」
「たしかに手相に関しては詳しくないが、占いらしいことは言ってるさ」
「ユエルらしいこと」
アリアさんはころころと笑い、ユエル様は眉をしかめてため息をつく。
わたしの知らないユエル様の一面が、その美麗な容貌に表れていた。……新鮮で、少しドキドキする。
ドキドキするといえば、生気の飲み方もそうだ。
首に牙をたてる必要はないわけだけど、生気の得やすい場所というのはあって、首もその一つ。こめかみもそうだし、あとは手首も

そう。軽く指先を当てれば、生気はそこから流れ込んでくる。
今回、この避暑地でユエル様が思いついた商売は、容易く生気を得るのが第一の目的だった。
占いにかこつけて、お客様の……女性客の手を取り、そこから生気を吸い取る。
拒む人なんているわけもなく、生気は飲み放題だ。
「あたしも何か考えなくっちゃねぇ。人通りの多い所に出向いて手当たり次第…っていうのは面倒そうだし。ここまできて飢えて消えちゃうなんて嫌だもの」
ワイン色のマニキュアが似合う細い指を唇にあて、アリアさんは小首を傾げる。
見た目判断なら二十代後半くらいに見えるアリアさんだけど、仕種は少し子供っぽい。
ユエル様が「抱きつく癖をなんとかしろ」と言っていたみたいに、すぐにスキンシップを取りたがるのも、子供っぽい一面を表わしているともいえる。
「それなら、乗馬クラブにでももぐりこんだらどうだ？　以前、観光客相手の講師を募集していた。ここから少し離れているが、車で十分ほどだろう。周辺にはペンションもある」
「あら、それ、いいわね！　若い男の子や女の子が沢山いそうだし」
「もう募集は締めきっているかもしれないが、まぁ、そのあたりはなんとでもなるだろう」
「ええ、そうね」
ユエル様の提案にアリアさんは即座に乗った。
ちなみに、吸血鬼たるこの方達は、一種の魔法みたいなものを使える。“幻惑術”と言っているけれど、つまり洗脳みたいなものかな。人の思考や記憶を操作できる。
「人聞きの悪いことを言うね、ミズカは」
せめて催眠術と言いなさいとユエル様は言うけれど、大差ないと思う。

この屋敷だって、たぶん不動産屋を幻惑の術でだまくらかして手にいれたのに違いないもの。
学校にもぐりこむ時だって、そう。
ユエル様は教員免許なんて当然持っていない。というより、もっと重要な戸籍すら持っていないのだから、人外的な手段をとらなくちゃ、教師になんてなれるわけがない。それは、わたしにしたってそうだけど。
「アリアさん、こちらでのお住まいはどちらなんですか？」
「まだ決めてないのよ。あまり人目につきたくはないけど、一人じゃ寂しいし」
「それじゃぁ」
主人の許しも得ず、つい口を出してしまった。
この屋敷に滞在すればいいではないか、と。

4．風入《かざい》れ

二階の廊下の突き当たり、窓を開け放しておいたベランダに、紺色に白の水玉模様のトランクケースが横倒しになって放置されていた。そのトランクケースを起こして、その他に荷物がないか、確認した。

どうやら荷物はこのトランクだけみたい。

ずいぶんと大きいトランクだけど、これも持ってここまで登ってきたのかしら、アリアさん。ちょっと考えつかないけれど。

「ふぅ……」

ため息をついたのは、トランクが存外重たかったからだけじゃない。それに、キャスターがついていたから、移動させるのにさしたる労力もかからなかった。

ため息は、わたし自身の先走った発言のせい。

差し出がましいことを言ってしまった。

ユエル様のご友人だから、別段構わないだろうと思ったのだけど。もちろん、迷惑といった風ではなかった。でも、ユエル様は一瞬躊躇したみたいだった。

「……そうだな。そうしたらいい。部屋は余っているから、……ミズカが良いように整えてくれるだろう。寝具等も一通り揃えよう」

とは言ってくれたものの、何か言いたげにわたしを見、嘆息した。

――立場を弁えなくちゃ。

わたしはユエル様に従属している眷族で、“仲間”というわけではないのだもの。

「気をつけなくちゃね、わたし！」

ひとりごちて、片手で頬を叩いた。

トランクのキャスターは軽やかに回ってくれたのだけど、わたしの足取りはちょっと重い。

ともあれ、ユエル様の寝室と同じ並びにある一室に入った。

二階には、客用の個室がいくつかある。どの部屋も一応は毎日掃除を欠かしていないから、汚れや埃はない。生活感がないだけ。
あとで、予備のお布団をベッドにセットしておこう。他に何か入用のものがあれば聞いて、用意しておこう。
そんなことを考えつつ、ウォークインクローゼットの脇にスーツケースを置いてから、閉め切った部屋の空気を入れ替えるために、フランス窓を開け放った。
緑色の芳香が部屋に入り込んでくる。
高原の風は、心地がいい。
苔や羊歯が多いに繁殖するほど、この高原地は湿度が高くて、吹きつける風にもしっとりとした湿気がある。緑色の粒子でできてるんじゃないかな思う程。きっと、ユエル様の瞳のような緑だ。優しくて、捉えどころがない。
白いレースのカーテンが風にはためいた。
襟元に髪の毛先が擦れて、こそばゆい。風に乱れた髪を撫でつけながら、踵を返した。
窓から離れようと背を向けたわたしの肩に、レースのカーテンが触れ、それを払おうとしたその時だった。
「かわい子ちゃん、みーっつけたっ！」
いきなり、そう、まったくもって突然っ！　何の気配もなかったはずなのに、背後から何者かに抱きつかれた。いえ、肩を掴まれたというのが正解かもしれないけれど。
とにもかくにも突然で！
だから、絶叫したって無理はないと思うのっ！
「きっ、きゃぁぁぁっ！！」
わたしの叫び声は、吸血鬼に襲われたヒロインのごとく響き渡った。
真昼の陽射し満ちる、夏の森に。

次の瞬間、わたしはその何者かに押し倒された。
うしろで、「わっ」と戸惑ったような声がして、その途端、足元がふらついた。
だから、単にバランスを崩して、後ろに倒れてしまっただけかもしれないけれど、ともかく、不可抗力的に、窓の側にあったソファーに倒れこんでしまった。
何者かの体の上にのしかかるような体勢になったみたいで、　その時に、首筋に何か……ちょっと冷たくて濡れてるものが、ぴとっとくっついた。
「……っ！？」
それが唇だって分かるまでには、三秒ほどの時間がいった。
頭の中はもう真っ白で、ほとんど反射的に、わたしはぎゅぅっと目を閉じて、思いきり「それ」を払いのけた。
手のひらに痛みが走ると同時に、バチンッと高い音が鳴った。
直後、――
「ミズカ！？」
わたしの絶叫を聞きつけて、ユエル様が駆けつけ、部屋に飛び込んできた。
「ミズカ！」
血相を変えたユエル様がこちらに向けて手をかざした。わたしの背後に入る人物を目にした途端、ユエル様の険相に凄味が増す。眉間を寄せ、手のひらに力をこめている。
「だっ、大丈夫ですっ」
はっとして、慌ててユエル様を止めた。
「大丈夫ですからっ」
膝の上まで捲くれ上がっていたスカートの裾を慌てて直し、大急ぎで立ち上がった。けど、足に力が入らなくて、膝ががくんと折れ、よろけた。傾いだわたしの体をさっと手を伸ばして後ろから支え立たせてくれたのは、わたしに絶叫をあげさせた不法侵入者だった。

「おっと、危なかった。セーフセーフ」
背後から声がする。妙に明るく、馴れ馴れしげな声だった。
「この通り大丈夫だから、そういきりたたんでくれよ、ユエル」
「えっ、えと？」
わたしはユエル様と侵入者の顔を繰り返し見やった。
侵入者は若い長身の男性で、にこにこと笑っている。そして相変わらずわたしの腕を掴んだまま離さない。
「えと、お知り合い……なんですか、ユエル様？」
わたしが問うと、ユエル様はあからさまに不機嫌な顔になった。けど、どうやら肯定しているらしい。
「ミズカから手をどけろ、イスラ。さもなくば」
「あーはいはい。しかしさすがにユエルの眷族なだけあるね。手の早いこと、早いこと」
「……っ」
改めて侵入者の彼の顔を見ると、左の頬が赤くなっていた。さっき思いきり平手打ちをしてしまった、その痕だ。
「すっ、すみませんっ、わたしったら！　思いっきりひっぱたいてしまってっ！　あ、それに体の上に倒れ込んで……、お、重かったですよね」
「平気平気。それに驚かせちゃった俺が悪いんだしさ」
「でも、痛かったですよね……。あの、本当にごめんなさい」
平謝りするわたしに、侵入者の彼はにこやかに応対してくれている。
その一方で、ユエル様はますます不機嫌顔になっていった。
「謝る必要などない、ミズカ。こちらに来なさい」
「え、でも……」
「いいから、ミズカ」
「……」
侵入者の彼に軽く頭を下げてから、ユエル様の言葉に従った。
「久しぶりに会うってーのに、つれないなぁ、ユエル」

「招いた憶えはない。ミズカ、やつは放っておいて構わない。行こう」
「ユ、ユエル様、でもっ」
「そーかぁ。ミズカちゃんって言うのかぁ。その娘が栄えあるユエルの眷族で……」
「イスラ」
冷たく、ユエル様は彼の言葉を遮った。
「煩い、イスラ。私を怒らせるな」
「俺に対して怒ってないおまえさんなんて見たことないね」
「その通りだな」
「アリア、来てんだろ？　途中まで一緒だったんだけどなぁ。それとおまえさんに会いたいってやつがいて、一緒に来たんだが」
「彼でしょ？　玄関から入ってきたわよ、ちゃんと」
いつの間にか現れたアリアさんが、口を挟んだ。隣に、十歳前後と思われる男の子を伴って。
「初めまして」
ぺこりとお辞儀をしたその男の子は、続けて謝罪した。
「父が失礼をしたようで、ごめんなさい。よく叱っておきますから」
――ちっ、父っ！？
亜然愕然の単語が頭を叩く。
わたしは呆然と立ち尽くし、申し訳なさげな顔をしている男の子を凝視した。

――ともあれ、わたし達はリビングに戻った。
「こんなところで立ち話もなんでしょ？　いいからまず」
と、アリアさんがその場を取り仕切り、みなをリビングへと急きたてた。
ユエル様は不機嫌顔で黙りこみ、一人掛けのソファーに腰を据え、

不服げな様子で腕を組んでいる。
　イスラと名乗った侵入者の彼は、窓の縁に手をつき、壁にもたれかかって立っていた。額にかかる茶褐色の髪をかきあげ、それからユエル様と同じように両腕を組んいる。ユエル様の不機嫌顔を面白がっているような……気がする。
　そのイスラさんのいる場所に程近いソファーに行儀よく座っているのは、よくよく見ればなんとなく面差しがイスラさんにていなくもない、男の子。
「お初にお目にかかります。イレク・オーベリと申します」
　イスラさんの一人息子だという男の子は、会釈をした後にそう名乗った。
　わたしはというと、アリアさんに促されてイレクくんの、テーブルを挟んだ向かい側のソファーに腰をおろしている。へたり込んでる場合じゃないとも思ったのだけど、この唐突な事態に少なからず疲れてしまった。
「ミズカちゃん、少しは落ち着いたかしら？」
「……はい、……なんとか」
「イスラも、いったいどういうつもりでこの子を襲ったりしたの？　怖い思いをさせて！」
　厳しい口調で、アリアさんはイスラさんを窘めた。
「いやぁ、別に襲ったつもりはないんだけどなぁ。でもあんまり可愛くて、つい」
「言い訳になってませんよ、父さん。その前に、きちんとミズカさんに謝罪なさるべきです」
「父さんって言うなって言ってんだろ？　こんな若い男におまえみたいな子供がいるなんて、どう考えたって不自然だろ？」
「……」
　その通りだ、とは思う。
　兄弟というのならまだしも分かるけれど、親子と言うには見た目年齢にそぐわない。

イスラさんは見た目、二十代前半か、半ばくらいの年齢に見える。いかにも遊び人といった風体で、気安さと軽率さが絶妙に混じりあった人懐こい笑顔に、吸血鬼らしさはかけらも感じない。洗いざらしのTシャツに、着古した感のあるジーンズがよく似合っている。爽やかな好青年といった外見だ。

一方で、息子さんのイレクくんは、いかにもお坊ちゃん然としていて、綿シャツもきっちりボタンをしめている。年の頃は……十二、三歳といったところだろうか。けれど言動はとても落ち着いてて、おっとりとした雰囲気だ。茶褐色の髪は父親と同じだけど、瞳の色はややイレクくんの方が薄い茶色だ。イスラさんの方が濃くて、コーヒー色をしている。

「こいつ、また面倒な年頃で成長止めやがってさ」

「いつも一緒に行動しているわけではないのだから、父さんが面倒がる必要はないでしょう？」

「あら、そうなの？　まぁ、そうねぇ。始終一緒にいて、イスラの面倒なんか見ていられないわよね」

「おい、アリア、それ逆だろ」

「どうせ親らしいことなんてしてないんでしょ、イスラ？」

「それでも一応は父親ですから。面倒事を起こさないよう、たまには見張ってなくてはいけませんし」

「まぁ、イレクは父親に似ない、真面目ないい子なのねぇ」

「おいおい、おまえら、勝手なことばっか言いやがって」

この会話に、ユエル様はまったく参加してこない。押し黙ったまま、じっとして動かない。

アリアさん、イスラさん、イレクくんに、それぞれに訊きたいことはあったのだけど、それよりもユエル様の事が気にかかって、わたしはおそるおそる、声をかけた。

「ユエル様、あの」

とはいえ、何を言っていいのかわからず、

「お茶、新しいものをお持ちしましょうか」

なんて、バカの一つ覚えみたいなことを言ってしまった。
「……」
ユエル様は嘆息した。深く。そして、何かを諦めたか、あるいは覚悟を決めたみたいに。
「そうしてくれ、ミズカ。……皆の分も、頼む」
「はいっ」
応え、わたしは勢いよく立ち上がった。
「ミズカ、続きを話すから」
「はい？」
「こいつらを交えて話すが、それでも、良いね？」
「え、はい、それは。ユエル様がいいのなら、わたしは構いません」
「……そうか」
ユエル様はまたため息をついた。
わたしは首を傾げた。
なんだろう、ユエル様？　表情が、暗い。
気になったけれど、今はとにかく、新しくお茶を淹れてこなくちゃ。
わたしは大急ぎでリビングを出て行った。
背後に、三人の視線を感じながら。

話の続きというのは、“眷族”のことだった。そして、吸血鬼の子孫については、それに付随してくるもののようだ。
即座に口を挟んだのは、イスラさんだった。
「なんだおまえ、ミズカちゃんにまだ説明してなかったのかよ？ありえねー。ってことは、なんだおまえ、まだ」
「父さん、少し黙って」
「へーへー」
ふと気がついて、わたしは改めてイスラさんとイレクくん父子を

見やった。
――そうだ、この二人は“親子”なんだ。
え、でも、吸血鬼は子孫を残せないって聞いていたのに？
「何事にも、例外というものはあるものだよ、ミズカ」
そう言ったユエル様の後に、アリアさんが続けた。
「例外というか、種族的な特徴なのよ」
「種族的特徴、ですか？」
「そう。ユエル？　あたしから話しても構わないのかしら？」
ユエル様は黙したまま、けれど諾と目で頷いた。
アリアさんは言葉を継ぐ。
「あたし達の種族の中には、期間限定の“生殖者”がいるの。つまり子を成せる“力”を持った者が、時々現れるのよ。出現の法則はとくにないみたいで、つまりランダムね。あたし達は基本、群れない種族だから、どれくらいの生殖者が同時期に現れるかは把握できないのだけど」
「……はぁ」
「その上、生殖能力は期間限定なの。その期間は個体差があるから一概には言えないけれど、大体百年から二百年くらいじゃないかしら」
「個体差というのは、そいつの力具合とも言えるな。強ければ、期間は長い。……たぶんね」
いつまでも口を噤んではいられず、イスラさんが再び口をはさんできた。
「俺は二百年近く期間があったぜ？　ギリギリのところで間にあったから良かったぜ」
「どうせ、その猶予期間中、遊んでばかりいたんでしょう、父さんの場合は」
「必要な品定め期間だったと言ってほしいね」
「ふぅん？」
イレクくんは何か言いたそうに、わざとらしく鼻を鳴らした。

アリアさんは話を元に戻した。
「ある年齢に達すると生殖者は生殖能力が発現するの。自覚症状は、あるわ。これはどう説明していいかわからないけれど、ああいうものは不思議と、ふっと気がつくのね。それに体内に余分な生命が溜まっていくのがわかるのよ。そしてもう一つ、生殖者は他の者とは違う“力”を与えられる。これは、とても重要な“力”よ」
はあ、と相槌をうった。
あまりに不思議な話にわたしは目を瞬かせる。
分かったような、分からないような。
分かったことといえば、“生殖者”という特別な存在が吸血鬼達の中にいるということ。そしてその“生殖者”だけが唯一、子孫を残せるのだということ。
「生殖者の相手は、大抵の場合、人間から選ばれるの。実際イスラの相手も人間の女性だったし、あたしもそうだったわ」
「人間から選べという決まりはないけど、同族の……つまり“生殖者”と出逢うのはまずないな。良くも悪くも、俺達は個人主義だからね、生殖者同士が一堂に会するなんてことはめったにない……どころか、無いに等しい」
イスラさんの言葉を受けて、アリアさんが小さく笑った。
「こうして、生殖期間が終わった後でなら会えるのにね。神様とやらがいるんだとしたら、きっととんでもない気紛れ屋さんなんだと思うわ。大体、あたし達みたいなモノが存在すること自体、神様とやらの悪戯みたいなものですものね」
「言えてるな」
アリアさんとイスラさんの会話にユエル様はまったく参加しない。黙して、表情を消している。淹れなおしたお茶にも手をつけていない。
わたしはそんなユエル様の様子が気になって、そわそわと、アリアさんとユエル様とを何度か見やった。
「ユエル？　眷族の説明くらいはあなたからしたら？」

落ちつかなげなわたしに気づいてくれ、アリアさんはユエル様に話をふってくれたのだけど。
「……」
ユエル様は僅かに眉をひそめただけで、端正な唇を動かしてはくれなかった。
「まぁ、いいけど。そうそう、それで、“眷族”ね？」
アリアさんはわたしの方に向き直った。
「ほとんど説明がなされていなかったみたいね？　眷族という、とても重要な存在のことについて」
「重要って、眷族が、ですか？」
「そうよ。とても、大切な存在なの」
そういえば、ユエル様も言っていた。「とても大切な存在なのだ」と。
もう一度ユエル様に目を向けると、ユエル様は、今度はわたしから目を逸らさなかった。
けれど、深い湖水のような緑の瞳は、何も語ってはくれない。
沈黙を保ったまま、わたしの一挙一動を見つめている。
……思いだす、あの時もこうしてわたしを見つめてた。
わたしを眷族にしようとした直前。じっと見つめて、わたしに何かを見出そうとしているような――……
「あ、あの、それでっ」
話を進める前に、わたしは確認のため、訊いてみた。
アリアさん、イスラさんの両人は、生殖者なんですね、と。
答は、是だった。ただし、「だったのよ」と付け足して。
そして、さらに付け加えたのだ。
「ユエルもよ」、と。

5．生殖者

わたしの脳内は「一足す一は？」と訊かれたら、「三ですか」と答えそうなくらいのパニックに陥っていた。

だって！　生殖者についての説明もいまひとつ呑み込めていない体たらくなのに、ユエル様がその“生殖者”だなんて！

そりゃぁ、今までの説明を聞くからにして、たしかにユエル様はわたしという“眷族”を持っていて、それはつまり“生殖者”ってことなんだろうけど……！

イスラさんは呆れたようにユエル様を見やった。

「なんだよ、おまえ、それすら話してなかったのか？」

「……」

「なんだ、じゃぁ、ミズカちゃんは違うのか？　眷族にしておきながら？」

「……煩い、イスラ」

凍りつくほどの冷ややかな声が、ユエル様の口から発せられた。けれどイスラさんはまったく動じない。

「酔狂でか？　だとしたら、ずいぶんと悪辣な――」

「煩い、黙れ」

「イスラ、言葉が過ぎるわよ。だいたいユエルが――って、ユエル？」

ユエル様は堪りかねたように立ち上がると、そのまま何も言わず、リビングから出て行ってしまった。リビングのドアは開け放たれたまま、そこから生ぬるいのか冷たいのか、どちらともつかない風が忍び込んでくる。

「ユッ、ユエル様っ！？」

わたしは慌てて立ち上がったものの、足がすぐに動かず、もたついてしまった。。

「あーらら。怒らせちゃった。ああなると怖いっていうか面倒よう、

、ユエルは」
アリアさんは肩を竦め、大きなため息をついた。けれど言葉以上には困ったよう様子でもなくて、揶揄めいた微笑が口元を緩ませていた。
「知るか。自分が悪いんだろ？　あいつの我儘は今に始まったことじゃないし」
イスラさんは吐き捨てるようにそう言ったけれど、アリアさんと同じように、別段気にするでもなく、「いつものこと」くらいに思っているみたいだ。
「父さんも悪いよ。神経を逆なでするようなことを言うから」
自分の父親が原因で、初対面のユエル様が機嫌を損ねてしまったことに、イレクくんは少々困っているようだ。
そしてわたしはというと――、
「あのわたしっ、ちょっと様子、見てきますっ！」
やっぱりユエル様を放ってなどおけなくて、急いで後を追ったのだ。

二階へ上がっていく階段のその途中で、ユエル様をつかまえた。
「ユエル様！」と声をかけたのに、ユエル様は足を止めてはくれなかった。
階段を駆け上り、腕を伸ばした。
とっさに上着の裾をつかんで、その拍子にユエル様の上体がぐらつき傾いだ。ユエル様はようやく足を止め、こちらに振り返ってくれた。
「すっ、すみませんっ」
怒られるかと思った。「まったく乱暴な。私を突き落とすつもりか？」って。
でもユエル様は一瞬険しい顔をしたものの、わたしを叱ったりは

しなかった。それどころか――、
「ミズカ」
ふと緑の双眸を細めて、わたしを見つめ、そしてわたしの首筋に手を当てた。
突然のことで驚いたのと、ユエル様の手が冷たかったのとで、思わず肩を竦ませた。
「さっきは、大丈夫だったか？」
「え？」
わたしを見つめるユエル様の瞳の緑が、いつもより濃く、深い。
「怪我はない？　イスラに、生気を飲まれてはいまいね？」
「は、はい。大丈夫です。すみません、お騒がせしてしまって……」
「騒ぎを起こしたのはイスラだ。ミズカが謝ることではないよ」
「……あの、ユエル様」
手が、離れた。ユエル様の冷たい手の感触だけが、触れられていたそこに残った。
「大丈夫ならいい。……私は少し休む。しばらく一人に」
「ユエル様」
わたしはユエル様の上着を掴んだまま離さず、必死になって取り縋った。
「ユエル様、眷族っていったい何なんですか？　教えてください」
「……」
眉を曇らせ、ユエル様はわたしから視線を逸らす。
「……アリアにでも、聞けばいい」
「嫌です。ユエル様の口から聞きたいんです」
「ミズカ」
「だって、わたしはユエル様の眷族なのでしょう？　それなら、ユエル様の口から教えてもらいたいんです」
わがままを言ってるって、自分でもわかってる。
でも、どうしてもユエル様の口から聞きたい。だって、とても重要な事だと思うから。

「たぶん……ですけど、ユエル様から聞かなかったら、きっと……後悔すると思うんです」
「ミズカ……」
「ユエル様だって、さっきはご自分から話そうとしてらしたじゃないですか。だからきっとユエル様も後悔します。自分が話すべきだったって」
ユエル様はわたしの手を取った。その手は、やっぱりまだ冷たい。
「……」
そして、無言のまま苦笑した。
「ユエル様」
「わかった、話そう」
もう一度、今度は深くため息をつき、ユエル様は観念したかのように微笑した。
ユエル様の秀麗な顔にもう険しさはない。ただ、少し硬い。
「眷族というのはね、ミズカ」
わたしの手を離して踵を返し、ユエル様は再び階段を登り始めた。わたしはその後を追う。
ユエル様は歩きながら語った。いつになく淡々とした口調で、こちらを見もせず。
「端的に言うと、生殖者の子を宿すための存在なんだよ」
「え……？」
「人間は、そのままの状態では我々の子は成せない。姿形は似ていても、やはり私達は人間ではないからね。異種間の婚姻というものは、それなりのリスクを負うものだよ。――最悪の場合、死んでしまう」
「……」
「しかし、私達が子孫を残すためにはやはりどうしても人間が必要になってくる。いや、こうして生存していくだけでも人間は必要なのだが、ともかく、それとは別に人間が必要になってくるんだよ。むろん同族間で生殖者が見つかればそれにこしたことはないが、そ

の可能性は低い。イスラが言ったように」
ふ、と息をついたユエル様の表情は、ここからは窺えない。わたしはただひたすらにユエル様の背中を見つめ、追い続けている。
階段を登りきってもユエル様はこちらを振り返り見てはくれない。
「結局、“生殖”には人間の力を借りる方が手っ取り早い。だからそうするために、人間にこちらの生気を与えて、私達により近い存在にする。私達“吸血鬼”の子を成すための存在、……それが、“眷族”だ」
子を成すための存在……それが“眷族”？
それじゃぁ、ユエル様の眷族のわたしは、……――
ユエル様が私室の前で立ち止まるより前に、わたしは歩みを止めていた。思考も停止した。
ユエル様は振り返ってわたしを見、
「必ずしも、そうしなければならない、というわけではないんだよ、ミズカ」
宥めるような口調でそう言った。
「眷族は、子を成すためだけ《・・》の存在ではない」
「……」
何かを訊き返そうとして、けれどその「何か」が喉の奥に引っかかって声にならない。
わたしとユエル様の間には、わたしの歩数で計るなら三歩分くらいの距離がある。狭いような、それでいて、ひどく遠く感じるその距離。
たった一歩を踏み出せずにいて、ゆえに、距離は縮まらない。
ユエル様は微笑んでいる。けれど、無理に作ったみたいな、不自然な笑みだった。
「眷族は我々の“道具”ではない。自分の意思があるだろう？」
「でも、あの、ユエル様……」
「あまり深く考えなくてもいい」
「でっ、でもっ」

思わず声が上擦ってしまう。
周章し、心臓がどきどきと高鳴っている。
「……そういうことだ。わかったね？」
ユエル様はわたしから目を逸らし、疲れたように言った。
「すまないが、ミズカ。しばらく、ひとりに」
「ユエル様！」
わたしが止めるのもきかず、ユエル様は断ちきるようにそう言って、寝室に入ってしまった。
「ユエル様……」
鍵などないから入ろうと思えばたやすく扉は開けられる。
けど、できなかった。
ユエル様の無言の拒絶は、わたしにはあまりに重い枷だった。

＊　＊　＊

――あの日。
季節は憶えていない。少し寒かった。満月が中天にあって、月明かりの美しい夜だった。
バルコニーにひとり佇んで、夜空を眺めている人を見つけた。
呼ばれたのか、探していたのか、その記憶も曖昧だった。
ただ、その人を見つけてホッとしたのと同時に、寂しげなその佇まいに胸が痛くなった。
銀の髪が夜風に揺れていた。月光を受けて光るそれは、まるで天使の羽根のようだと思った。
息を呑んで見惚れてしまうほど、鮮麗な、その人。わたしの雇い主の、ユエル様――
わたしに気がついて、ユエル様は髪を梳きあげながら、ゆっくり

と振り返った。
ユエル様は微笑んでわたしの名を呼び、白い手をわたしに向けて伸ばした。
「ミズカ」
切なげな甘い声がわたしを促す。もっと近くにと緑色の目で請われ、わたしはおそるおそる近づいた。差し伸べられた手を、どうしてか、取ってしまった。
わたしのような者が触れていいはずないのに。
こうして近づくことすらおこがましいというのに。
ユエル様はまじろぎもせず、わたしの手を握ったまま、緑色の双眸のわたしを映している。
「ミズカ、聞いてほしい」
「……はい」
ユエル様の指先の冷たさが、皮膚を破って浸透してくるようだった。
怖い……のではない。でも何か……異質な何かをユエル様に感じた。
目を逸らせない。鼓動が早まる。
「なんでしょう、ユエル様？」
なんとか平静を装って、尋ねた。
ユエル様はわずかに眉をひそめ、一瞬ためらった後に、告げた。
「これからも、ずっと、傍にいてもらいたい。……遥かな道程を、私と共に」
漠然とした、その言葉。
「ミズカに……ついて来てもらいたい」
「……」
ユエル様の真摯なまなざしを受け止めるのが苦しかった。喉の奥が痛んで、胸が張り裂けそうだった。
鼓動の高鳴りがユエル様に聞こえてしまっているのではないかしらと思う程、辺りは静かで、風の音すらしない。

それは、どういう意味なんですか、ユエル様……？
――“傍にいてもらいたい”だなんて……
「……」
うっかり抱いた愚かな期待をユエル様に否定されるのが怖くて、訊き返せなかった。
僅かに残っていた冷静さを取り出して、胸に咲いた期待をさっさと打ち消したわたしは、言葉の上っ面だけをそのままなぞり、「出かけるので、随従せよ」と言っているのだと勝手に解釈して、自分を納得させた。
「はい、お供いたします」
わたしは答えた。それ以外の言葉なんて浮かばなかった。
そう答えるのが最良なのかは分からなかったけれど、「お供します」という気持ちに偽りはなかった。だけど……――
わたしの返答を受け、ユエル様は少し困ったような諦めたかのような……安堵したような、複雑な微笑を浮かべた。
ユエル様の、わたしの手を握る手に力がこもった。そしてもう片方の手がすっと伸び、距離を詰めてきた。
わたしはユエル様のまなざしに釘づけになり、立ち尽くしている。いったい何が起こっているのか、何が起こるのか、さっぱり分からずに途惑うばかりだった。瞬きすらできない。
「“目醒め”たら話そう。私のことも」
「え？」
「……ミズカ」
「……っ！」
ユエル様の冷たい指先が、顎に触れた。
わたしの顔を仰向かせ、ユエル様は囁いた。
「目を閉じて」
けれど、すぐにはその言に従えず、瞠目していた。近づいてくるユエル様の顔を……緑の双眸と紅い唇を愕然と見つめていた。
ユエル様の、この時異様に紅く色づいていた端正な唇が、わたし

の首に触れた。噛みつかれたかのような痛みと熱が走り、小さな悲鳴を漏らして目を閉じた。
「……ユエ……さ……」
頭の芯がぼうっとし、次第に意識が遠のいていくのが自分でもわかった。意識を奪われているのだと、わかった。
――意識が途絶えそうになる、その刹那。
「……すまない、ミズカ……」
ユエル様の声が聞こえた気がした。首に走った痛みが、僅かの間、途切れた。
意識を手放す間際、わたしはうっすらと目を開けた。ぼやけた視界はすぐに暗闇に閉ざされた。
「……」
淋しげな影を落とす緑の双眸が、人間だったわたしが最後に視た色だった。

6．気紛れな空模様

うやむやのうちに、アリアさん同様イスラさんイレクくん親子もこの屋敷に滞在することになり、わたしはその準備に追われた。

アリアさんとイスラさんが協力して、寝具やリネン、その他の生活用品を揃えてくださった。その手際の良さというか、行動力の早さには驚かされた。ここに到着してまだ僅かの時間しか経ってないというのに、もういろんなお店を網羅しているみたいだった。「ここに来る前に、ちゃんとガイドブックをチェックしてきたもの」と、アリアさんは朗らかに笑った。「とくにアウトレットなんかのお店はね」

そういえば、普段おっとりと構えている鷹揚なユエル様も、こういった手配は実に素早い。“幻惑術”を駆使して、生活空間をあっという間に整えてしまう。適応能力が高いということなんだろうか。「人間社会にうまく融け込むために、必然的に身についた能力といえようね」

そんな風にユエル様は述懐していたっけ。

「なし崩しに、僕達までお世話になることになってしまって、すみません」

生真面目で律儀な性格であるらしいイレクくんは改めて謝辞を述べて、それから各人が寝泊まりする部屋を一緒に整えてくれた。

父親のイスラさんとは「できれば別室がいいです」とのことで、イレクくんにも個室を宛がった。イスラさんも「その方がありがたいね」と皮肉げに返していた。

すげない会話をしているイスラさんとイレクくんだけど、仲違してるようではなく、アリアさんなどは「何のかんのといっても仲良し親子よねぇ」とクスクス忍び笑っていた。

俄かに忙しく賑やかになり、おかげで多少は気が紛れた。

けれど、やっぱりどうしても部屋に閉じこもってしまったユエル

様のことが気がかりだった。
昼を過ぎても、日が沈んでも、ユエル様は出てきてくれなかった。
一度だけ、お茶を用意しましたとドアの前で声をかけたけど、返事はなかった。暗くなっても明かりがつく様子はなく、おそらくは眠っているのだろうと推察できた。……けれど。
けれど、不安でたまらなかった。
――ユエル様……
わたしはどうしたらいいんですか？　ここにこのまま、こうして居ていいんですか？
――成す術もないままで……。

＊　＊　＊

雨が降りそうなほどの空模様ではないけど、昨日とうってかわっての曇天は、わたしの心を反映しているようで、ちょっと残念なような腹立たしいような奇妙な具合だ。
さらには、昨日とうってかわった態度のユエル様にも、少しばかり腹を立てている。
「君が朝寝坊なんて珍しいね、ミズカ？」
「……」
にこりと微笑んで、ユエル様はわたしの顔を覗き込んでくる。
昨日の、あの重々しく冷たい態度はいったい何？　と思わせるほどの笑顔っぷりだ。
もうっ！　だいたい誰のせいで寝過ごしたと思っているんですか。
「イレクがコーヒーを淹れてくれたから、飲んでおいで。今日はちゃんと開店するから、それまでに支度も済ませておかなくてはね」
ユエル様のことが気にかかってなかなか寝つけなかったというのに（といっても、さすがに動き回って疲れたのか、寝つきは悪かっ

たけど気づいたら眠ってて、そして今に至っているわけだけど）、まるで何事もなかったかのような暢気顔は、どういうこと？
「ユエル様、起こしてくださってありがとうございます。……けど」
「けど、なんだい？」
「寝室に忍び込んでくるのは心臓に悪いからできればやめてほしいと、以前から申し上げていたと思うのですけど」
「ああ、そうだったかな？　しかしそうすると、ミズカはきっと昼過ぎまで寝こけてしまうに違いないだろう？」
「ユエル様じゃあるまいし、そんなことはありません。寝起きはユエル様よりはいいつもりです」
わたしはまだ寝台から出られずにいる。夜着のままということもあるし、ユエル様が寝台に腰をおろしているからだ。
どうやらわたしが起きるまで、そうしていたらしい。
もう、恥ずかしいったらないんですけど、ユエル様！
きっと間の抜けた寝顔をしていたに違いないもの！　癖のある髪は寝乱れてさらにくしゃくしゃになってたろうし、寝相は……そんなに悪くないはずだけど、もぞもぞ動いてただろうし、……変な寝言とか呟いてなければいいけれど。
ユエル様が以前、
「ミズカは仔猫のような寝方をするね」
と笑ったことがあった。
それって、どんな寝方なんだろう……？
落ち着きがないってことなのかな。
ユエル様はからかうように笑って、「見ていて、くすぐったい」と答えた。
どういう意味なのかますます分からず、わたしは首を捻ったものだ。
本当にユエル様は謎めいた言動の多い方だ。気紛れで、不可解で、意味深なところがあって、わたしはいつもそんなユエル様に振り回されてばかりいる。それが嫌だというのではなく、ただ少しばかり

困ってしまうのだ。
今朝もまた、わたしを困らせて嬉しげに微笑んでいるユエル様は、とうに着替えを済ませている。ユエル様の本日のお召し物は、内衿に黒サテンがちらりと見えるボタンダウンの白シャツに、ヴィンテージのジーンズ。グリフィン模様の銀のバックルがアクセントになってて、全体的にカジュアルなスタイルだ。ちなみに嵌めている指輪やネックレスといったアクセサリーも、すべて銀。
吸血鬼って、狼男がそうなように、銀が苦手だという設定なはずなんだけど、ユエル様は金より銀を好む。
以前、苦手なのではないですかと確認したことがある。
「銀の弾丸なら、たしかに苦手だね」
ユエル様は悪戯っぽく笑って答えたっけ。
そりゃぁ、弾丸は苦手でしょうとも。
撃たれて当たった経験はないとユエル様はくすくす笑いながら言って、わたしを青ざめたり赤らめたりさせた。
わたしがそんな他愛もないことを思い出したのを察したのかどうなのか、ユエル様は悪戯っぽく微笑んでいる。何か訊きたげにわたしの顔を覗きこみ、肩に流れた銀の髪を軽く後ろへ払った。その何気ない仕草ですら、典雅で美しい。
ユエル様は痩身で上背もあるから、どんなスタイルもとてもよくお似合いで、シンプルにまとめている時でも、安っぽさは全然感じられない。ユエル様自身に高級感が溢れているからなんだろう。
それにしても今日のスタイルは、「占い師」としては、ちょっと神秘性に欠けやしないかしら？
全身黒ずくめにして、仮面をつけたり妙な形の帽子を被ったりするよりはいいのかもしれないけど。
――ううん、そんなことよりっ！
目覚めて、わたしがどれほど驚いたか！
容姿端麗な銀髪の美青年が、間近でじっと覗き込んでたんだもの！
目を開けて、緑の瞳とぶつかった途端、悲鳴こそ上げなかったけ

ど、心臓が口から出そうになって、一気に心拍数があがって息が止まりそうになった。
優しい声音で「おはよう、ミズカ」と囁かれては、硬直したって仕方ないと思うの！
心臓に悪い起こし方はしないでくださって、何度もお願い申し上げているのに！
「親切に起こしにきたというのに文句を言われてしまうとは、やるせないね」
「いかにも嘘っぽくしょんぼりしないでください。――もう、いいです、ユエル様、わたし、着替えますから」
語尾に、寝室の扉を叩く音が重なった。わたしに代わってユエル様が応えた。
「お邪魔します」
入ってきたのは、イレクくんだった。
「お早うございます、ミズカさん。なかなか降りてこられないので、こちらにコーヒーをお持ちしました」
昨日はよそゆきの格好をしていたイレクくんだったけれど、今日はもう少しラフな格好だ。水色の半袖パーカーと半ズボン、そして白いスニーカー。子供らしく、似合っている。けど、「子供」ではないのよね。
「ありがとう……ございます、え、と、イレクく……じゃなくて、イレクさ……」
イレクくんはわたしよりもうんと年上なのだと知って、呼び方を改めようとした。けれどイレクくんは、
“くん”でいいと、昨日も言ったでしょう？　敬語も必要ないって。見た目十歳前後の僕に“さん”付けは不釣合いですよ」
そう言って、やんわりと“さん”付けを断った。
「え……と、それじゃ、イレクくん。お早う。コーヒー、ありがとう」
イレクくんは懐こく笑って、「どういたしまして」と応えた。

わたしは上半身だけをようやく起こし、差し出されたカップをトレイごと受け取った。それをサイドテーブルに置き、それからこぼさないようゆっくりと慎重に、カップを手に取った。コーヒーの甘くて苦い芳香が、心地よく鼻先をくすぐる。
「私の時とずいぶん態度が違うね、ミズカ？　……なるほどイレク、子供の姿というのは、女性相手に使えるね」
ようやく寝台から離れてくれたユエル様だったけれど、部屋から出て行く気配はない。
ユエル様は眉を僅かにしかめて両腕を組み、如才のないイレクくんを見やる。
「否定はしませんが、ユエル様ほどではないと思いますよ？」
「私ほどの美貌の持ち主はそうはいないだろうからね。意図して“使って”いるわけではないが」
「ユエル様は、父……イスラから聞いていた通りの方ですね。イスラとよく似ています。類は友を呼ぶということでしょうか」
「心外だね、イスラと似ているなど。侮辱以外の何ものでもないな」
「そうですか？　でも同じようなことを言っていましたよ。俺はアレほど酷くない、と」
イレクくんは愛想良く笑いながら、しれっと言い放つ。ユエル様は鼻白み、苦虫を奥歯で噛み潰したような顔になっていた。
イレクくんって、なんだかすごい。
それにイレクくんの話を通して、ユエル様とイスラさんの関係がどんなものかも、なんとなく分かってきた。
やっぱりお友達なのかなって。二人して断固否定するだろうけど。
「それはそうと、ユエル様。実はお願いがあるのですが。ミズカさんにも」
「何？」と、わたしの方が先に聞き返した。
イレクくんは、店の手伝いをしたいと申し出た。店……つまり「占いの門」の。「占い」はできないから、せめて受付や客の接待などを手伝わせてくれ、と。

断る理由もなかったし、わたしもユエル様も快く承諾した。
イレクくんも生気を吸わなくてはならない、その理由もあってのことだ。
父親であるイスラさんはどうしたのかと訊くと、とうに出かけたと返ってきた。避暑地はかっこうのナンパ場所だから、生気を得るには困らないでしょうねと呆れたようにイレクくんは言う。
アリアさんもとっくに出かけたと、ユエル様が付け加えた。さっそく乗馬クラブにもぐりこむべく、行動を開始したらしい。
人間の生気は、体内に溜めておけるから毎日飲む必要はないのだけど、できれば「飲めるときには飲んでおきたい」のだという。
「とくにユエル様は、今は渇きやすいのでしょう？　期間中はとくに渇きやすいのだと聞きました」
イレクくんは意味ありげに笑って、ユエル様に問いかけた。けれどユエル様は黙して答えない。
ユエル様の表情が僅かに硬くなった気がしたけど、昨日のように剣呑な雰囲気にはならなくて、ほっとした。相手にもよるのかもしれない。
「長距離の移動で、さすがに僕も渇き気味なので、お店を手伝わせていただければ助かります。ユエル様、ミズカさん、宜しくお願いします」
イレクくんは軽くお辞儀をする。
わたしは「こちらこそ」と応えてから、
「そろそろ着替えたいのですけど。……お二人とも、出て行ってもらえませんか？」
ようやくその一言を、口にした。

7. 光陰

オープンしてようやく十日が経ったばかりの『占いの門』は、店主の美貌が幸いして、客の入りはいい。

お客様の九十パーセントは女性。男性の姿は見ないでもないけれど、付き添いであることがほとんどだから、百パーセント女性客といってもいいかな。

女の子達の、こうした情報の早さには同性ながら感心してしまう。

とはいえ、ユエル様が何らかの情報工作を行ったのは確かだ。そうでなければ、こんな奥まった所まで観光客は流れてこないと思う。

「ネットを利用した口コミの伝播の速さは驚嘆に値するね。廃れるのも早かろうが、それはそれで都合がいい」

ユエル様は、どうやら不動産会社の社員に、インターネットを利用した宣伝を依頼したらしい。依頼というか、たぶん幻術を使って情報操作を“させた”のだろう。

そうした行為に及ぶユエル様を、咎めようなどとは思わない。

とまどってしまう気持ちはあるけれど、こうして生きていくためには必要なことなのだから。

わたし達が仮住まいにしている屋敷は、とある不動産会社を仲介に購入したものだ。きちんと購入したのかどうかもあやしい所だけど、そのあたりは敢えて訊かないことにしている。心配げな顔をしてたらしいわたしに、ユエル様は「支払うべき代金は支払ってあるよ」と知らせてくれたから、それは信じている。

きっと、ごく普通に購入するとなったらとんでもない高額の値がつくだろうこの屋敷は何度か転売され、所有者がころころ変わり、そうして数年前に売却されたものらしい。

古くて美しい建物だけど、歴史的価値が低いからなのか、文化財

に指定されるでもなく、当然観光案内にも載っていない。不動産会社の一押し物件（ユエル様曰く、わけあり物件）だったようだけど、大々的に宣伝されていたわけでもなく、観光のメインスポットからも若干離れている。だから生活用品などを買いに出かける時はちょっと不便だ。

「わざわざ買いに出かける必要はないのに。電話線は繋げてあるから、要る物はここまで運ばせたらいい」

出不精のユエル様はそう言うけれど、そもそも要る物が売っている店の電話番号が分からないじゃないですか。それに一度出向いて品質を確かめないと迂闊に購入できません。わたしがそう口答えをすると、ユエル様は「それもそうか」と笑い、「では、出掛ける時はタクシーを呼ぶといい。タクシー会社の電話番号は分かっているから」と言い添えた。

タクシーなんて勿体ない。歩いていけなくもない距離ですから、ちょっと買い物くらいは徒歩で行きますと、またしても反駁してしまったら、ユエル様はため息まじりに、「ミズカの好きにしたらいい」とこぼした。

ユエル様の好意を無下に断ってしまったことに気がついて、わたしは慌てて謝罪した。けれどユエル様は別段機嫌を損ねた風ではなく、「無理をしない程度にね」と微笑みを返してくれた。そして、気をつけなさい、とも。

人間とは別の存在であるわたし達は、それを気取られないよう、常に人目を気にしていなければならない。

「そう神経質になることもないが、気をつけるにこしたことはない。後始末が面倒だからね」

現代社会では留意しておかねばならないことが多いと、ユエル様は何度かわたしに注意を促した。「七面倒な世の中になったものだ」と苦笑しつつ。

わたし達が気をつけねばならない事柄の一つに、「写真」がある。ビデオカメラなども、そう。

わたし達は鏡には映るのに、何故か写真に写らない時がある。どうしてかわからないけど、写ったり写らなかったりする。服だけは映っているのに“本体”の部分だけが消えていたり半透明になっていたり。

ユエル様は「波長の問題だろうね」と言っていた。カメラやビデオの性能の問題ではないみたい。

詳しい説明を求めたとして、きっとユエル様の説明には、わたしでは理解できない語彙が並ぶに違いない。なので、あえて深く追求しないことにした。ものぐさなんて単語は、この際、消去！

わたしがユエル様に言われて了解したのは、「客に、写真を撮るなとあらかじめ断っておくように」ということ。

ということで、来店時、カメラ撮影はお断りしている。

昨今は「携帯電話」なる代物にカメラの機能は当たり前のように付加されているから、そちらでの撮影はお断りしている。デジタルカメラでも、もちろん。

なので、携帯電話の電源も極力切ってもらうようにお願いしている。

「ユエル様のお気を乱さないためにです」と説明したら、大抵の女の子達は素直に納得してくれた。

さすがユエル様。美青年効果、ばっちりだ。

他に何か使えることがあればいいのになぁ、「美青年効果」。

女の子達を騒がせたりおとなしくさせたりするだけじゃなくて。

有効活用できたらいいのに、「美青年効果」。……他の、良い活用方法はちっとも思いつかないけれど。

わたしの独り言を傍で聞いていたイレクくんは、今にもふき出しそうな顔をして肩を震わせていた。

そういえば、受付帳のストックがなくなってしまったんだっけ。明日にでも買いに行かなくちゃ。

受付帳なんて必要ないんじゃないかなとは思うけど、「店」としての体裁を整えるためには必要だとユエル様が言っていたから、一応お客様には記入をお願いしてる。名前と生年月日とお住まいの県名、観光客なら現在の宿泊先のホテル名等も書いてもらってる。

来店時に記帳してもらう受付帳は、ページ数が少ないとはいえ、もう五冊目。リピーター率が高いから、客の総数はさほど多くない。それでも、多い日は一日に二、三十人の来客があって、朝も早くから、好奇に目を輝かせた女の子達が浮かれ足でやって来る。

「大変な人気ですね、ユエル様は」

受付や接客を手伝ってくれるイレクくんは、くすっと意味ありげに笑い、わたしの顔を覗き込んできた。

「物見高い女性客のお相手は大変でしょうに。ユエル様は慣れているようですけど、ミズカさんは気疲れしてしまうでしょう？」

「……少しだけ。でも、そろそろ慣れてきたから」

そういえば、イレクくんはわたしの言い方に倣って「ユエル様」と呼んでいる。

なんとなく「様」付けにしてしまう雰囲気がユエル様にはある。これももしかしたら「美青年効果」だったりするのかな？

イレクくんは「そうかもしれませんね」と可笑しげに笑って曖昧な相槌を打った。

「さきほど陰からそっと拝見させてもらったのですが、ユエル様はタロットカードを使ってらっしゃるんですね」

「占星術はホロスコープを描くのが面倒だって言ってたから」

「なるほど」

カードを繰る仕種も優美なユエル様だ。それを意識しての占い道具の選択だったに違いない。

タロットカードを占い道具のメインにはしているけど、手相も見る。これはもちろん、生気を飲むため。

ここでも「美青年効果」は発揮され、拒む女の子なんていやしない。

客数が多い日などは、ユエル様もえり好みをしだして、手相を割愛しちゃうこともままある。
「なるべく良質のモノを飲みたいからね」
抜け目がないユエル様は、しゃあしゃあとそんなことを言う。
質の良い、美味しそうな生気の持ち主というのは、外見でなんとなく判別できるらしい。
わたしはユエル様の生気しか知らないから、「味」の違いはわからない。
でも、人間の生気を感じることはできるから、そこになんとなく「色」のようなものを見ることはある。それがキレイだったり、ちょっとくすんでいたりして、それが「味」の違いに関わってくるのだろうってことは、なんとなくだけど、分かる。
できれば美味しい生気を飲みたいって思うユエル様の気持ちは、分からないでもない。……だけど。
だけど、女の子達をえり好みしているユエル様を見るのは、少しだけ、……辛かった。

十時に開店して、現在正午を十分ばかり回ったところ。客足がようやく途絶えて、わたしとイレクくんは、エントランスに設けた受付所から待合室になっているリビングに移動して、休憩をとることにした。
「お疲れ様、イレクくん。一息入れましょうか」
「はい。あ、ユエル様は？　ご一緒しなくても？」
「うん、お一人で一息ついてるから」
ユエル様は、占いの部屋用に少々改装した個室で、一眠りしている。
さっき覗いてみたら、椅子に座ったまま腕を組み、目を閉じ、じっとしていた。
こういう時は、声をかけずにそっとしておくのが最良だと、長年

仕えているうちに学んだ。
　ユエル様にも何か冷たいものをと思ったけれど、それは後で改めてお出しすることにして、今はとりあえず自分とイレクくんのために麦茶を用意した。
　冷蔵庫の中に食材は入っていない。あるのは飲み物だけ。麦茶と牛乳とアルコール飲料が数本。キッチンの隣室にあるワインセラーには、数本頂き物のワインがある。昨日、亜矢子さんから頂いたドイツワインもあるけど、まだ栓は開けてない。
「どうぞ、イレクくん。あ、もしかして麦茶は、初めて？」
「いえ。日本に滞在していたこともありますから。短期間ですけど」
「そっか、それなのに日本語上手で、すごいね」
「間隔を置いて短期滞在を繰り返していたから、合計すればけっこうな滞在日数ですよ。日本語を学ぶ目的で名が逗留していたこともありましたし」
「そうなんだ。納得」
「最長で三年、同じ所にいましたよ。居続けたいと思った所だったから、離れるのが惜しかったです」
「そっか……」
　イスラさんが言っていた「面倒な年齢」とは、このことだ。
　見た目十歳児のまま、イレクくんは年をとらない。何年経っても。だから同じ所に長く逗留はできない。
　いつまでも成長しないから、人外異質の生き物だとすぐにわかってしまう。
　吸血鬼（という言い方は不本意なんだけど、とりあえず他に相応しい呼び名が浮かばないので「吸血鬼」って言うことにする）であるユエル様達は、成長を止めることができる。
　そして、わたしのような「眷族」はというと、自らの意思では成長を止めることはできない。「眷族」になったその時の年齢で、時が止まる。
　わたしは見た目十六、七歳の年齢のまま、年をとらない。

我ながら、微妙で不便な年齢だと思う。……イレクくんと、同様に。
不老である“体質”を羨む女性達は大勢いそうだけど、やはり面倒なことの方が多いから、それを手放しでは喜べない。
「そういえば、ミズカさんは、日本から出たことはないんですか？」
麦茶で喉を潤した後、ふと思い出したように、唐突にイレクくんが訊いてきた。
「うん。まだ一度も」
「そうなんですか、意外でした。ユエル様は一つの国に長く留まるのを嫌う方なのだとイスラから聞いていたんですが」
「うん、でも、単に面倒なのかなって。わたしを伴っていくとなると、ユエル様は必然的に通訳しなくちゃならない立場になってしまうし。だから、いろんな国の言語を覚えたいって思ってるの。少しでもユエル様の負担が軽くなるように。わたしはユエル様に負ぶさってばかりだから……」
苦笑いをして答えたわたしに、イレクくんはふわりと包み込むような笑みを浮かべ、優しい声音で言った。
「ミズカさんは、ユエル様のことがお好きなんですね？」
「……っ」
一瞬、言葉に詰まった。
否定は、しないけど。でも……！　でも、それは……っ！
「そっ、それは、ユ、ユエル様は、そ、そのっ、大切なご主人様でっ！」
おたおたとうろたえ、赤面したわたしを、イレクくんはにこにこと笑いながら見つめている。イレクくんの鋭敏な薄茶色のまなざしが、少し痛い。
「お聞きしたいと思っていたんですが」
「は、はいぃ？」
「ミズカさんのこと」
「わたし？」

わたしがどういった経緯でユエル様の眷族になったのかを知りたいというので、わたしは憶えていることを、ありのまま、イレクくんに話した。

わたしの昔話に、イレクくんは興味深げに相槌をうったり、意外そうな顔をしたりして、真摯に耳を傾けてくれていた。もしかして、「なんでこんな子がユエル様の眷族に？」と疑問に思っていたのかもしれない。その答は、わたしの話からは得られなかったろうけど。

でも、イレクくんはにこやかにしている。

「ユエル様は優しい方なんですね」

というイレクくんの感想には、わたしも大いに首肯した。けれど、「ミズカさんも」と言い添えてくれたのには、返答のしようがなかった。追従口とまでは思わないけれど、イレクくんの優しさから出た言葉だと思ったから。

ふと思いついたのと、わたし自身のことから話を逸らしたくて、今度はわたしの方からイレクくんに質問をした。イレクくんのお母さんは、どうしているのか、と。

イレクくんは一瞬ためらったようだった。けれどすぐに笑って、答えた。

「もう亡くなりました。ずいぶんと昔のことです」

「あ、ご、ごめんなさい」

昨日のユエル様の話でいくなら、イレクくんのお母さんは、イスラさんの「眷族」なのだろう。そう思ったから、興味がわいた。できればどんな人なのか会ってみたいなって思った……のに。

「ごめんなさい、わたし」

「ミズカさんが謝る必要はありませんよ。それに、もう昔のことですから」

「昔って、……訊いていいかな？」

「ミズカさんが生まれるより前のことですよ。戦渦に巻き込まれて……事故死とでもいうんでしょうか、あれも」

「……」

日本の歴史と、それに関わる世界の歴史は、ユエル様に習った。学校に通わせていただいた時にも、授業で習った。わたしがユエル様の眷族になってから、「世界」と名のつく戦争は、二度ほどあったと記憶してる。

その他にも細々とした「戦争」は日本各地で起こっていて、けれどユエル様とわたしは「冬眠」をすることで戦禍を免れてきた。

「冬眠」も、人外的存在であるわたし達が持つ特殊能力だ。体の全機能を仮死状態にまで低下させ、何年でも眠って過ごすことができる。もちろんこれも眷族であるわたし自身ではできないことで、ユエル様の力に頼ることになる。

短い期間の「冬眠」は何度か経験した。ふた月とか半年とか。

それ以外に、長い期間の「冬眠」を、わたしは二度、経験した。

一度目は五年程、二度目は十年程、地下で眠り続け、時を過ごした。

おかげで戦争の被害に遭うこともなく、その悲惨さも、わたしは見ずに済んできた。

イレクくんは何事もないように今こうして笑っているけれど、辛かったに違いない。戦禍を目の当たりにするなんて、想像するだに恐ろしい。

それに、たとえ人外の存在だといったって、肉親を失う悲しみは人間と変わらないはずだもの。

「お母さんのこと、憶えてる？」

イレクくんは静かに微笑み、頷いた。

「聡明で美しい女性でした。あの父……イスラにして、頭が上がらなかった唯一の人でした。母以外に他の眷族を持つこともできたのに、それもしませんでしたから」

「……」

イスラさんの眷族になって、イレクくんを生み、ともに過ごした期間は、五十年程だったという。長く生きている彼らにとって、その五十年はあまりに短い期間だったろう。

それを思うと切なくなった。
どんなに辛くて、悲しかったろう。イレクくんもだけど、イスラさんの悲しみはいかばかりだったろうと、胸が痛む。
――ああ、そうだ。母と言えば……。
ふと頭に浮かんだ、金髪碧眼の美女の顔。
イレクくんにその人のことを尋ねようとしたのだけど、あいにく、忙しないベルの音に邪魔をされてしまった。
真鍮の呼び鈴を、誰かが受付場所で鳴らしている。
一度鳴らせば済むだろうに、何度もしつこく、ベルを振っている。
「お客様のようですね」
「うん」
頷いて、わたしはイレクくんとともに玄関脇に設けた受付場所へと急いだ。

8．矢も楯も

もしかしてこのせっかちなベルの鳴らし方は……と予想していた人が、受付場所にいた。片手を腰にあてて、急いで駆けつけたわたしを「遅い！」と言わんばかりの傲慢な態度で睨みつけてくる。

――ああ、やっぱり。

甘ったるくてきつい香水の香りが、エントランス中に漂っている。

亜矢子さんだ。

待ちぼうけを食わされてイライラしている様子だった。

というよりも、わたしを見るたび、亜矢子さんは目を釣りあがらせているような気がする。

亜矢子さんは、昨日とは変わって、カジュアルなスタイルだ。丈の短いTシャツに黒のカプリパンツ、ビーズのはめ込まれたミュールからのぞく足先は、水色のペディキュアに彩られている。洋服やバッグ、靴、それにメイク用品だって、きっとどれも値の張る、高価なブランド物なのだろう。廉価品じゃないことくらいは、わたしにも分かる。

「まったく、対応が遅いんじゃなくて？　客をこんなにも待たせるだなんて？」

「……すみません」

こんなにもって、ほんの一、二分も経っていないと思うけれど。なんて口答えは、もちろんしない。

店を開いたその翌日にやって来てから今日まで、亜矢子さんはユエル様に会いに毎日やってくる。昨日みたいに閉店していても懲りずにやってくるのだから、そのマメさには感服ものだ。亜矢子さん程の常連客は他にはいない。

「さっさとユエル様のところへ通してくださらない？」

「はい。それでは、こちらに記帳を……」

「毎回毎回、手間を取らせるのね？　あなたが書けばいいんだわ」

「いえ、でも」
「愚図なうえ、物覚えまで悪いだなんて、処置なしね。まったくユエル様はどうしてこんな使えない子を雇っているのかしら？」
「……」
反論の余地もなければ、その勇気もない。
わたしは目線を逸らして黙するしかない。
嫌みたっぷりで高慢な亜矢子さんだけど、嫌いかと言えば、実はそれほどでもない。苦手ではあるけれど、わたしのことを「鬱陶しく目障り」だと思っているのがあまりにあからさま過ぎて、なんだか悪感情を抱けない。分かりやすい人だなと思うだけ。
それに亜矢子さんは、蔑んだ目ではあるけれど、わたしを“人”として見てくれる。わたしという個人を見ていてくれている。
だからわたしも亜矢子さんと対峙できるのだ。むろん、対等の相手だなんて思っていない。そのあたりはわきまえているつもりだ。
とはいえ、わたしが何を言っても亜矢子さんを苛立たせてしまうとわかっているから、対応には困ってしまう。
困惑顔をするわたしに、横からさり気なく助け舟が漕ぎ出された。
「お手数ですがこれも規則ですので、ご記帳願えませんか」
漕ぎ手は、イレクくん。
イレクくんの丁寧な口調は、聞きようによってはひどく冷やかで威圧的にすら感じられる。いささかも臆さず、亜矢子さんを見据えている。
亜矢子さんは口を挟んできたイレクくんを怪訝そうに見やり、眉をしかめた。
「なんですの、あなた」
イレクくんは愛想笑いを浮かべて答える。
「ユエル様の、遠縁にあたる者です」
「あ、あら、そうなの？」
亜矢子さんは、本当に分かりやすい。
直前まで「何、この小生意気な子供は？」とイレクくんを睨みつ

けていた亜矢子さんは、「遠縁」という言葉を聞くやいなや、みごとな早さで手のひらを返した。
イレクくんの適応能力の早さも見事なものだと思う。
ユエル様の遠縁なんてたぶんその場しのぎの嘘だろう。だけどユエル様の「身内」だと言えば、ユエル様の信望者は容易く平伏する。そのことをイレクくんはわずか半日足らずで悟った。
亜矢子さんのような高慢な女性にも、「美青年効果」はいかんなく発揮される。「ユエル様効果」と言いかえてもいいかもしれない。
「僕は、イレクと申します」
イレクくんはさり気ない所作で、握手を求めるために手を差し出した。亜矢子さんは少し腰を屈め、何のためらいもなくイレクくんの手をとった。
「初めまして。わたしは桜町亜矢子と申しますの」
「そうですか。よろしく、アヤコさん」
――勘のいい人なら、あるいは気づいたかもしれない。
イレクくんから発せられる、異様な“気”に。
イレクくんの薄茶色の双眸が、一瞬、きらりと光り、亜矢子さんの目を捕らえた。
「……」
亜矢子さんは言葉を失い、イレクくんを瞠目する。
握られた亜矢子さんの手から、イレクくんの手を伝って、生気が奪われていくのが分かる。
イレクくんは声のトーンを落とし、亜矢子さんを見据えて言った。
「今日は、お疲れではありませんか？　帰って、少し眠った方がいいでしょう」
「……眠り……」
「そう。今日はもう帰られた方がいいですね」
「帰……る……」
イレクくんは微笑んだ。一見、優しげなその笑顔。けれど、生気が奪われていくのと同時にあたりの空気からも温みが奪われていく

ようだった。背筋がぞくりと冷える。
それも、ほんの僅かの間だった。
「さあ。このまま振り返らずに、どうぞお帰りください、亜矢子さん」
「……」
亜矢子さんは木偶人形のようにぎこちなく頷いた。イレクくんが手を放すと、亜矢子さんはぼんやりとした面持ちで身を翻し、そのままわたしを一瞥することもなく、覚束ない足取りで屋敷を出て行った。
イレクくんが何をしたのかはなんとなく分かったけれど、あまりに唐突だし驚いてしまって、わたしは言葉もなく、茫然と立ち尽くすばかりだった。
そんなわたしの背後から、パチパチと手を叩く音が聞こえた。振り返るとそこに、感心した様子のユエル様がいた。
「お見事、イレク」

ユエル様は愉しそうに笑いながら、厄介払いができたと、人の悪いことを言う。
「幻術を使うのが得意だとは聞いていたが、なかなか強引だね、イレク。生気は、ちょっと飲みすぎの気もするが？」
「あれくらい大丈夫でしょう、あの方は」
「そうだろうね。まぁ、味の方はいまひとつだが、少々飲みすぎてもすぐに回復できるほどの生気の持ち主ではあるからね」
「ミズカさんに酷いことを言うものだから、つい腹に据えかねて」
そう言ってから、イレクくんは改めてわたしの方に向き直り、申し訳なさそうな顔をした。
「もしかして余計なことをしてしまったでしょうか？」
「う、ううん。ありがとうって言うのもなんだけど……」
わたしは首を横に振り、苦笑して応えた。

亜矢子さんを幻術にかけて撃退してくれたこと、やっぱり……ちょっと……感謝してる。
わたしがどのような対応をしても亜矢子さんは不愉快だったろうから、イレクくんが割って入ってくれて助かった。
「あの方はミズカさんに対して、いつもあんな態度なんですか？」
「うん、だいたいあんな感じかな」
「失礼な方ですね。いったい自分を何様だと思っているんでしょうか」
イレクくんはまるで自分のことみたいに腹をたて、語気を荒立てている。
「二度と来ないよう、強い暗示をかけておけばよかった。とっさのことでそこまで気が回らなかったのは失敗でした」
そこまでしてしまうのは、さすがにちょっとかわいそうなんじゃないかなと思ったけれどそれは口にせず、とりあえずはイレクくんにお詫びとお礼を述べた。
「嫌な思いをさせちゃってごめんね、イレクくん。それから、ありがとう。イレクくんがいてくれて良かった」
「いいえ、不快にさせられたのはあの方の言動のせいで、ミズカさんには何の落ち度もないんですから、謝らないでください。ともあれ、ミズカさんの手助けができたのなら、よかったです」
イレクくんが笑い、わたしも微笑み返した。
なんだかちょっとくすぐったいような心持ちで、それにとても嬉しかった。
自然と口元がほころんでしまう。
「ミズカ」
突如、頭上からユエル様の声が降ってきた。
ユエル様は、いつの間にかわたしの真後ろに立っていた。少し動いたら体が触れてしまう程に近い。ユエル様は少し腰を屈めて、囁くようにわたしの名を呼んだ。
いつもより少し低い声に、ぞくりと鳥肌がたつ。優しさよりも、

押さえつけるかのような重い声。だけど怒声からは程遠い、甘さの含まれた声音だった。
ユエル様を肩越しに振り返り見た途端、深い緑色の瞳とぶつかった。
「ミズカ。出掛けるから、ついてきて」
「え……」
「息抜きに、外の空気を吸いにね。午後の散策も、たまにはいい」
「は、はぁ……」
気のせいだろうか？
ユエル様、怒っている風ではないけれど、気難しげな顔をしている。
さっきまで愉しげに微笑んでいたのに、急にどうしたのだろう？
「イレク、留守を頼むよ。来客は適当にあしらっておいてくれればいい」
「……はい、わかりました」
イレクくんは叱られた子供みたいに肩を竦め、ユエル様の言に素直に従った。だけど、笑いを堪えているみたいな訳知り顔をしていて、恐縮している様子はちっとも見られない。
ユエル様はといえば柳眉をしかめ、不機嫌顔だ。「面白くない」と拗ねているような、そんな顔をしてイレクくんを睨んでいる。
「あの、ユエル様……？」
わたしの心配げな目線に気づいて、ユエル様はふっと小さく息をつき、優しい笑みを見せてくれた。
「ミズカも息抜きをした方がいいだろうからね。少し、外に出よう」
「はい。……それじゃぁ、お供します」
「イレクも適当に休んでいるといい」
「はい、そうさせていただきますから、どうぞごゆっくりお出かけになってください」
にこりと微笑むイレクくんに、ユエル様は小さな苦虫を噛みつぶしたような顔をして、「そうしよう」と短く応えた。

踵を返し歩き出したユエル様の後を、わたしは急いで追いかける。
ユエル様の気紛れはいつものことだけど、わたしの器は狭量で、なかなかそれに慣れないでいる。
ユエル様の突飛な行動に一喜一憂するわたしの身にもなってほしいものだなんて、とても言えないけれど。
「まっ、待ってください、ユエル様！」
せめて、置いてきぼりにはしないでください。
わたしの心の声が聞こえたとは思えないけれど、ユエル様は玄関先で足を止め、振り返ってくれた。
そしてわたしを見やり、艶然と微笑んだ。「慌てると転ぶよ、ミズカ。君は、存外ドジなところがあるからね」
余計な一言を口にして。

9．思い出の散策

高原地の夏は、平地と比べると幾分かは涼しい。陽射しの強い日はやっぱり暑いけど、今日のような曇天の日は多少ましだ。とはいえ、湿度が高いから肌にまとわりつくようなじっとりとした暑気は不快に感じることもある。それでも緑陰を渡る風は心地よく、土と緑の匂いが心身を洗うようだった。

ユエル様は人気の少ない森の小路を選び、ゆったりと歩く。わたしはその後をしずしずと付き従っている。

ユエル様がこうして散歩に出るのは久しい。

このところ屋敷に引きこもっていることが多かったから、気分転換がしたかったのかもしれない。

「……」

ユエル様が黙っているから、わたしも口を閉じている。

重い沈黙じゃない。穏やかな静けさが心を安らげていた。

ユエル様とわたしの、土と草を踏んで歩く足音もまた耳に心地良かった。

さやさやと梢が風に揺れ、擦れ合う音を響かせている。近くで小鳥が鳴いている。深緑の奥から空へと抜けていくような、甲高く澄んだ囀りだ。

わたしとユエル様がゆるやかに歩いている道は、コンクリート舗装のされていない小路だ。だけど車両が通れるくらいの道幅はあり、路にもタイヤの跡が残っている。木立の合間に、売り物件の立札のあるいささか古びた別荘が見えた。その他にも何件か、個人の所有かと思われる別荘があったけれど、人気はなかった。お盆休みに入れば、ここらももう少し賑やかになるのだろうか？

路の両脇にはずらりと羊歯が並び、枯れた巨木や岩にはびっしりと苔が生え、あたり一面を緑色で覆っている。改めて上を見やると、落葉松の他にモミジの木も多く、秋になればさぞかし美しい紅葉が

見られるだろう。
また視線を落とし、地を這う緑に目をやった。
小さな花をつける山野草のほとんどは直射日光を避けて咲き、ややもすれば見逃してしまいそうなほど、地味で目立たない。
タイヤに踏みしだかれても、根をはり、葉を伸ばしている草々もまた美しいと思った。踏まれ続けても、根強く生きている。
園芸種の花みたいな華やかさはないけれど、見過ごしてしまいがちな山野草や名も知らない草々に、わたしはなにやら羨望まじりの共感を覚えていた。
誰の心に留まらずとも、こうして生き続けていくには辛苦に耐える強さが要る。わたしにもその強さがあればいいのに。

わたしが取るに足らない雑草ならば、ユエル様は一輪の薔薇といったところだろうか。冷艶とした、幻の銀の薔薇――

ユエル様の背を見つめながら、ぼんやりと思考を巡らせた。

ユエル様は孤独を愛する方なのかも。
街中に居を構えることが少ないからそう感じるのかもしれない。吸血鬼である正体を隠すためという理由もあると思うけど、それよりも、ユエル様自身が雑踏を嫌ってるということの方が大きい気がする。
ユエル様は時と場合によっては社交的になるけれど、必要がなければ愛想笑いの一つもせず、排他的になることもしばしばだ。好奇の目に晒されるのが、「鬱陶しい」と仰っていた。
「まぁ、やむないことだけどね。私のこの美貌では、どうしても人目を惹いてしまうから」
その述懐に異存はありません。だけど、不遜に微笑むユエル様に、わたしはちょっと胡乱な顔をしてしまったのだっけ。
ユエル様は苦笑して、「事実は事実として、真摯に受け止めねば

ならないよ」と返してきた。それから真顔をこちらに向けて言ったのだ。
「ミズカも目をつけられやすいから、気をつけなさい」
「……？」
「目が離せないとも言うが……。四六時中見張っているわけにもいかないからね」
ため息をついたユエル様にどういう意味なのか訊き返しても、微笑みでごまかされてしまった。
ユエル様の真意はいつだってはかりしれず、わたしには分からないことだらけだ。昔も、今も……――

ユエル様はとくに目的地があるようでもなく、ゆったりとした歩調で道を行く。首を伸ばして木々の隙間に見える曇りがちな空を仰いだり、風に撫でられた銀髪を指で梳き、整えてはまたそれを風に遊ばせたりしていた。そして時々、わたしがちゃんとついて来ているか肩越しに振り返って確かめる。
目が合っても、ユエル様は何も言わない。だけど、わたしの存在を確認してくれるそのことが、わたしを安堵させた。
話しかけていいものやら戸惑ったけれど、わたしはユエル様との距離を詰め、口を開いた。
「ユエル様、実はお願いがあるんですけど」
「うん？」
ユエル様は足を止め、振り向いた。ユエル様の深緑色のまなざしが宙からわたしへと向けられた。ユエル様は静かな微笑を湛えている。
鼓動が、どきりと跳ねた。
「え、えっと、……その、外国語を教えていただけないかな、と思いまして」
「外国語？」
「はい。英語でも、他の言語でも」

「それはまた、どうして？」
「さっきイレクくんとも話してたんですけど……」
海外に行きたいと思ってるわけじゃない。そりゃぁ、興味がないこともないし、機会があるなら行ってみたいなと、内心思ってる。そんな贅沢が言える身分じゃないことは承知しているつもりだから、口に出したりはしないけど。
わたしの存念はどうであれ、いつかユエル様の意向で海外へ行くことになった時に、日本語しか話せないのはやっぱり不便だろう。それに、もしかしてわたしのせいでユエル様が日本から出られないでいるのなら申し訳ない。たとえそうでなかったとしても、いざという時のために、英語くらいは話せるようになって、少しでもユエル様の負担を軽くしたい。
それを告げると、ユエル様は「ミズカらしい」と微笑んだ。
「向学心があるのは良いことだ。ミズカは勉強家だね」
「ありがとうございます。でも、それはきっと、今まで勉強をすることがなかったからだと思います」
ユエル様に仕える前、わたしは読み書きと簡単な算数ができる程度で、まったく無学だった。学ぶ楽しさなど、知る由もなかった。
ユエル様に様々なことを習い、そうして自分の中に知識が増えていくのが嬉しかった。
勉強が苦痛にならなかったのは、きっと「進学」や「受験」という強迫観念に駆られることがなかったからなんだと思う。「将来」を危惧せず、ただ純粋に、知識や感性を豊かにするために学べるというのはとても贅沢なことなのかもしれない。
楽しくはあってもなかなか身にはつかず、それが我ながらもどかしくて、情けなくなる時もあるけれど。
「わたし、学習能力は高い方じゃないし、憶えもいいとは言えないから、その分ユエル様にはお手間をかけてしまいますけど……」
「ご謙遜だね、ミズカ。そう卑下することもなかろう。ミズカは教え甲斐のある良い生徒だったよ、いつでもね」

「ほっ、ほんとにそうだといいんですけどっ」」
麗しい微笑みを向けられて、思わず頬が熱くなる。
「ミズカは素直なのだが、反面、考え方が頑なになりすぎるきらいがある。もう少し柔軟になっても良いと思うが、まぁ、矯正した方がいいという程でもないね」
「……はい」
ユエル様は迷惑顔もせずに、いつだって根気よくわたしの勉強に付き合ってくれた。
特に学校……高等学校にもぐりこむ時は、少なくとも義務教育を終えてきた程度の一般教養は必要になってくる。さらに「現代人」としての一般常識もある程度は頭に入れておかねばならない。
それらを、ユエル様は懇切丁寧に教えてくれる。言葉でだけでなく、「実地学習が一番手っ取り早い」と言って、この時ばかりは街中に居住し、「現代人」の営みを体験させ、学ばせてくれる。
ユエル様だって、移り変わっていく時代に応じた「一般常識」は、その時になって初めて体感することが多いはずなのに、その順応性の早さときたら、もう一種の魔法としか思えないほどだ。
様々な“術”を使いこなせるユエル様だから、そうした術もあるのかと、いつか訊いたこともあるくらいだ。もちろんそんなことはなくて、
「私ほど頭脳明晰な者になれば、即座に時代に対応できるのだよ。長年に培われてきた慣れがあると言えなくもないが」
と、仰ってた。
「ミズカもよくやっている」
ユエル様は「褒めて伸ばす」の姿勢で、わたしの成長を促してくれる。それも、とても自然に。
「何事も真摯に取り組むその姿勢は、ミズカの美点と言えようね。素晴らしいことだと思うよ」
ユエル様は、ありのままのわたしを認め、受け入れてくれている。それを感じられて、とても嬉しかった。だからもっと頑張ろうと思

うのだ。
――あれは、いつだったかな。
そう、何年か前のこと。初めて高校にもぐりこんだ時のことだ。

かなり浮足立ってたって、我ながら思う。同じくらいに緊張もしていたけど、たとえ短期間でも高校へ通わせてもらえるなんて、夢のようだった。
最初は正体がバレやしないかとひやひやしていたけれど、ユエル様は英語の教師としてもぐりこみ、わたしのことを後方から何くれとなくサポートしてくれた。おかげで、たったの三ヶ月間だったけれど、わたしは高校生らしい日々を満喫できた。
それで、少し欲が出てしまった。もう少しだけ学生らしい経験がしてみたくなったのだ。
「テストを受けたい？」
ユエル様が訝しげに訊き返してきた。わたしが、「テストを受けてみたい」と言ったことがよほど意外だったのか、驚いたような、とまどったような顔をしていた。
「はい、せっかくですし」
「変わっているね、ミズカは」
「なんで変わっている、なんですか？」
「テストなんて、普通は受けたがらないものだよ？」
くすっと、ユエル様は小さく笑った。からかうようにではなく、とても優しい顔をしていた。
「でも、どれくらい身についたか知るのにはちょうどいいですから」
冬休みが来る前、期末テストの日程が決まった頃、もう頃合いだからそろそろ姿をくらまそうかと言ったユエル様に、「もう少しだけ待って下さい」と頼み込んだ。テストを受けてから、学校を去りたいと無心した。

「きっと、点数は惨憺たる結果になるんでしょうけど、それでも受けてみたいんです」
「……わかった。ミズカのしたいようにするといい」
「はい！　ありがとうございます、ユエル様」
ユエル様はわたしのことを案じてくれていたのだと思う。
だって、とんでもなくサイアクな点数の解答用紙が戻ってくるのは目に見えていたから。
まともな教育を受けたことのないわたしが、いきなり高校生クラスのテストを受けるなんて、無謀の一言だもの。
どの授業も、ついていくのが精一杯で、「ちんぷんかんぷん」と頭がぐるぐる回っちゃうことも多かった。
だからテスト前の一週間は、そりゃぁもう、必死になって勉強した。どうしてもわからないところはユエル様に聞いて。ユエル様は面倒がらず、わたしの勉強をみてくれた。
必死の勉強の成果はあって、どの教科も平均点はとることができた。
「よくやったね、ミズカ」
ユエル様もそう言って褒めてくれた。よしよしって頭を撫でてくれて、深緑色の瞳をやわらげて微笑みかけてくれた。
それだけでも頑張った甲斐があったって思ったし、ユエル様の優しい笑顔を見られて、本当に舞い上がるほど嬉しかった。
ユエル様の笑顔を見られるだけで幸せだった。
もうそれだけで胸がいっぱいになるほどに。

10．痛み

ざぁっと枝先を揺らす緑風が吹きつけてきた。
ユエル様の銀の絹糸のような髪が風に乱される。
銀の髪をしなやかな指で梳きあげると、ユエル様はわたしをじっと見つめ、意外そうに訊いてきた。
「日本を出たいの、ミズカ？」
「え？　いえ、わたしではなくて。ユエル様は一つの国に留まるのはお好きじゃないって、イレクくんから聞いたのですけど」
わたしはためらいつつも、訊きかえしてみた。
「わたしを連れて海外へ出るとなると通訳とか、そういうのが面倒なのかなって。だからユエル様は日本に留まっていらっしゃるのかなって思って、それで」
「なるほど」
「え？　なるほどって、それはどういう意味でのなるほどなんですか、ユエル様？」
「ミズカはそう思っていたのか、という“なるほど”だが」
「違いましたか？」
「違うような、違わなくないような……。まぁ、ミズカが教えてほしいというのなら、やぶさかではないよ」
「は、はぁ……」
わたしは首を捻った。
なにやら微妙で曖昧で意味深で、答えになってないですけど、ユエル様？
「西欧圏の言語を覚えようとするのなら、ラテン語から始めるのが手っ取り早いのだが」
ユエル様は腕を組み、そしてちょっとからかうみたいな顔をして、わたしを見る。……みたい、じゃなくて、間違いなくからかってる。
「どっ、どこが手っ取り早いんですかっ？！　いきなりラテン語な

んて！」
「大元の言語なのだから、基礎を知っていれば、他の言語を習得する際に、楽ができるのだけど？」
「ちょっ、それはいくらなんでもすっ飛ばしすぎです！」
「そう？」
「そうです！　とりあえず、英語とかからで十分ですっ！」
「ミズカがそういうのなら、いたしかたないね。アメリカとイギリス、どちらがご希望かな？」
「……っ、わかりました、もういいです、ユエル様！　教えてくださる気、ないんですね」
わたしは踵を返した。
難癖つけてくるってことは、面倒だから教えたくないってことなんだ。
がっかりもしたし、からかわれてちょっと腹も立ったわたしは、勢いづけて歩き出した。ユエル様が後を追ってくる。
「ごめんごめん、ミズカ。待って」
笑いながら「ごめん」と言われたって、説得力ないですっ。
「知りませんっ」
――ヤダ。
……痛い。喉、痛い。胸も痛い。キリキリ痛んで、苦しくなる。
どうしよう。なんで……なんで、こんなことくらいで。
なんで泣きそうになんかなるの？　泣くようなことなんかじゃないのに。どうして、切なくなるの？
拒まれたわけじゃない。
いつもの悪戯心だって、わかってるのに。どうして拒絶されたみたいな、そんな身勝手な解釈をしてしまうの？
目が、熱くなってきてる。引き結んだ唇がどうしようもなく震える。
泣きそうになってることを悟られたくなくて、顔を俯かせ、小走りになった。

「ミズカ」
「……っ」
――ヤダ。
どうかしてるんだ、わたし。ユエル様の顔が見られない。泣きそうになってるこんなひどい顔、ユエル様に見せたくない。
「ミズカ、待ちなさい」
「……っ、やっ」
たまらず、駆け出そうとした。
ところが、気持ちと同様にもつれた足がそれを邪魔した。石を踏んづけ、それに足をとられてしまった。
「……った！」
ぐきっ、という擬音が聞こえてきそうだった。右の足首が不自然に曲がって、声をあげたのと同時に、ぺたんとお尻をついて、その場に座り込んでしまった。派手にすっ転ばなかっただけましだったけれど、情けないやら恥ずかしいやら、顔があげられない。
「ミズカ！」
「……っ」
踏んだり蹴ったり、という語彙が目の前で点灯していた。
捻ったらしく、ズキズキと釘を打ちつけてくるような痛みに眉をしかめた。
「ミズカ、だい……」
「大丈夫です！」
すぐにわたしに追いついたユエル様の差し出された手を取りもせず、顔を背け、立ち上がろうとした。けど、足に力が入らない。
「ミズカ」
ユエル様はわたしの前に片膝つき、そして捻った足首にそっと手を置いた。ユエル様の少し冷たい手が素肌に触れ、思わず身を竦めた。ユエル様が“手当て”をしてくれてると分かり、さらに申し訳なくなった。
「足首を、捻ったみたいだね？」

「……すみません」
俯いたままだったけれど、非礼を詫びた。
仕える主人に対して、礼を失した態度をとってしまったのだから。
だけど顔を上げられない。眦に溜まった涙がこぼれ落ちそうだ。
「悪かったよ、ミズカ」
そんなわたしの顔を上げさせたのは、ユエル様の一言だった。
「からかったりして、悪かった。ミズカが望むのなら、英語でもスペイン語でもフランス語でも、きちんと教えるから」
「……ユ…ッ」
「それで、赦してはもらえないだろうか」
「……ッ」
思いもかけないユエル様の謝罪に、わたしは大いに周章し、言葉も出ない。迂闊にも、みっともない泣き顔をユエル様に晒してしまった。
涙が頬を伝った感触に気がついて慌てて拭ったのだけど、手遅れだ。
「わっ、わたし……」
「ミズカ、そのまま……じっとして」
「え？」
次の瞬間に起きたことは、わたしを驚愕させるのには十分だった。
ユエル様がさらにわたしに身を寄せ、背中と膝下に腕を回した。
そして、体がふわりと浮いた。
「なっ、なん……っ？」
「じっとしていなさい、落ちる」
気がつけばわたしは抱き上げられていたのだ、ユエル様に。軽々と、横抱きにされていた。
「ユッ、ユ……ッ」
急な展開に頭がついていかない。
いっ、いったい何事がわたしの身に起きてるの？　何がどうなってるの？

胸が、痛いくらいに鳴ってる。顔中が熱い。
ユエル様はわたしを抱き上げたまま、歩き出した。
「あっ、歩けます、わたし……っ！　おろしてくだい、ユエル様！」
「そうは思えないが？」
「でっ、でも……っ」
「どうしても嫌だというのなら、おろすが」
ユエル様は目を細めてわたしの顔を覗き込んでくる。数センチしか離れていないところにユエル様の美しすぎる微笑があって、目はチカチカするし鼓動は速まるばかりだし、おかげで涙は引っ込んだけれど、とにもかくにも落ち着かない。
「嫌とかじゃなくてっ」
「嫌ではないのなら、じっとしていなさい。……すぐに着くから」
「……」
肩を竦め、わたしは小さく頷いた。頑なに拒んでユエル様の機嫌を損ねたくなかったから。
……ううん、違う。それだけじゃない。
恥ずかしくて申し訳ないと思いつつ、それでもこのまま、ユエル様の腕の中にいたかった。
――僅かの間だけでも。

＊　＊　＊

帰宅したわたしとユエル様を出迎えてくれたのは、アリアさんだった。
「あらあら、お姫様だっこでご帰還とは。いいもの見ちゃったわ」
アリアさんはなにやら嬉しげににこにこ笑っている。
「おかえりなさい、ミズカちゃん」

「ただいま、です。……あ、あの、お姫様だっこって……なんのことですか？」
たぶん、それは間の抜けた質問だったんだろう。
アリアさんは一瞬目を丸くし、その直後ころころと笑い出した。
「今のミズカちゃんの状況のことよ？　お姫様みたいな扱いでしょ、それって？」
「そんな……お姫様だなんて、わたしはそんな身分じゃ、全然……」
「ふふ。ミズカちゃんって、ホントに可愛いわ」
青い双眸に明るい光を宿して微笑むアリアさんは、悪戯好きの女神のようだ。神々しいだけではなく、近しさも感じる。そういうところがユエル様とよく似てる気がする。
ふと目線を上げると、ユエル様は表情を消していた。不機嫌そうではなかったけれど、少しバツの悪そうな顔に見えたのは、たぶんわたしの気のせいなんだろう。
アリアさんは小首を傾げ、ユエル様の顔を覗き込み、尋ねた。
「退屈だったから早く帰ってきたんだけど、手伝えること、ありそうね？」
それを受けて、ユエル様は「ああ、助かる」と短く応じた。

ユエル様はわたしを寝室まで運んでくれ、ベッドにおろしてくれた。ベッドの端に座るわたしの顔を、ユエル様は気遣わしげに窺ってくる。
「まだ痛むかい、ミズカ？」
「いえ、もう、だいぶいいみたいです。さっきユエル様に“手当て”をしてもらったから……」
「そう？　ならば良いが」
「はい」
気恥ずかしくて、まともにユエル様の顔を見られない。胸の動悸も、さっきよりはだいぶん落ち着いたとはいえ、平常には戻らない。

かといってこのまま顔を背けてはいられず、平静なふりをした。もっとも、それはきっとうまくは出来ていなかったと思うけれど。
「すみません、お手間をかけてしまって」
「ミズカ、……――」
ユエル様は戸惑いがちな様子で、何かを言いかけた。けれどそれは扉の開く音によって遮られてしまった。
「入るわよ、ユエル、ミズカちゃん？　一応、湿布も持ってきたわ」
アリアさんが水の入ったデキャンターと湿布をお盆に載せて、部屋に入ってきた。
「ああ、すまない、アリア」
「すみません、アリアさん」
「いいのよ。それより、ミズカちゃん、足、痛まない？　湿布貼らなくても平気かしら？」
お盆をサイドテーブルに置き、アリアさんは青い目を何度も瞬かせて、わたしの顔を覗き込んでくる。
「ありがとうございます、アリアさん。痛みはもうひきましたし、大丈夫です」
「……ミズカちゃん、目が赤いわね？　何かあったの？」
心配そうな顔をし、アリアさんはわたしの頬に指を当ててきた。優しく触れてくるアリアさんの指の感触が、熱帯びた頬に気持ち良かった。
返答に窮して、わたしはちょっと目を逸らしてしまった。
ユエル様の方にも顔を向けられない。一瞬、微妙な空気が室内に漂った。
「……いえ、その……、これはちょっと、ゴミが入って」
「両目に？」
「えっと、……そ、です」
「ミズカちゃん」
「……っ！」
唐突に、アリアさんはわたしをぎゅっと抱き寄せた。そして、お

さまりの悪いくせっ毛を宥めるようにして、よしよしと撫でる。
アリアさんの豊満で柔らかい胸の谷間に顔を埋める形となってしまって、ドギマギしてしまった。
アリアさんは、とってもいい香りがする。鼻腔をくすぐる甘い芳香は、懐慕の情を誘うようだった。なんだか切なくなる。
「いい子ね、ミズカちゃん」
アリアさんの口調があまりに優しくて……。喉の奥がきゅっと締まったように痛む。
……どうしよう、また泣きだしてしまいそうだ。
「ミズカ」
アリアさんの後方に控えていたユエル様は、この時ばかりはアリアさんをわたしから引き離そうとはしなかった。
「ミズカ、このまま少し、休んでいなさい。昨夜は、あまり眠れなかったのだろう？」
「そうね。それがいいわ」
アリアさんはわたしを離し、前髪を撫でつけた。赤くなってる目元を隠してくれたのかもしれない。
「休めば気も落ち着くわ。ね？」
「……はい」
わたしは素直に頷いた。
余計な心配を、もう……これ以上かけたくない。
「じゃ、あたし達、行くわね？　ユエル、行きましょ？」
「ああ」
アリアさんに促され、ユエル様も部屋を出て行く。
ユエル様はドアの向こうで一度足をとめ、わたしのことを振り返って見たようだったけれど、わたしはそれに気づかぬふりをして、布団にもぐりこんだ。
ドアの閉まる音がした。二人の足音も遠ざかっていく。
……ごめんなさい、ユエル様。
目頭がまた熱くなり、わたしはぎゅっと目を閉じた。

＊　＊　＊

――心の奥にしまっておいた問いが、不意に浮かびあがってくる。
喉をせせりあがってくるのに、いつだって声にはならない、その問い。

生気の飲み方を教えられ、初めてユエル様の生気を飲んだ時のことだ。
「私のことを、恨んでいるだろうね？」
そう、ユエル様に訊かれた。微笑んでいたけれど、とても儚げだった。
わたしは首を傾げ、「どうして」と、訊き返した。
ユエル様はおうむ返しに、「どうして」と訊き返してきた。
「こんなことになってしまってとは、思わない？」
わたしは首を横に振って答えた。
人外の生き物になってしまったそのことに、たしかにとまどってはいたし、不安はあった。予想外の人生展開には違いなかったから。けれど……
「恨むなんて、考えつきもしなかったです。ちょっと驚いてはいますけど。……まだ慣れないだけで、大丈夫です」
わたしの返答に、ユエル様はとまどったような笑みを見せた。「本当に？」とさらに訊き返してくるようなことはなかったけど、どこか不安なような、不審なような、揺らぎのある微笑だった。
「ユエル様には感謝してもしきれないほどなのに、恨むなんて……あり得ませんから！」
「……ミズカは、生真面目な性分だからね」

そう言って、ユエル様は苦っぽく笑って嘆息した。

ユエル様に引き取られてからずっと、わたしは自分の置かれた状況を把握するだけで精一杯だった。ユエル様の“眷族”になってからも、それはあまり変わらなかった。自分の身に起こった変化に無頓着すぎたかもしれない。

それでも、気になることはあった。

わたしに変化をもたらしてくれたユエル様に、ひとつだけ、どうしても訊けないことがあったのだ。

そして今もなお訊けずにいる。怖じている。

「どうして、わたしだったのですか」

と、ただそのひとつの問いに。

11．不意の風守り

風が強まってきたのか、葉擦れの音がいやに耳につく。ざわざわと、胸がざわめいた。

暑いとも涼しいともいえない、じっとりと重い湿気のせいで、覚醒がしっくりとこない。

横たわり、くの字に曲げていた体を伸ばし、仰向けになった。それでも瞼はなかなか上がらず、目をこすった。不覚にも泣いてしまい、そのせいで瞼が腫れたように重い。

うっすらと目を開けると、部屋が少しだけ暗くなっているのに気がついた。

どれほど眠っていたのだろう。まだ夕方のようだけど、早く起きなくちゃ。

気だるくて、目を開けるのすら億劫だった。

――でも、起きなくちゃ。

「……カ……ん」

――だれ？　だれか、傍にいる？

顔の近くに、何かがある気配がした。人の息遣いが聞こえる。

「……カ……ちゃん……」

「……ん……」

頭がまだぼんやりとして、重い。

だけど、もう起きなくちゃ。

再び目をこすり、両手を額にのせて、そのままゆっくりと目を開けた。その瞬間、予期しなかったものが目に飛び込んできた。

息がかかるほどの近距離で、わたしの顔を覗き込んでくる明るい茶色の双眸と、ぶつかった。

「やぁ、ミズカちゃん」

「……っ、き……きゃぁぁっ！！」

ほとんど反射的に、わたしは思いっきり腕を振って、間近にあっ

た人の頬を一切の加減なく、殴ってしまった。……またしても。

わたしの手のひらも痛かったけれど、叩かれた人の方が、きっともっと痛かったろう。

「おー、いてっ」

けれど、平手打ちの被害者は、ひっぱたかれた頬をさすりながら、なんだか愉快げに笑っている。

「う～ん、これで二度目かぁ」

「すっ、すみません、イスラさんっ」

ベッドに座ったまま、わたしは深々と頭を下げて謝った。申し訳ないやら恥ずかしいやらで、顔が赤くなってるのが自分でもわかる。

「ははっ、いいっていいって、気にしないで。驚かせちゃった俺が悪いんだし」

イスラさんはにこやかにそう言って、片手をひらひらと振った。昨日ひっぱたいたのとは反対側の頬を叩いてしまったので、イスラさんは「これで左右、公平だ」なんて、冗談めかす。

「でもっ、ほんとにすみませんっ！　なんだか手が反射的に動いてしまって」

自分でも不思議なほど、体が勝手に反応してしまう。こんなこと、他の誰にもしたことないのに。

ほんとにもう、無意識的にとはいえ、なんてことしちゃったんだろう！

「加減せずひっぱたいちゃったから、痛いですよね？　ほんとにすみませんっ！　あ、湿布！　湿布ありますから、貼った方が……」

アリアさんが持ってきてくれた湿布はまだサイドテーブルに置いてある。それを取ろうと体を動かしたのだけど、イスラさんは笑ってわたしをとめた。

「いいっていいって、すぐ治るし。だからそんな申し訳なさそうな

顔しないでよ」
「でもっ」
「――その通りだ。ミズカ、謝る必要などないと言ったろう」
いつの間にやってきたのか、ユエル様が忽然と姿を現し、剣呑な顔でイスラさんの肩を掴んでいる。イスラさんは背後に立ったユエル様をちらりと振り返り見、「部屋に入る時は声くらいかけろ」と文句をつけた。
ドアが開けっぱなしになっていて、昨日と同じように、わたしの悲鳴を聞いて駆けつけてくれたんだろう。
それにしたってユエル様、気配がなさすぎます！　どうしていつもいつも、忽然と現れるんですか！　と、責めたいところだったけれど、驚きのあまりとっさに声が詰まってしまった。ぽかんと間の抜けた顔をして、ユエル様とイスラさんを眺めいるばかりだ。
「イスラ、塵となって消えたいのなら、いつでも希望を叶えてやる。まどろっこしいことはせず、私に直接そう言え」
「ミズカちゃんみたいな可愛い女の子の手にかかって消えるのなら本望だが、おまえさんみたいな野暮な野郎に消されるなんて、ご免こうむるね」
「戯言を」
気まずい雰囲気になってしまうのかと焦ったけれど、どうやらそこまでは至らないようだ。
イスラさんはユエル様の冷淡な態度や口ぶりには慣れっこになっているようだし、ユエル様もイスラさんの冗談口を（たぶん）本気にはとらず、軽くあしらっている。
心底いがみ合っているようには見えないし、互いに反目しているようでいて、遠慮がない分、存外気の合った心友だったりするのかもしれない。
二人の関係性を勝手に斟酌していたわたしの心の内を見透かしたとも思えないけれど、ユエル様はイスラさんを押しのけ、わたしの顔を覗き込んできた。

「ミズカ、イスラの厚かましい面を殴って痛かったろう？　手は、大丈夫？」
「あの、え……ーっと……」
そりゃぁたしかに痛かったけれど……、そう訊かれると返答に困ります、ユエル様。
「最悪の目覚めだったようだが、少しは休まったかな、ミズカ？　まだ疲れの残った顔をしているが」
「ありがとうございます、ユエル様。大丈夫です。足も、もう痛みませんし」
ユエル様は「そうか」と応えたものの、心配そうな顔のままだった。
ユエル様の視線を受けていられず、目を逸らしてしまった。挫いた足ではなくて、なぜなのか、胸がきゅぅっと締まるように痛みだして、喉元が苦しくなった。
ユエル様に心配をかけたくないのに、どうしてこんな態度をとってしまうんだろう。
自分の感情が、よく分からない。
下唇を噛み、俯いた。痛みをすり替えようと唇を噛んでも、胸の痛みは消えなかった。
「ミーズカちゃん？」
ユエル様を押しのけ返し、再びわたしの顔を覗き込んできたのは、イスラさんだった。明るい茶色の双眸で、じっとわたしを見つめる。
「ミズカちゃん、どした？」
「あ、……いえ、なんでもないです。寝起きで、ちょっとぼうっとしてしまっただけで」
わたしは首を左右に振り、笑みを作った。イスラさんは「そう？」と、ちょっと不審そうな声を返してきたけど、深くは追求してこなかった。横にいるユエル様も同様で、銀糸の髪を物憂げにかきあげて嘆息し、「おまえのせいだろうが」とイスラさんに当てつけて毒づいた後、口を閉ざした。イスラさんは聞こえぬふりをして、話題

をかえた。
「実はさ、ミズカちゃんにちょっとお願いというか、プレゼントがあるんだけど」
「え？」
「これ」
イスラさんは、いったいどこから取り出したものやら、紙袋をわたしに差し出した。
「なんですか？」
わたしは首を傾げる。
お願いで、プレゼント……って？　どういうこと？
「これさ、ミズカちゃんに着てもらいたくって買ってきたんだ。ぜったい似合うと思うから、着てみてほしいんだ」
にっこにこの笑顔でイスラさんが頼み込んできた。
贈り物はもちろん嬉しかったのだけど、いきなりのことで、やっぱりちょっととまどってしまった。
困惑顔をユエル様に向けると、ユエル様は苦っぽく笑っていた。遠慮せずもらっておきなさい。ユエル様の目がそう語っている気がする。
断る理由もなかったし、わたしはありがたくそれを受け取った。
「ありがとうございます、イスラさん。あの、中を見てみてもいいですか？」
「もち！　てゆーか、今すぐ着てみてよ」
「え、今……ですか？」
「うん。もうさぁ、それ着たミズカちゃんが見たくてそっこーで帰ってきたんだよね。おっと、ユエル、心配しなさんな。下着でも水着でもねーから」
「……」
ユエル様は眉間に深々と皺をよせて、イスラさんを睨んでいる。もちろんイスラさんはユエル様の剣呑な目つきなど、まったく気に留めていない……どころか、ユエル様のそういった反応を見、面白

がるきらいがあるように思う。イスラさんは、そういった茶目っ気というか悪戯心のある人のようだ。そういうところはユエル様とよく似ている。
　ユエル様の機嫌を損ねかねない軽口をさらりと言えてしまうイスラさん。非友好的な態度を崩さないのにイスラさんを拒絶しきれないユエル様。
　絶対に違うと否定するだろうけど、気が置けない友人、なのじゃないかしら、ユエル様にとってのイスラさんって。
「で、靴も用意しといたから。ここ、置いとくね？」
　これもまた、いったいどこから取り出したものか、手品並みの唐突さと早さで、イスラさんは白い箱をわたしに見せたかと思うと、ぱっと蓋をあけて、中から蝦茶色のショートブーツを取り出した。
「あ、なんなら俺、着替え手伝ってあげよっか？　――って、あっちぃって、ユエル！」
「……」
　ユエル様は眉をきつくしかめ、無言でイスラさんの首根っこを掴むようにして、手を押し当てている。力を入れている様子はないけれど、“力”を使っているのが分かった。加減はしているのだろうけど……。
「冗談に決まってんだろ。いちいち本気にとるなよ！　ほんと余裕ねーな」
「ミズカ、嫌なら着替えなくてもいい」
　ユエル様はまだイスラさんの首根っこを掴んだまま、少しだけ表情をやわらげてわたしの方に視線を移した。
「それに、体がだるいようなら、無理に起きなくてもいい。イスラの言うことなど無視してかまわないから」
「いっ、いえ、もう起きます。それに何か飲みたいから……。あの、それよりユエル様」
　イスラさんが苦しそうです、手を離してあげて下さいと言おうとしたのに、ユエル様は「それならば」と言葉を被せてきた。ユエル

様はイスラさんの首から手を離さないし、おそらく“力”も当てたままだ。イスラさんは痛みに顔を歪ませている。
「下のリビングで待っているが、一人で、降りて来られる？」
「はい、大丈夫です。着替えて、すぐに行きます」
「急がなくてもいい。もし足が痛むようなら、呼び鈴を鳴らしなさい。くれぐれも無理はせず、慌てないようにね、ミズカ」
「はい」
「それじゃぁ、先に行っているよ、ミズカ」
ユエル様はイスラさんの首根っこを掴んだまま、踵を返した。イスラさんはうっとうしげにユエル様の手を払いのけると、わたしに笑いかけ、「じゃ俺も、下で待ってるからね」と、手を振った。
わたしは、イスラさんを引きずっていくユエル様の背中を、扉が閉まるまで見つめていた。さっきより気が楽になったのは、イスラさんのおかげだ。
だから、贈られた服を着て見せることで喜んでもらえるのなら、いくらでもって思った。
とはいえ、……とんでもない服じゃないといいのだけど。
わたしはおそるおそる、イスラさんから手渡された紙袋を開けた。

12．コスチューム

イスラさんから贈られた服は、とんでもない服ではなく、クラシカルな雰囲気のワンピースだった。――「とんでもない服」がどんなものかは、想像がつかなかったのだけど、ともあれ、着てみるのに戸惑いのある服ではなく、その点は一安心だった。

着方が難しい服でもなかったから、簡単に着られた。

着替えたものの、似合うのかどうかは自分では判断がつかない。

ともかく、身なりを整えてから階下の居間に向かった。わたしが降りてくるのを、皆が待っているのかもしれないと思い、なるべく急いで。

リビングには、ユエル様、イスラさん、アリアさん、イレクくん、全員が揃っていた。久しぶりの再会に会話が弾んでいるようだった。ユエル様を除いて。

リビングのドアは開け放たれていて、こそっと覗きこんでから足を踏み入れた。一応、「失礼します」と声をかけて。小声すぎて聞こえなかったろうけど。

そんな中、アリアさんが一番に、わたしがリビングにやってきたのに気がついた。アリアさんは「まぁ！」と声を上げるや駆け寄ってきて、出逢いの時と同じように、いきなりぎゅうっと抱きしめてきた。

「……っ！」

「やっだもうっ、ミズカちゃんったらなんて可愛いのっ！」

この日、アリアさんは短めの丈のTシャツとカプリパンツという軽装だ。腕を伸ばすと素肌が覗くほど短い丈のTシャツは、豊満な胸がより強調されているようで、ついそこに目がいってしまう。その、「つい目がいってしまう」部分に顔を押しつけられて、心地い

いやら、気恥ずかしいやら、反応に困ってしまう。
「ミズカちゃん、それ、とってもよく似合ってるわ！」
そう言って、アリアさんは体を離してくれた。目を輝かせて、わたしの全身を見やり、感嘆の声を上げた。ユエル様、イスラさん、イレクくんの視線も一斉に集まり、なんだかとっても恥ずかしい。
「父さ……イスラですね、あの服を贈ったのは？」
呆れたようなため息をついて言ったイレクくんに、イスラさんは親指をたて、自慢げに応えた。
「おう。どうよ、ミズカちゃんに似合ってるだろ？」
「ほんと、可愛いわぁ。そうねぇ、どうせなら髪もこう……二つに分けて編んでみたらもっと可愛いんじゃないかしら」
「そうだ。これこれ、オプション。白レースのカチューシャもつけたら可愛いんじゃないかと」
「あら、いいかも。似合うかも」
アリアさんはイスラさんがすかさず差し出したカチューシャを嬉々として受け取ると、早速わたしの頭に装着し、髪も整えてくれた。
「……」
迷惑なんてことはちっともないんだけど、どのような反応を示してよいのか分からず、困ってしまう。
それにユエル様の反応も気にかかった。だって、さっきから黙ったままで、一言も声をかけてくれない……。
ためらいつつも、わたしは一人がけのソファーに深く腰を沈めているユエル様に目を向けた。
ユエル様は僅かに眉をしかめ、驚きつつも可笑しがっているような、けれどちょっと呆れてもいるような、そんな複雑な顔をしていた。不快げな顔をしてはおらず、ホッと胸を撫でおろした。
ユエル様の反応を気にかけていたのは、わたしだけではなかったみたい。
「申し訳ありません、ユエル様。イスラの悪ふざけにミズカさんを巻き込んでしまって」

すまなそうな顔をして父親の所業を謝罪するイレクくんに、ユエル様は苦笑で答えた。
ユエル様はため息をついてから、苦虫を噛み潰しているような顔を、再びこちらに向けた。
そして、わたしを見つめる。
目があって、途端、胸がドキドキと早鐘を打った。
ユエル様の深緑色の双眸に、イスラさんから贈られた衣服を着ているわたしは、どんな風に映っているんだろう。
いま、わたしが着用している服は、イスラさんの説明によると、「メイド服」という「制服」らしい。
こげ茶色のワンピースの総丈は、膝よりやや下の長さで、裾の部分に白いレースが施されている。袖の付け根部分はやや膨らんでいて、長袖の先は折り返されていた。そこにも白いレースが縫いつけられていて、高めの衿にも控えめなレースが施されている。肩がけの白いエプロンは、肩部分も裾部分も、ギャザーの寄せたレース仕様になっている。装着されたカチューシャとエプロンはおそろいらしい。
メイドというのはつまり「女中」のこと……よね？
女中の制服にしては、ひらひらとしすぎて非機能的で、掃除もしにくいと思うのだけど。
そんなことをぼんやりと頭の隅で考えている間に、アリアさんはわたしの肩より少し長めの髪を二つに分けて編み、結んでくれていた。
「もうっ、ミズカちゃんったら、お人形さんみたいで、ほんとに可愛いわ！　ねっ、そう思うでしょ、ユエル？」
「ナイスチョイス、俺！　どうよ、ユエル？　いい感じじゃね？　アレだ、アレ。なんだっけ、萌えとかいうヤツだ」
アリアさんとイスラさんは、わたしを間に挟み、大喜びではしゃいでいる。イレクくんはソファーに腰かけたままこちらには来なかったけれど、「よくお似合いです」と笑顔を向けてきた。

「クラシカルな雰囲気がミズカちゃんには合うだろうなとこれを選んできたけど、正解だったな」
アリアさんとイレクくんの賛辞に、イスラさんはほくほく顔だ。
ちなみに、わたしに「メイド服」を贈ってくれたイスラさんはというと、「メイド」とか「萌え」とかとは縁のなさそうなラフな格好をしている。
Tシャツにジーンズという軽装なのだけど、Tシャツに描かれてあるプリント文字がいかにもイスラさん的で可笑しかった。
黒地に真っ赤な毛筆描きで、背中に「送り狼」と。
「送り狼」って、イスラさんはその意味は知っているのかしら？
「いや、俺さ、漢字はまだいまひとつ読めないから、実のとこ、意味はよくわかんないんだよね。で、他にこんなTシャツも勧められて買ってみた」
と言って見せてくれた真っ青なTシャツは、やはりプリント文字があって、「軟派一筋」。
イレクくんは呆れかえり、「まったく、呆れますね」と呟き、その後「まぁ、似合いの言葉ですが」と揶揄した。どうやらイレクくんは漢字が読めるらしく、意味もわかるようだった。
わたしはというと、「送り狼」と「軟派一筋」の意味はなんとなくわかるけれど、イスラさんの言う「萌え」という言葉の意味が今一つ理解できなかった。わたしの知っている「萌える」の意味とは、なんだか少し違う気がした。意味を訊いてみると、
「や、俺もよくわかんねーけど。ミズカちゃんみたいな可愛い娘を“萌え”とか言うらしいぜ？」
イスラさんはなんとも曖昧な返答をくれた。
「現代用語ですね。一部の方々が頻繁に使う俗語、といっていいでしょう」
イレクくんが横から補足してくれた。「僕も、詳しくはありませんが」と苦っぽい笑みを目元に浮かせて。
そんなことはどうでもい言ったいった風に、イスラさんは話を戻

した。
「他にもロリータ風とか、ネコ耳とネコ尻尾付きのワンピもあったんだけど、ミズカちゃんにはやっぱこれでしょと思って」
「……はぁ」
イスラさんは、日本人のわたしでもよくわからない流行にうっかりのせられてしまっているみたいだ。イスラさん達は、もしかしたらけっこう長い期間日本に滞在していたか、頻々と来日していたのかもしれない。三人とも、日本語がとても上手だし。
それにしても、こういう……何だかよくわからない情報や流行に慣れきってしまうところも、ユエル様とイスラさんはちょっと似てる……なんて言ったら、二人とも真っ向否定するんだろうな。
それはそうと、「メイド服」をいただいたお礼をまだちゃんと伝えてなかった。遅まきながらそれに気付き、急いで謝辞を述べた。
「あの、イスラさん、ありがとうございました。喜んでもらえたのならよかったです」
「うん、俺こそすっごく嬉しいよ、ありがとね、ミズカちゃん」
そう言って、イスラさんは満面の笑みを浮かべた。
「やー、ほんと贈った甲斐があったってもんだぜ！　よし、次はロリ系でいこう。ミズカちゃんにめっちゃ似合いそうだし！　不思議の国のアリスとかオズの魔法使い的なやつで何点かいいのあったんだよね。それまた買ってくるから、お楽しみに！」
「えっ、えーっ……と」
お楽しみにと言われても、「はい」とは頷きがたく、無下に断るのも失礼だろうと、言葉を濁した。
アリアさんは「それは楽しみね」と嬉しげに微笑み、わたしの顔を覗き込んでくる。
「ミズカちゃんって、ついついいじりたくなっちゃう小動物系の可愛さよね。目もくりっと大きくて、見つめられるとどきどきするわ」
「そんな……」
見つめられてどきどきするのは、アリアさんこそだと思う。

優麗な微笑みはまぶしいくらいだ。まじまじと見つめられて、赤面してしまった。
「イスラもアリアさんも、そろそろミズカさんを解放してあげたらどうです？　困ってらっしゃいますよ？」
イレクくんは助け舟を出すのがとっても巧みだ。本日二回目の船出に、わたしはまた助けられた。
イスラさんとアリアさんに挟まれて、迷惑とかじゃないのだけど、ちょっと困ってしまっていた。ユエル様に声をかけるきっかけがつかめなくて。
「あ、あのっ」
わたしはようやくユエル様の方に体を向け、声を発した。
ユエル様は体を少し傾けて、頬杖をついている。物憂げな様子で、けれどわたしをじっと見つめていた。目が合うと、少し目をやわらげてくれた。
ユエル様の友人に服を贈られ着てみせたことで、その友人……イスラさんには喜んでもらえたけれど、ユエル様はどう思ってるんだろう。訊くべきなのかな、「どうですか？」って？
でも、どう言って訊けばいいのかわからない。わからないし、訊く勇気もなかった。
だから、発した台詞はまったく別のことだった。声が、ちょっと上擦った。
「あ、あの、ユエル様、お茶をお持ちしましょうか？」
「……」
「皆さんの分のお茶も、お持ちします」
そしてわたしは、ユエル様の了承も得ず、逃げ出すかのように早足でリビングから出て行った。
深い緑色のまなざしを背中に感じながら。

13．過現

わたしは色々と自覚が足りないのだと思う。迂闊で、鈍い。
ユエル様にも、「ミズカは基本的に敏いのだが、思いがけず鈍感なところがあるね」と苦笑されたことがあった。
何事にも、気付くのが遅すぎるきらいがある。それは自覚しているのに……。
足の力が抜け、リビングを出てキッチンへ向かうその途中、へたり込んでしまった。
眩暈を覚え、目の前がぐらりと歪み、立っていられなくなった。足元が崩れ、その場に膝をついた。
こうなって、やっと気付く。
「……っ」
こんなこと、以前もあった。しかも一度じゃない。何度も同じことを繰り返してきた。
前兆はあったはずなのに、それに気付かなかった。……ううん。それから目を逸らして、気付かぬふりを決め込んだんだ……。
「――ミズカ」
名を呼ばれ、ハッとして顔を上げた。
「……ユ、エル様」
片膝をつき、わたしの腕をそっと掴んだのはユエル様だった。眉宇をしかめ、厳しい面持ちでわたしを見つめている。
「だから言っただろう、くれぐれも無理はするなと」
「……足は、もう痛くないです」
「足ではなくて」
「……」
ユエル様はわたしの手を取った。そしてわたしの指先を、そっと自分の首筋にあてがう。
「渇いているのだろう？　飲みなさい」

「……あ、の……」
「限界まで我慢をするから立ってもいられなくなるんだよ。いつまでたっても慣れないんだね、ミズカは」
「……すみません」
ユエル様の目を見ていられず、俯いた。ユエル様の首にあてがわれた手に、無用の力みがこもる。指先から、生気がゆっくりと流れ込み、全身に熱が伝わっていく。
わたしに生気をくれる時、ユエル様の緑色の瞳はさらに深みを増して美しく熱帯びる。深緑色の燠火のように麗しく、ひどく悩ましい。
「あ、あの……すみません、もう、いいです。ありがとうございます」
いつまでたっても慣れない、そのことが申し訳なかった。
生気を飲むことに対するとまどいはなかなか消せない。それをユエル様は責めたりはせず、かえってすまなそうな顔をする。だから早く慣れなくちゃと思うのに、気後れして自分からはうまく飲めず、いつだってユエル様の手を煩わせてしまう。
「ミズカ、立てる？」
「あ……、はい。すみません」
ユエル様は手を離さず、わたしの体を支えるようにして立ち上がらせてくれた。
「私こそ、悪かったね」
「……え？」
「ミズカが慣れないのは仕方のないことだ。私がもう少し気をつけてあげるべきだった。限界まで我慢させて、悪かったね」
「いっ、いえっ、そんなっ！」
思いがけずユエル様の謝罪を受け、わたしはうろたえた。
以前、今と同じように渇ききって倒れこんだ時は「渇ききる前に自分で気づきなさい」と窘められたのに……。どうして急に、「悪かった」なんて。

いったいどうしたの、ユエル様？　何か……違う。今までのユエル様と、何かが違う。違和感が拭えない。
眷族の話をしてくれてから、ユエル様のわたしに対する態度が少し変わってきている。気のせいかもしれない。ふと見せる物言いたげで差し迫ったような表情は、いったい何なのだろう……？
「ミズカ、もう少し飲んでおきなさい」
わたしの手を握り直して、ユエル様が言った。
「まだ足りないだろう？　今夜あたり天候が崩れるから、もっと飲んでおいた方がいい」
「でも、ユエル様は大丈夫なんですか？」
「私なら大丈夫だ。毎日新鮮な生気を飲んでいるから」
「……はい……」
促されるまま両手を握り、そこから生気を飲ませてもらった。
生気を分けていただいているその途中、「あらあら」と背後から声がかかった。振り返るとそこにアリアさんがいた。
「ずいぶんと色気のない飲み方だこと」
「色気？」
訊き返したのはユエル様だった。
わたしはというと、訳もなく赤面してしまい、その顔をユエル様に見られなくてホッとしていた。
「なんて色気のない生気の飲ませ方かしら、と思って。いつもそうなの？」
「余計なお世話だ」
思ったとおりの返答だったらしく、アリアさんはクスクスと可笑しげに笑う。
ユエル様は眉をひそめ、渋面をつくった。でも、わたしの手は握ったまま。
生気はもうたくさん飲ませいただいたから、手を離してくださいとも言えず、ちょっと困ってしまった。生気のせいではなく、手や頬が熱い。

「ふふ。ユエル、変わったわねぇ。それとも相変わらずと言うべきかしら？」
「……」
変わったけれど、相変わらず……？
わたしはユエル様とアリアさんとを繰り返し見やって、首を傾げた。
それに気付いて、アリアさんは笑みを深くした。
「ユエルの素直じゃなく不器用なところは相変わらず。でも、ずいぶん変わったのよ。そう、むかーし昔のユエルとはね。顔つきまで変わっちゃって、驚いたくらいよ？」
「そう……なんですか？　顔つきまで？」
「反抗期の子供みたいな捻くれて顔をしてたのに、とっても柔和になったわ。イスラもびっくりしてたもの。ちょっとは成長したみたいだなって」
「アリアやイスラの言うことは、信用しない方がいいね、ミズカ」
耐えかねたように、ユエル様が口を挟んできた。
「特にアリアは物事をオーバーに言い過ぎる。それに、そんな昔のことをいちいち憶えている連中じゃないからね」
「はぁ……」
たしかに「昔」の年数単位が、一年、二年という単位じゃなさそうだから、憶えていなくても当然かもしれない。アリアさんの言う「むかーし」って、いったいどれくらい前のことなんだろう？
「あら失礼ね、ユエル。イスラはともかく、あたし、記憶力はいいほうよ？　なんなら話して聞かせてあげましょうか、ミズカちゃんに。ユエルのあんなことやそんなことを？」
「同じように、私も思いださせてあげようか、アリア？　あんなことやそんなことを。ミズカに聞かせても良いのなら？」
焦る様子もなく、ユエル様は不敵に笑ってアリアさんに言い返した。
「ま、いやね。可愛げのない子。そういうところは相変わらずなん

だから」
アリアさんは子供っぽく拗ねて、そっぽを向く。
「顔立ちだけじゃなくって、そういう不遜な性格も母親譲りね」
「アリアさん、ユエル様のお母様をご存知なんですか？」
アリアさんの付け足した言葉に、速攻で反応してしまった。
ユエル様はご自身の過去を詮索されるのを好まれないようだったから、家族のことなど、ほとんど聞いたことがなかった。母親のことも、銀髪緑眼の美しい女性だったくらいにしか聞かされていない。
ユエル様が話してくださらないのなら、わたしから聞くべきではないと、我慢してた。でも、知りたい気持ちはやっぱりあって、出きれば知りたいと、ずっと思ってた。
「ユエルの母親？　ええ、もちろん知ってるわ。ユエルが生まれる前からの友人だったもの」
わたしはまじまじとアリアさんを見つめた。
「ユエルの母親は、あたしが初めて出逢った生殖者だったわ。彼女の方がずっと年上だったのだけど、同じ生殖者で、生殖の時期も重なっていたから、相談相手になってもらってたの。子供を産んでからもずっと付き合いは続けてて、大切な友人だったわ。……もう、いなくなってしまったけれどね。あらあら、ミズカちゃん、そんな哀しそうな顔をしないで？」
「……すみません」
ユエル様の、わたしの手を握る手に力が入った。少し汗ばんでいるように感じるのは気のせいかもしれないけど、わたしは無意識的にユエル様の手を握り返していた。
「人のこと言えないけれど、ユエルの母親は子沢山だったのよ？だから、生きているのかどうかはあたしには分からないけど、ユエルには兄弟がたくさんいるはずよ」
「そうなんですか？　初耳です、ユエル様」
顔をユエル様の方に向きなおした。
「……そうらしいね。会ったことがあるのは二、三人だけだから、

兄弟が全員で何人いるかなど、私もいちいち把握していない。それに兄弟の父親が全部同一人物とは限らないからね」
「……」
言葉に詰まってしまった。もしかして、言いたくないことをユエル様に言わせてしまったのだろうか。別段不機嫌顔ではないけれど、淡々とした口調は他人事を話すみたいだ。
聞いてはいけないことだったのかなと、後悔した。
「父親のことは、しばらく一緒にいたから憶えているが」
ユエル様は嘆息した後に、語を継いだ。声に険はなく、微風がかすめていくような静かな声音だった。
ユエル様は、わたしが「すみません」と言うのを予測して、先回りをしたのかもしれない。そしてユエル様は半ば強引に話をすり替えた。
「アリアにしたって、あれだけ生んでおきながら、一緒にはいないだろう？　兄弟達もそれぞれ別の場所にいるのだし」
ユエル様の言に、わたしは「そういえば」と思い立ち、再びアリアさんに目線を戻した。
訊いてみたかったことだった。
アリアさんも生殖者なのだからお子さんがいて、旦那様もいるはず。旦那様……つまりアリアさんの眷族は今現在どうしてらっしゃるのか、と。
アリアさんは澄んだ青い双眸を優しく細めて、語ってくれた。
「ダーリンとは、生殖者になったと気付く前に出逢ってたの。色々とあったけれど、あたし的には生殖者になれてラッキーだったわ。おかげで彼と永い時をずっと一緒に過ごしてこれたのだもの。でも、もう二百年近く経つのかしら？　彼ったら、先に逝っちゃったの。彼以外の眷族はいなかったから、今は独り身よ。生殖の期限は過ぎちゃったから、もう眷族は持てないわ」
あっけらかんとした口調でアリアさんは言うけれど、やはり淋しそうだ。

アリアさんがどれほど“眷族”だった旦那様を愛してらっしゃったのか、切なくなるくらいに分かる。切ないけれど、アリアさんの微笑みは優しく穏やかで、悲しい気持ちにはならなかった。

「もう眷族は持てない」というアリアさんの言葉に、わたしは改めて“眷族”の存在理由を知りたくなった。理由というか、存在意義……だろうか。

いまひとつ理解していない、“眷族”のこと。それをもっと詳しく知りたかった。

だけどユエル様がいる前では訊きづらかった。またユエル様に突き放されたらどうしようと不安が先に立って、口から出かかっていた質問は、再び喉の奥にしまわれた。

代わりに別のこと……アリアさんのお子さん達について尋ねてみた。お子さんは、なんと五人いらっしゃるとのこと。わたしはあんぐり口をあけ、まじまじとアリアさんを見つめた。

「五人とも生きてはいるみたいね。元気でいるようだけど、いちいち連絡を取り合ったりはしないから、どこにいるかまでは分からないわ。兄弟でつるんでた時期もあったみたいね」

ちなみに、男の子四人と女の子一人、だそうだ。

アリアさんはそのぷっくりとした唇に人差し指を当て、気紛れな少女のような仕草で小首を傾げた。

「五人とも、あいにく生殖能力は持たなかったけど、吸血鬼らしく好き勝手にやってるでしょう。生殖能力を持たなかったからこそ、好き勝手やってるとも言えるわね。まぁ、吸血鬼らしくしすぎて退治されちゃったりなんかしないよう注意はしておいたけれど、どうかしらねぇ」

「そうなんですか……」

気の利いた言葉の一つも出ず、ぼんやりとした声を発した。

話を聞くだけでは実感はわきにくいけれど、やっぱり驚いた。

アリアさんは見た目年齢……二十代半ばから後半といったところで、五人の子持ちにはとても見えない。

お話を伺う前からユエル様より年上でいらっしゃることはなんとなく察していたけど、ユエル様のお母様とご友人だったということは、いったい、お幾つでいらっしゃるのだろう。さすがにそれは訊けなかった。……知りたくもあり、知るのがちょっと怖い感じもする。

でもわたしだって、見た目は十代だけど、生まれてからは百年近くが経ってて、「何歳なのか」と問われたら、きっと戸惑ってしまうだろう。

ユエル様の眷族になって、もう随分と経つ。そろそろいろんなことに慣れ、ちゃんと自覚しなくちゃいけない。ユエル様を困らせないためにも！

「あ、あの、ユエル様！　わたし、お茶淹れてきます！」

唐突に、切り出した。ユエル様は少し面食らったような顔をし、目を瞬かせた。

「ん？　……ああ」

ユエル様から手を離し、わたしは意気込んでみせた。

「すぐに用意しますから、リビングの方で待っててください。アリアさんも！」

「ミズカ、もう……」

「もう大丈夫です！」

こぶしをつくって両腕を上げ、元気ですというポーズをして見せた。

するとユエル様は、ちょっと呆れたようにため息をついて、やわらかな笑みを浮かべた。そして、

「その服、なかなか似合っているよ、ミズカ。その格好で給仕されるのも、悪くはないかな」

少しからかうような口調で、そう言った。

わたしが耳まで赤くなったのは、至極当然のこと！　だって、目も眩むような艶然とした微笑を向けてくるのだもの！

もうっ、ユエル様、勘弁してください！

照れ隠しも手伝って、わたしは虚勢を張って言い返した。
「わたし、女中ですから！　メイド服が似合うのは当たり前なんです！」
その一言が、ユエル様の眉目を曇らせてしまうなんて思いもせずに。

14．予兆

雨は、夜半に降り始めた。
早めに床に就いたのだけど、なかなか寝付けなかったうえ、ようやく眠れたと思ったら、深夜に目が覚めてしまった。
窓ガラスをたたく雨音と、背中に走る痛み、そして遠い日の“記憶”――……
「……」
安らかざる眠りから覚めて、わたしは安堵のため息をこぼした。
背が、微かに痛む。痛みはすぐに治まったけれど、体が酷く重かった。
電気スタンドに手を伸ばし、スイッチを入れて時間を確かめた。
卵を横に置いたような形のクリーム色の目覚まし時計の針は、一時をさしていた。
両手で顔を覆い、背中を丸めた。
……憶えてなくて、よかった。
一瞬過ぎった夢の記憶は、いつまでも脳裏に留まっていることはなかった。
憶えていないのに、どうして？　酷い悪夢を見ていた気がする。動悸がして、冷や汗までかいている。背中の痛みは、胸が痛むよりもっと切実に……現実的にわたしを襲う。
篠突く雨の音が、耳につく。
室温の低さに体温が奪われていくようだった。
――何か、温かいものでも飲もう。
ユエル様から生気をもらったばかりだというのに、渇きが癒えない。
それはきっと雨のせいだ。
そう思っていたかった。

ユエル様の眷族になってから、わたしはなぜか雨に弱くなってしまった。雨、というより湿気、かな。
そういえば、吸血鬼って「流れる水」が弱点だって本で読んだことがある。
わたしの場合でいえば、流水自体は平気だ。だから蛇口から流れ出る水に驚いて腰を抜かすなんてことはないし、小川の辺で日向ぼっこをするのは好きだったりする。
わたしのご主人様であるユエル様も、雨が苦手なようだ。
ユエル様は、
「私の力の属性と反するものだから、こればかりはいたしかたないね」
と述懐していた。
苦手というだけでわたしほどに弱くはないから、雨の日でも普通に過ごしている。億劫がって外出したがらないというだけ。
――だけど。
ユエル様と出逢った……というより見つけた……あの日は、雨だった。雨の中、ユエル様は行き倒れていたのだ。青ざめて、いかにも息も絶え絶えになって憔悴しきってた。
どうしてだったのかしら？
これも、常々疑問に思っていて、そして訊けずにいたことだった。だってあれ以降、ユエル様が具合悪そうにしているところを見たことがない。
生気不足のせいで前後不覚になり、道端で昏倒してしまうほど弱りきってしまうなんて、今じゃ想像もつかない。
今日みたいに、渇ききってしまって倒れこんでしまうのは、いつもわたしの方だ。
半袖のパジャマの上に薄手のカーディガンを羽織り、寝室を出た。

廊下の小窓に映っているのは、濃紺の闇。窓ガラスはしとどに濡れ、幾筋も雫を垂らしていた。周囲に人家がないせいで外灯もなく、森は深い夜闇に包まれている。枝々をうつ雨音が暗い森に響き、さらに閉塞感を募らせていた。

身を竦ませたのは暗闇が怖いからではなく、気温の低さのせい。夏とは思えないほど肌寒い。昼夜の気温差は、こうした高原地特有のものなのかもしれない。

深夜ということもあり、足音を忍ばせて廊下を歩き、階段を下り、キッチンに向かった。

階段を下りたところで、ふと、リビングから明かりがもれているのと、話し声がするのに気がつき、足をとめた。

ユエル様と……イスラさんの声？

キッチンへ向けていた体を、リビングの方へ向け、そろりと近寄った。

ドアが少しだけ開いていて、そこから明かりと二人の話し声が漏れていた。

「ユエルさぁ、おまえいったい何考えてんの？」

「何とは、何だ」

呆れたような声のイスラさんに、ユエル様は相変わらずつっけんどんに応えている。声だけでも、二人の表情が想像できる。

「どういう了見なんだ？　まぁ、おまえさんらしいっちゃらしいが、ちょっとひでー気もするな。焦らすのも程度ってもんがあるだろ」

「余計なお世話だ」

「だって、おまえ、もう期限迫ってるじゃねぇの？　だから俺達を呼んだんだろ？」

「おまえを呼んだ覚えはない」

「なんだよ、つれねーなぁ。心配して来てやったってのによ」

「心配？　嘘をつくな、嘘を」

「まぁ、実際のところはイレクが会いたがってたってとこなんだけどな。イレクが言ってたぞ？　余裕なさそうだってさ」

「……」
わたしはドアの影に潜むようにして立ち、息をひそめ、耳をそばだてていた。
でも、これって立ち聞き……盗み聞きじゃない。
だめだよこんな、失礼なこと！　早くここから立ち去らなきゃ！
――と思うのに、体が動かない。
ユエル様とイスラさんの会話が気になって仕方がなかった。
「それにしても意外だな。昔はけっこう手当たりしだいで、無節操な方だったのによ？」
「人聞きの悪い。第一、おまえほどではない」
「そっちこそだろ？　人を浮かれ男みたく言うなよ」
「事実だろう、浮かれ者なのは」
「ユエルにだけは言われたくないなぁ。言っとくが、眷族に関してだけは、おまえにあれこれ突っ込まれる筋合いはないぜ？」
不意に、イスラさんの声調子が鋭くなった。
「ユエル、おまえさ、もしかして別の相手探してんの？　占いとかなんとかいって物色中かよ？　ミズカちゃんのことは……――」
え、なに？　別の……相手……？　それに、わたしのことって……？
イスラさんの言葉にドキリと鼓動が跳ねた。
どういう意味……？　先を聞きたくて、つい身を乗り出してしまった、その時だった。
リビングの扉が大きく開けられ、照明の光が影を押しやった。同時に、わたしも光の中に身を晒すことになってしまった。
「……っ！」
またしても鼓動が大きく跳ねた。途端、顔だけじゃなく、全身が熱くなった。
ドアを開けたのは、ユエル様だった。わたしの立ち聞きに気がついて席を立ったのだろう。
「ミズカ」

ユエル様は嘆息し、眉をしかめてわたしを見つめる。怒っている風には見えなかったけれど、気まずくて、目を合わせられない。
「すっ、すみませんっ、あのっ、わ、わたし、あの……っ」
土下座をして謝罪したい気分だ。声が、どうしようもなく上擦ってしまう。
肩をすぼませて、ひたすらに謝った。
「すみません、あのっ、わたし、あの立ち聞きなんてするつもりはなくて……っ」
――嘘だ。
嘘だから、やましい気持ちに苛まれて、ユエル様の顔を見られなかった。
「ミズカ。顔を上げなさい」
「……っ」
「ミズカ」
「はいっ」
ユエル様の平静な声が頭上に落ち、わたしは委縮したまま急いで顔を上げた。
ユエル様はまたひとつ、小さなため息をついた。
「別に怒ってはいないよ、ミズカ。だからそう怯えなくてもいい。……だが、そうだな」
ユエル様は肩越しに振り返り、わたしに向かってにこやかに手を振っているイスラさんを見やった。
今度こそ呆れたように深いため息をつき、ユエル様は力なく肩を落とした。それからまたわたしの方に向き直り、表情を和らげて微笑みかけた。
「ミズカ、立ち聞きをしていた罰として、ブランデーと新しい氷、それからワイン……あのドイツワインがいいな。それとワイングラスを二つ、持ってきて」
「はっ、はいっ、分かりました、すぐにお持ちします！」
「ミズカ、慌てずにね。また躓いたりすると、せっかく治った足首

を痛めるよ？」
「は、はいっ」
ユエル様のからかうような笑みにちょっと安心したわたしは、慌てずにと言われたもの急いで踵を返し、小走りになってキッチンへと向かった。
リビングから少し離れたところで一旦足を止め、ふと肩越しに振り返ってみると、ドアノブを掴んだままユエル様はまだそこにいて、わたしのことを見ていた。深緑色のまなざしが、わたしを捕らえている。
わたしを眷族にしたあの日の、あの時の……哀しげな色と似ている気がした。
胸が早鐘を打って、頬が熱りだした。
頭を左右に降り、脳裏に焼き付いている深緑の切なげなまなざしを消そうとした。けれど、うまくいかない。それどころか頭の中がますますユエル様でいっぱいになって、息が詰まるほどだ。
どうして？　何がこんなに苦しいの？
ユエル様を見ていると……見つめられていると、苦しくて堪らなくなる時がある。
どうしてなのか分からない。けれど、その苦しみは「いけない事」だという気がしていた。だからなるべく気に留めないようにしていたのに。
――それなのにまた苦しくなってしまった。しかも、今までにないほどの苦しさで胸を締め付けてくる。
わけがわからず混乱して、わたしはまた向き直り、駆け出した。
胸が締めつけられる。そして、鼓動の高まりに呼応するように、背がズキズキと痛みだした。
その痛みは、忘れてしまっていることに対しての“罰”のようだった。
忘れている……？　何を……？　思いだせない。……思いだした

くないような、けれど忘れてはいけなかったことのような。
……そう、たしかにわたしは大切な何かを忘れている。

眠っていたはずの記憶の底から、冷たい断罪の声がした。
……――オマエノヨウナ、イヤシイモノガ、……ミノホドシラズナ……――
――……サレル、ハズガ、ナイ……オマエナド、ダレニモ……――
その声は、どことなく亜矢子さんに似ている気がした……――

15．誘い水

大急ぎで居間へ戻ったわたしを、イスラさんが「こっちこっち」と手招きをし、笑顔で迎えてくれた。
竹製の小椅子に座っているイスラさんは、空になったブランデーの瓶を振っている。
「おかえり、ミズカちゃん」
ほんのりと頬が赤らいでいるけれど、酩酊している様子はない。だけど、あのブランデーは、たしかまだ半分以上残っていたはず。……全部、しかもロックで飲み干しちゃったのかな、イスラさん……一人で？
「お待たせしました。ワインはユエル様、ですよね？」
空いたワインの瓶がテーブルに置いてある。これも半分以上残っていたはずのロゼのワインなんだけど、ユエル様お一人で飲み干してしまったらしい。
下戸の吸血鬼なんて様にならないかもしれないけど、お二人とも……飲みすぎなんじゃぁ……。
「それほどでもないよ、ミズカ。このくらいは嗜む程度というものだ」
「ユ、ユエル様、考え読まないでください」
ユエル様は一人用のソファーに深く腰かけ、ゆったりと足を組んでいた。そしてわたしにやわらいだ笑みを向けてくれている。
「私の顔と酒瓶とを見比べて、そうしかめっ面をされてはね」
「それ、は、その……、だって……」
「心配せずとも大丈夫だから。この程度はどうということもない。正気は保っているよ、常にね」
「……」
ユエル様は黒絹のナイトウェアの上に黒地のガウンを羽織っていて、その肩先に銀の髪が流れている。なんとも艶めいた雰囲気で、

酒気帯びのせいでさらに匂い立つような色香がある。
いつも以上に艶美な微笑を向けられ、とても平静ではいられなかった。
きゅうっと胸が締めつけられて、酔ってもいないのに顔が赤くなってくる。……正気でいられないのは、わたしの方だ。
胸の痛みに耐えかねて、わたしはいささか強引に話を転換させた。
「あ、あのっ、イスラさんは、ロックですよね？　おつぎします」
「お、ありがと、ミズカちゃん」
今日イスラさんが贈ってくださった「メイド服」は着用していないけれど、メイドらしく給仕をしようと居ずまいを正した。けれどユエル様がすかさず口を挟んできた。
「ミズカ、イスラに構う必要はない。イスラも、何ちゃっかりグラスを出している。自分で注げ。ミズカ、こちらへ。そこに座りなさい」
「え、えっと……」
不機嫌そうなユエル様の口調に、わたしはちょっと身をすぼませた。
「おいおい、そう脅すように言うんじゃないよ、ユエル。ほんと余裕ねぇのなぁ。あ、いいよ、ミズカちゃん、セルフサービスらしいから、自分で入れるし」
「……はい」
にこやかに笑って、イスラさんはわたしの手から新しいブランデーを受け取った。
「お、これ、俺の好きなやつだ、カルヴァドス。ありがとね、ミズカちゃん」
カルヴァドスはフランスのノルマンディー地区で造られる、リンゴを主原料とした蒸留酒だそうだ。お酒には詳しくないし、飲む機会もあまりないので、その味がいか程のものかは分からない。とりあえず高級そうで美味しそうだったから持ってきたのだけど、イスラさんのお好きなお酒のようでよかった。

ホッとしたのもつかの間、少々不機嫌な様子で、ユエル様が横やりを入れてきた。
「ミズカ、イスラに持ってくるのなら安酒で十分だ。……いや、私が指示しなかったのがいけないのだが」
「で、でもユエル様、安酒は一本も置いてないです」
「まぁ、たしかにそうか。しまったな」
心底口惜しげに眉をしかめるユエル様を、イスラさんは「おまえはほんといい性格だよ」と睨みつける。とはいえ、さほど険悪なムードにならないのは、やっぱりお二人が長年の知己だからだろう。
それにしても、ユエル様とイスラさんは、見た目だけで言うなら、とても対照的だ。たとえば、今の服装にしたってそう。
ユエル様は全体的にシックにまとめてて、佳人に相応しい装いが常だ。カジュアルなスタイルに決めることもあるけれど、ラフ過ぎず、美装は崩さない。
一方のイスラさんは白いTシャツと綿パンツというラフな格好で、どうやら普段からそうした服を好んで着るみたい。堅苦しくなく、緩くて気軽な雰囲気がイスラさんにはある。明るい茶系の髪も、洗った後そのまま手櫛で梳いたような整え方をしていた。おおらかなイスラさんらしい形貌だと思う。
ユエル様が、「堅苦しくて、緩さがない」というのではない。むしろ普段のユエル様は、けっこう緩くて、のんびりしすぎていると思うくらいだ。
イスラさんに対してだけとげとげしい態度になる。でも、それだって本気で厭ってのことではないと……思う。
「出してしまったものは今更しようがない。ミズカ、イスラは放っておいていいから、こちらに座りなさい」
「あ、……はい」
わたしは落ち着かない心持ちでユエル様とイスラさんとを見やった。「どうしよう」と迷ったけれど、ここはともかく、ユエル様の言葉に従うべきだと断じ、ユエル様が指示した椅子に腰を下ろした。

ユエル様はワインを手に取ると、手早くコルクを抜いた。
そして、
「ミズカ、グラスを持ちなさい」
と、わたしを促す。断れる雰囲気でもなく、わたしは言われるまま急いでワイングラスを手に取った。
グラスに、ワインが注がれる。
やや黄色みのかかった白ワインで、甘いような、酸っぱいような香りがたつ。芳醇な香りというのかもしれない。
「飲みなさい、ミズカ。喉が渇いていたのだろう？　身体も温まる」
ユエル様はそう言って、もう一つのワイングラスに自分の分を注いだ。
「おっ、いいね！　やっぱ酒の席に女の子がいると！」
陽気なイスラさんの声に、ユエル様は渋い顔を返す。わたしはというと、ちょっと困っていた。
だって、ユエル様の「晩酌の相手」なんて、今までしたことがなかったもの。
お茶を一緒に飲むことはあっても、お酒を一緒になんて、あり得ない。仕えている主人に給仕するのではなく、同席してお酒を飲むなんて……。いいのかしらって、とまどってしまう。
そんなわたしの葛藤を知ってか知らずか、イスラさんは気軽な口調でさり気なく訊いてきた。
「ミズカちゃんはお酒、いけるクチ？」
「え？　いえ、どうでしょう……分からないです」
飲んだことのあるお酒といったら、梅酒と蜂蜜入りのホットワインくらいだ。寒い日に身体を温める目的で飲んだものだったし、アルコール度数も低かったように思う。
「そっかぁ。じゃ、まずはぐぐっと、飲んで飲んで」
なにやら嬉しそうにイスラさんは言う。そしてユエル様は眉間に深い溝をつくって、イスラさんを睨んでいる。

わたしはとまどいつつも、ワイングラスに口をつけた。まず、香りが鼻腔をくすぐってくる。
ワインの正しい飲み方なんて知らないから、ちょっと口に含んで、そのまま嚥下した。
「これはなかなか良いワインだよ。１９６９年ものの、エアバッハー・マルコブルン。ドイツのラインガウ地域の白ワイン。甘口だから、ミズカでも飲みやすいだろう？」
ユエル様が言ったとおり、酸味も低く、かといって甘すぎもせず、苦味を感じる前に、するりと喉をくだっていった。
亜矢子さんが持ってきたドイツワインは高価なものだったらしい。
わたしはワインにも疎いから、亜矢子さんが言っていた「シュペートレーゼ」というのは、てっきり地名か醸造元の名だとばかり思っていた。
シュペートレーゼというのは、等級を示す語で、「遅摘みした葡萄から造られる」ワインを指すのだと、ユエル様に教えられた。濃厚で、どちらかといえば甘口寄りのワインとのこと。
そしてドイツワインに限ったことではないけれど、ヴィンテージもののワインというのは、目玉が転げ落ちるほどに、高価だ。
亜矢子さんが持っていらしたこのワインも、希少価値の高い品だという。
貢がれたユエル様はというと、特別にありがたがるでもなく、もちろん迷惑顔もしない。
「ワインに罪はないからね」
なんて、笑って言ってのける。
わたしは知らず、ため息をつく。そのため息も、ワインの良い香りに染められていた。
「ミズカちゃん、そういえば具合良くなかったんだっけ？　大丈夫？」
お酒を勧めておいてから、はたと気がついた様子で、イスラさんが尋ねてきた。

「雨、弱いんだって？　ユエルから、さっき聞いたけど」
「雨というか、湿気に、なんですけど」
「ユエルもだもんな。力の種類からいってやむを得ないか。けど、ミズカちゃんの方に大分しわ寄せがいっちゃったんだな」
「でもわたし、もともと雨の日って……少し苦手でしたから、その影響かもって」
「へぇ？　そうなんだ？」
イスラさんは、黄みをおびたこげ茶色の瞳を、まじまじとわたしに向ける。
わたしは曖昧な相槌をうって、答えた。背中が一瞬痛んで、顔をしかめてしまった。
――雨の日は、こうして背にある傷が疼くから苦手なんだ。
わたしはユエル様に目を戻した。
ユエル様は黙したままわたしの様子を窺っている。何か言いたげに唇が動いたように見えたけれど、ワイングラスが傾けられ、同時に瞳も伏せられてしまった。
また、ちくりと胸が痛む。
なぜだろう。なぜこんなに胸が騒ぐのか、切なくなるのか、自分が分からない。
顔が熱くなり、動悸がし始めたのは、きっとワインのせいだ。
「あっ、あの、訊きたかったことがあるんですけど！　イスラさんの力は、なんなんですか？」
話の転換の仕方が下手なのは、我ながら、もうどうしようもない。
ユエル様から視線を逸らし、イスラさんに向け、唐突に話を切り出した。
「え？　俺？」
「はい。魔力っていうんでしょうか？　そうした力を持ってらっしゃるんですよね？」
「ああ、うん。でも、俺ら吸血鬼全員ってわけじゃないんだぜ？」
「そうなんですか？　それは、知らなかったです……けど」

「古い血脈の一族だけが力を保ってる。ユエルとアリア、まあ、一応、俺もだけどね。一族ったって、一族の全員が力を受け継ぐわけじゃないし、なんていうのか、天賦の才ってやつだね」
さりげなく……でもないように思えるけど、自慢しているようだ。
やっぱりイスラさんって、こういうところなんか、ユエル様に似ている。……なんて、口に出せないけれど。
「俺とアリアは同じ属性の力だ。風使い」
そう言って、イスラさんは指を鳴らした。
するとユエル様のしなやかな銀の髪が、下からすくいあげられるように浮いた。
「やめろ、イスラ、うっとうしい」
ユエル様は髪を乱した旋風を、軽く手を振って、散らした。
イスラさんは右手の上に、風を乗せている。小さな風の渦が、うっすらと見えた。
「こんな具合。風を使って身体を浮かせたりもできる。疲れるからあんまりやらないけどね」
ああ、それでなんだと、納得がいった。
イスラさんもアリアさんも、来訪時、どうやって二階にあがったのだろうと思っていたけど、柱を伝ってよじ登ったとかではなく、つまりそういう“力”を使って、上がったんだ。
「それじゃぁ、イレクくんもそういう力を持ってるんですか？」
「いや。あいつにはないよ。俺もよくはわからねぇけど、もしかして生殖者限定なのか？」
イスラさんに問われ、ユエル様はグラスをテーブルに戻した。
「違うな。生殖者ではない奴でも、力を持つ奴はいた」
「そうか、そういう奴に俺は会ったことないからな。生殖と同じくらいレアな能力だと思ってたけど、そうでもないのか」
「レアな能力には違いない。力加減も、その種類と同じくそれぞれだ」
それからユエル様は、不思議顔をするわたしに、改めて説明をし

てくれた。
「吸血鬼」である、自分達のことを。

16．炎と風と

吸血鬼がもともと持っている超常的な力は、幻惑の能力。人間の記憶や思考を意のままに操作できる、一種の催眠術のような能力だ。

個人差はあるものの、吸血鬼にとって、生存し続けるために必要な能力のようで、この能力を持たない吸血鬼はいないみたい。

他に長寿で不老でなのは、

「種族的な特徴で、いわば体質のようなものだよ」

と、皮肉ったような口調で、ユエル様は述懐した。

この二つの特殊能力の他に、吸血鬼というよりは魔法使いめいた能力があることも、ユエル様から聞いていた。その能力……魔術とか超能力とか言ってもいいようなその“力”には、風・火・水の三種の力があるそうだ。

そのうちの“火”の属性の力を、ユエル様は持っている。そしてイスラさんとアリアさんは“風”。

「私が確認したのはその三種だけだが、他にもあるかもしれないね。古い血脈を継ぐ者、そして“魔力”の強い者にしか、そうした特殊能力は顕現しないようだ」

「ほら、俺達、個人主義だろ？　横の繋がりなんてないも同然だから詳しい事はわかんないんだよね。たぶんそうなんじゃねーかっていう適当な結論さ」

わたしは「はぁ、そうですか」と間の抜けたような返事しかできない。

ユエル様が有してる火の魔力（ちから）については、ずいぶんと前に説明されていた。だけどユエル様がその力を行使する機会って滅多になくて、実感は乏しかった。

いつだったか、ユエル様が手の上に作って浮かべて見せてくれた蒼白い光の球体は、怪談話とかに出てきそうな火の玉か狐火のようで、きれいだなと思った憶えがある。手品を見せてもらってるよう

な感覚で、不思議な力が“吸血鬼”にはあるんだなと、暢気に感心した。そうした能力に、少しも疑問を抱かなかった。

だって、そもそも“吸血鬼”という存在自体が現実味のない、不思議そのものの存在なのだから、例えびっくりするほど摩訶不思議な魔法を使えるのだと教えられ、それを見せられても、「そんなものなんだ」とあっさり納得したと思う。

あっさりというか、……ぼんやりと納得、というか。

それでもちょっと意外だなと思ったのは、水の属性の力だった。

吸血鬼って、水……主に雨や湿度等に弱いものだと思いこんでた。

ユエル様が雨の日をとくに億劫がっているから、そう思ったというのもあるし、後は小説か何かでそういう記述があったという憶えもあった。「流れる水」のせいで正体を現されたり、とか。だから、それほど深刻ではないにしても、ちょっとした弱点なのかなと思ってた。

「水は、とくに弱点ではないよ、ミズカ。聖水を含めてね」

「そうなんですか？」

わたしは小首を傾げてユエル様を見やった。

「ただ、自然の法則に従うように、それぞれ、その力の属性と相反するものは、弱点とまではいかないが、苦手になるということはあるかもしれない。中国の思想だったかな？　陰陽五行、というのは？」

そのあたりの知識も、以前ユエル様から教えていただいたことがある。

えーと……、たしか中国古来の哲理とかなんとかで、天地の間に循環流行して停息しない「火水木金土」の気を表わす……とか、なんとか？　それぞれが相剋し相生する。

「まぁ、それに当てはまるわけではないが、相性の良いもの悪いものは確かにある。滅せられるほどの脅威にはなりえないが」

滅せられるなんて物騒な語彙を、ユエル様はさらりと口にする。

自分と人間達との差異を、そうしたさり気ない一言に含ませてい

るように感じた。
ユエル様は時々ひどく自嘲的で、皮肉めいたことを口にする。
だけどイスラさんまでがそんなことを言うなんて、思いもよらなかった。
イスラさんはグラスを傾け、僅かに残っていたお酒を飲みほして、深々とため息をついた。そして、苦笑まじりに零した。
「俺達はさ、見た目は人間の姿をしてるけど、やっぱり魔性の種族なんだろうね、吸血鬼っていう。人間のまねごとをして“生きて”ても、人間とは交わりあえない」
イスラさんは明るい茶色の双眸を曇らせ、イスラさんに似つかわしくない寂しげな物言いをした。
「超常的っていうか、魔物っぽい異能の力を持っているのは、人間との区別をつけるためなのかもね？　俺達は本来、在ってはならないモノなのかもしれない」
「で、でもっ！」
思わず、身を乗り出してしまった。
「人間の中にだって、超常的な能力を持っている人はいます！　そりゃぁ、魔法とかそういうのとは種類は違いますけど、でもっ、たとえば、すっごく足が速かったり力持ちだったり、記憶力が飛び抜けて優れていたり演算能力が高かったり、ええっと……あと、いろんな発明をしてそれを形にしたりとか！　ごくごく平凡な人から見たら、そういった能力を持つ人はすごく特別な人種に思えてしまうし、魔法みたいだって思える能力もあって……。天賦の才能でも努力の賜物でも、そうした常人以上の能力を持つ人間はたくさんいて、人間社会の中で“生きて”るんです。だから、吸血鬼だって、人間と同じように“生きて”いたって構わないはずなんです。人間のまねをしていたって、こうして存在しているのだから、……在ってはいけないなんて、そんなことないって思うんです」
ずっと……ずっと、そう思ってた。
そう思っていたかった。“生きて”いてもいいんだって。

だって、そうでなければ悲しすぎる。
わたし達は確かに人間とは違う、別の“何か”だ。そのうえ、人間の生気なしには存在もできない、ひどく儚い存在でもある。
それでも、こうして存在してる。永い……とても永い時の中を、人間の世界に潜み、在り続けてきた。
たしかに、人間に害のある異端の存在なのかもしれない。そうした一面もあると、それは否定できない。
だけど、人間とは交じり合えないなんて、思いたくなかった。在ってはならない存在なんて、思いたくなかった。わたしはともかく、ユエル様の存在そのものを否定するなんて、それこそ在り得なかった。
だって……、だってわたしはユエル様に救われ、こうして存在できているんだもの。
吸血鬼とか人間とか、そんなこと関係なしに、ユエル様はわたしに優しく接してくれた。そうしてわたしを生かしてくれた。わたしのような者でも生きていて良いと、ユエル様が信じさせてくれた。
だから、これからも生き続けることを、否定したくない。
たとえ人間とは別種の存在であっても。
わたしの気持ちを、曖昧な単語でしどろもどろに繋げた言葉の羅列だけでも、ユエル様は察してくれた。
「ミズカらしいね」
そう言って、微笑んでくれた。穏やかな笑みを見せてくれるのは、なんだか久しい気がする。
恥ずかしくって、居たたまれない心持ちにもなったけれど、ユエル様の笑顔が見られたのが嬉しくて、何よりホッとした。
でも、心が和んだのも束の間、……――
「ミズカちゃん！　いい子だなぁ！」
「――……っ！？」
いきなりイスラさんが抱きついてきて、声も出ないほどに驚いた。
イスラさんは、いつでも突然だ。

ついさっきまでテーブルの向こう側にいたはずなのに、いつの間にかわたしの目の前にやってきていて、ソファーに座ったままのわたしの頭を抱え込むようにして、ぎゅうっと抱きしめてきたのだ。
「あっ、あの……っ」
「う～ん、ミズカちゃん、ほんと、可愛いや！」
そう言って、イスラさんはまるで子供を褒めるみたいに、わたしの髪をくしゃくしゃと撫でてくる。
ワイングラスを両手で抱えるようにして持ったまま、わたしは硬直していた。突き放そうにも、腕を伸ばせない。
突然の抱擁に驚き、戸惑い、焦り、心臓が痛いくらいに高鳴りだした。
アリアさんとは違う。頬に当たるイスラさんの胸元の硬さが、それを体感させた。
――男の人の胸元、腕、……力強さだった。
「いやぁ、ほんと惜しいなぁ」
耳ともで、イスラさんがささやいた。少し声のトーンが落ち、そして、イスラさんの片手がわたしの背に回され、抱きしめる力が強まった。
思わず、ひゅっと息を呑む。寒くはないのに、全身が粟立った。
「ミズカちゃんがユエルの眷属でなきゃぁ、俺がもらったのになぁ」
イスラさんの声が悪戯っぽいものに変わった。からかうような声は、わたしにではなくユエル様に向けられているようだった。
「……イッ、イス……ラ、さん、あ、の……っ」
な、なに……？
急に、イスラさん、何を言い出すの……？
「ユエルになんかには、ホントもったいないくらいだよ、ミズカちゃん。俺ならもっと大事にしてあげられるのになぁ」
冗談めかしたイスラさんの声が、引き金になった。
「……っ」
――心の深いところにある何かがひび割れ、弾けた。

17．抉《こ》じ放たれて

息が詰まって声も出ず、心臓が破れそうな勢いで鳴り始める。
や、だ……、何、これ……？　痛い、背中が……ズキズキと疼く。
イスラさんの腕の力が強いせいじゃない。
いやだ、何？　何か、思いだしそうな疼痛が、背を、全身を走ってく。
どうしよう、何、何がこんなに、……こわ……い？
釘を打ちつけてくるような激しい痛みが頭部にまで及んで、とても目を開けていられなかった。目を閉じると、瞼の内で小さな光が明滅した。
――何か、……何かが、じわじわと痺れるように全身に拡がっていく。
「イスラ」
低く、威圧的な声が、耳に届いた。それと同時に身体が解放された。
ユエル様が乱暴な所作でイスラさんをわたしから引き離したようだった。ふと見ると、イスラさんは顔をしかめ、不安定な姿勢で床に片手と片膝をついていた。
「……」
わたしはソファーに座ったまま、イスラさんを気遣う余裕もなく、体の緊張も解けずにいた。
「わざとか、イスラ」
「……」
わたしに背を向けて立ちはだかっているユエル様は、右の手のひらをイスラさんに向けていた。表情は見えない。けれど、その口調はひどく冷たい。それでいて烈火のような熱（いき）れがあった。
一方で、イスラさんは不敵な笑みを浮かべるだけで何も言い返さず、ユエル様を突き上げるようにして睨みつけている。

イスラさんは上半身を起こし、片膝を立ててその場から動かない。
「さすが風使いだな、イスラ。炎を煽るのが巧い」
ユエル様の冷笑じみた声音が空気を張り詰めさせていく。こんなにも荒々しい怒気をまとっているユエル様を見るのは、初めてだ。
緊迫感が高まり、同調するようにわたしの胸もざわついて、動悸がひどくなっていく。
イスラさんは余裕綽々といった笑顔で、軽口をたたいた。
「いいね、ユエル。おまえのそういう顔見るの、好きだぜ、俺」
「うるさい、イスラ、黙れ」
ユエル様は声を荒げない。静かに言い放ち、次の瞬間、青白い炎が渦巻く塊となってイスラさんを襲った。
「……チッ」
イスラさんは間一髪で、その炎を止めた。風の盾が炎を止めている。炎はその形を歪ませるも、勢いは衰えない。やがて螺旋を描くようにして、イスラさんが両手をかざして作っている風の盾を押していった。イスラさんは苦しげに顔をしかめる。風と炎の勢いに髪が乱され、額に汗が滲んでいるのが窺えた。
火が、爆ぜている。
ユエル様はわたしの前で佇立したまま微動だにせず、イスラさんを抑えつけていた。
空気が軋むような音を立てていた。あるいはそれは、耳鳴りかもしれない。こめかみが酷く痛んだ。
イスラさんはなおも笑みを崩さず、ユエル様をさらに煽った。
「風使い冥利に尽きるね、火の勢いを増させる要因になれたってのは」
「……ではそれを冥土の土産にでもするがいい」
「ユッ、ユエル様！　待って……っ！」
二人がどれほどの力を持っているのか計り知れないけれど、きっととても強い。本気で力を行使し、相手にぶつけたとしたら、無傷ではいられない。それほどの力だと、感じる。

たとえ冗談だとしても、争い合うなんて絶対ダメだ！
ユエル様を止めなくちゃ！
「ユエル様！」
そう思って腰を浮かせたわたしを、ユエル様は振り返りもせず、片腕をのばして制した。そのユエル様の肘が、わたしの手に触れた。
軽く触れただけだった。
「……っ」
けれど手に痺れが走り、震え、力が入らなくなった。
ワイングラスが、まずわたしの膝の上に落ち、それから床へ落ちて、パリンッと音をたてて、砕けた。ガラスの破片が散らばり、黄色みを帯びた白ワインが絨毯に染みをつくった。わたしの胸中に拡がる痺れのように、じわりと滲む。
「――……っ」
立ち上がりかけて失敗したわたしは前のめりに倒れ、ソファーから崩れ落ちるようにして、床に両膝をついた。
「ミズカちゃんっ！？」
「ミズカ？」
硬直していた体が、わなわなと震えだした。わたしは目をきつく瞑って、自分自身を抱きしめていた。
――痛い。
背中と、ガラスを踏んだ膝が痛い。それよりももっと、甦った記憶が苦しくて、胸をひしめかせる。
「ミズカ？　ミズカ、いったい……」
弾かれるようにして振り返ったユエル様は、身を縮こまらせて震えているわたしの肩を掴んだ。そのユエル様の手を、わたしはほとんど反射的に振り払ってしまった。
その直後、自分が何をしてしまったのか気付き、愕然とした。
「……あ、……」
自分がとったとっさの行為にうろたえ、声が出ない。
「す、すみ……ません、わたし」

声が震えた。
なんてことをしてしまったんだろう……！？
ユエル様の手を払いのけるなんて、……どうして。
手や腕の震えが治まらない。動悸は酷くなるばかりだ。頬も熱く、目頭まで熱帯びてきた。背中がずきずきと痛みだしたのは、雨のせいじゃない。古い傷痕が疼くのは……――
「わたし、……すみません、あの、驚いてしまって……すみません、本当に」
その場を取り繕おうと、わたしは散らばったガラスの破片を集めようと四つん這いになった。手が震えて、うまくガラスの破片を拾えない。膝や指先から血が滲みでていた。
「――ミズカ」
ユエル様がわたしの手を掴んで止めた。ユエル様の手は、炎を操った後だったからか、とても熱かった。
「酔ったのだろう、ミズカ。もう、寝たほうがいいね」
ユエル様はどうしたのかと問い質すようなことはせず、わたしの手をとったまま、立ち上がった。さり気なく、手や膝に付いたガラスの破片を払い落してくれ、血も拭ってくれた。
ユエル様の手が、わたしの血で汚れてしまった。
「部屋まで送ろう、ミズカ」
ユエル様は小首を傾げ、わたしの顔を気遣わしげに覗きこんできた。深い湖のような緑色の双眸に、わたしが映る。
「……」
大丈夫です。そう応えようとして、失敗した。
喉がきりきりと痛んで声が出なかった。眦が熱い。
大丈夫です、すみませんと言おうとしたのに、声が喉の奥に詰まり、それが苦しくて、思わず顔を背けてしまった。
肩をすぼませ、口の端をきゅっと締めた、その時だった。
「ミズカ」
ユエル様の手が軽く背中に触れた。わたしの身体を支えてくれよ

うとしたんだろう。
それなのに、……――
「……――っ」
わたしはまた反射的に身を捩って、ユエル様の手を拒んでしまった。
「すっ、すみませ……っ」
背中がどくどくと脈打って、傷みが激しくなる。
「……」
ユエル様は、わたしから手を離した。それからゆっくりと立ち上がった。
「あ、……わた、し……」
一度ならず二度までも、わたし、なんてことをしてしまったんだろう！
自分のした行為が信じられない。
どうしよう。どうしよう……！
不安げにユエル様を見やると、ユエル様は表情を消していた。目は、夜闇を映した濃紺色の窓に向けられている。
ユエル様は物憂げな仕草で、銀の髪を指先で軽く梳いた。一度はかきあげられた銀の髪は、指を離すと同時に再び額にかかり、ユエル様の深緑色の瞳を隠した。
「ユエル」
佇むユエル様に声をかけたのは、挑戦的な態度を取り続けていたイスラさんだった。さっきまでとは裏腹に落ち着き払った様子で、声も淡々としていた。
「ミズカちゃんは俺が部屋まで連れてく。傷の応急手当もしとくから」
見かねてのことだったのだろう。
イスラさんはわたしに近寄ると、添える程度の力具合で腕を掴んだ。さっきみたいな恐怖感は、もうない。
イスラさんは申し訳なさげに、わたしに謝った。

「ごめんな、ミズカちゃん、怖がらせちゃって」
「……」
わたしは首を横に振って応えた。
申し訳ない気分でいっぱいなのは、わたしの方だ。
それなのに、せっかくの寛いだ時間を台無しにして、あまつさえイスラさんに「ごめん」なんて謝らせてしまうなんて……。
ごめんなさいは、わたしが言うべきことなのに。
なのに、声が出なかった。一言でも声を発したら、その拍子に泣いてしまいそうだった。
「ミズカちゃん、歩ける？」
問われて、ぎこちなく頷いた。
イスラさんはわたしの腕を掴んで、そのまま踵を返した。そしてユエル様の方に向き直って、赦しを求めた。
「ふざけて悪かったな。酒の席でのことだ。ここはひとつ、さらっと流して忘れてくれよな」
「……」
ユエル様はイスラさんとは目も合わさず、謝罪にも応えずに、再びソファーに腰をおろし、ワイングラスを手に取った。端正な横顔をこちらには向けてくれず、グラスを口につけるでもなく、ただ黙然と座っている。砕けた散ったガラスの破片もそのままに、まるで氷の彫像のような居ずまいで。

――雨は、まだ降り続いていた。

18．疵

泣きだしたい衝動をどうにか抑えてはいたものの、背中の痛みは自分では抑えようがなかった。
蘇ってしまった記憶を、もう、消してしまえないように。

＊　＊　＊

――雨が降っていた。あの日、あの時も。
わたしは、さる子爵家の使用人だった。物心ついた時にはすでにそこにいて、下働きの日々を過ごしていた。
その頃のことは、あまり憶えていない。
あまりに遠い昔のことだからというよりも、記憶に残るような事が少なかったからだと思う。機械人形のように与えられた仕事を、ただ黙々と、何を考えるでもなく、こなしていた。
両親もなく、頼る身寄りもないわたしだったから、働く場所があるだけでも幸運だった。飢えずにいられる現状に満足しなければならなかった。
身分の差というものが、まだ人の心に根付いていた時代。
わたしは「身分の卑しい下々のモノ」で、高貴な方々の目にとまるような娘じゃなかった。

ある日、……――
子爵家の跡取り息子の若様が、わたしを私室に呼びつけた。何用だったのかなんて憶えてない。何故呼ばれたのかも皆目検討がつか

なかった。たぶん、用など無かったのだろう。
わたしを舐めるように看視し、若様はにやにや笑って言った。
「へえ、なるほど。これは迂闊だったな。……なかなかじゃないか」
言葉の意味が解からず、返答に窮した。
若様の私室に一人呼ばれて立ち入るなんて今までなかったから、わたしはひどく怯えて、まともに顔も上げられなかった。
若様に直接声をかけられたのもこれが初めてだった。
空豆のような顔形の若様は、いかにも両家の子息らしい傲慢さと横柄さを、そのでっぷりとした体型に現わしていて、正直、好感は持てなかった。
「おまえ、名はなんという」
「……水果と、申します」
「ふん。ミズカ、ね。おまえのような者には過ぎた名だな」
「……」
「まあいい、名など必要ないしな」
では何故名を訊いたのですか。そう言い返すなんて、当時のわたしには思いつきもしないことだった。口答えをする“頭脳”すらなかった。わたしはただの“労働力”でしかなく、自分の意思すら微かにしか持っていなかった。
それでも、若様の不遜な態度に不快感を覚えていた。生理的嫌悪感とでもいうのか、些かの好意も持てなかった。
「しばらくの間、退屈しのぎができそうだ」
そう言って笑った若様の目が狡猾に光ったのに、その時は気がつかなかった。ただ怖いとだけ、思った。
それから、若様はわたし個人を指定して命令を下すようになった。
「着替えを手伝え」「酒を持って来い」「荷物を持て」「忘れ物をした取ってこい」「酒をこぼした、這いつくばって拭え」――
若様はことあるごとにわたしを呼びつけ、用を言いつけた。もちろんわたしは唯々諾々と従うよりなく、そのたび、不可解な胃の痛みを覚えるようになっていた。

どうして？　他にも使用人は大勢いるのに、どうしてわたしを名指しにして用を言いつけるのだろう。
どうして、という疑問を初めて抱いた。それに、全身が粟立つような嫌悪感も。
若様の舐めるような目つきが、淫靡な粘りを含んだ声が、触れてくる手のいやらしさが、……嫌で嫌でたまらなかった。
どうしてわたしなどに、こうも執拗に構いつけてくるのだろう。
不審に思い始めていたわたしに、若様は気付いたのだろう。
若様はその理由を語らず、その代わり無体な用事を、さらに次々と言いつけてくるようになった。一向におもねろうとしないわたしを、無理強いにでも服従させようとしたのかもしれない。
あるいは、不快感を露わにしたわたしに、若様の嗜虐性が煽られたのかもしれなかった。

その日も、若様はいつものようにわたしを呼びつけた。私室にではなく、屋敷の敷地内にある温室に。――曇天の午後のことだった。
「御用向きはなんでしょうか」
そう尋ね、おそるおそる温室に入るや否や、いきなり若様に押し倒された。
あまりのことに思わず声を上げた。温室にわたしの掠れた悲鳴が響き渡ったけれど、若様はわたしの口を塞ごうともせず、舌舐めずりをしてほくそ笑んだ。
「泣き叫んでも無駄だ。誰も来やしない」
わたしを組み敷いた若様は喉を鳴らして笑い、身を捩って逃げだそうとするわたしの腕を地面に押しつけた。
「情けをかけてやるというんだ。有り難いと思え」
「……っ」
若様はもがくわたしの頬を叩き、服を剥ぐために胸元に手をやった。胸がはだけ、粗末な服はたやすく引き裂かれた。肘が擦り剥け、腿とふくらはぎが土にまみれた。

恐ろしくて、声も出なかった。喉の奥で声にならない悲鳴が詰まり、全身が戦慄いた。
「お兄様っ！？　何をなさっておいでですの？」
あの時若様の妹、お嬢様が偶然兄を探しに現れなければ、いったいどうなっていたか。
今思いだしても、ぞっとする。
お嬢様はわたしを助けてくださったわけではなかった。兄の所業に我慢がならないといった風で、「好き心もたいがいになさいませ」と兄を咎めた。それに辟易した若様は、一旦はわたしを解放してくれた。
けれど、若様は懲りなかった。
その後も若様は隙あるごとにわたしを手篭めにしようと機会を狙っていた。性的な嫌がらせは執拗に続いた。乱暴に腕をひっつかんで壁に押し付け、口をうなじに当てて噛んできたり、長椅子に押し倒してのしかかり、胸や足を揉みしだき、服を剥ごうとしたりした。僅かにでも抵抗すれば、容赦なく頬を打たれた。
大抵何らかの邪魔が入って事は中断され、わたしはほうほうの体で逃げだすことができた。
猫が、捕まえた鼠をなぶって弄ぶように、わたしをわざと逃がしていることもあった。わたしを玩弄して愉しんでいたのだろう。
若様は傲然と言い放った。
「可愛がってやろうというんだ、光栄に思え」
「……っ」
情婦にしてやると若様は言った。飽きるまでな、と。
その言葉の意味がわかっても、わたしにどうすることもできなかった。嫌ですとも言えず、ましてや「光栄に思う」なんて！
だけど拒みきれなかった。
だって、わたしには他に行く所なんかなくて、今ある暮らしを受け入れざるを得なかったから。ここを出たら、野たれ死ぬだけだ。わたしに選択しなんかない。みっちり仕込まれた使用人気質が、わ

たし自身を縛りつけていた。
それでも諦めきれず、若様の言いなりにはなれなかった。必死にもがき、あがいた。それがまた若様の加虐心を刺激することになろうとは、思いもしなかった。若様はわたしをいたぶることを愉しんでいた。
「――お兄様！」
だけど恐れていた最悪の事態は、回避することができたお嬢様のお咎めが入ったことによって、免れた。
乗馬用の鞭を持って現れたお嬢様は、頬を紅潮させ、怒りにわなわなと身体を震わせていた。
お嬢様はきつい吊り目をさらにきつくあげて、若様とわたしを烈火のごとく睨みつけた。
「お兄様、いい加減なさって！」
西洋風の乗馬服姿のお嬢様は革製の鞭を握っていた。それを握る手がぶるぶると怒りに震えている。
「そのように下賤な娘にうつつをぬかしているなど、子爵家の嫡男ともあろうものが、情けなくはございませんの？」
優位に立っているのは常にお嬢様の方だった。
気位が高く、意志の強いお嬢様は、放蕩三昧に暮らしている兄を苛立たしく思い、事に触れては叱りつけ、子爵家の嫡男である自覚を促そうとしてきた。
若様はいつものごとくお嬢様の叱咤に忌々しげに舌打ちをし、わたしから手を引いてくれた。
けれど――
お嬢様の怒りの矛先は、わたしにも向けられた。
「おまえのようなものが、よくもまあお兄様を誘惑できたものね！薄汚い下女の分際で、なんと身の程知らずな！」
鬼のような形相でわたしに近づいて来るや、お嬢様は狂ったように鞭を振るってきた。
わたしは逃げだすことも叶わず、その場に崩れ落ちた。お嬢様は

容赦なく鞭を打ちつけてきて、わたしは両腕を抱えてうずくまった。
「お赦しをください」と、何度も赦罪を請うた。
「おいおい、見えるところに傷なんかつけるんじゃないよ」
若様が、わたしの背をはだけさせた。悦にいったような含み笑いが、鞭打ちの傷に沁みてくるようだった。
「……ッ」
抗うことも逃げることもできず、わたしは土下座の格好で、ひたすら苦痛に耐えた。
「おまえのような卑賤の者をいったい誰が真面(まとも)に相手をするものですか。身の程を知りなさい！　汚らわしい淫女！」
若様の粘着いたせせら笑いの下、お嬢様の罵倒と鞭を、歯を食いしばって耐え忍んだ。
背の肌が裂け、血が床に飛び散った。
痛みのあまり失神しそうになりながらも、わたしは掠れた声で、何度も赦しを請うていた。お赦しくださいと、うわ言のように繰り返した。
内心では、悲鳴を上げて泣いていた。
――わたしが悪いのでは、ないのに……。
――わたしがいったいどんな罪を犯し、なぜこのような理不尽な罰を受けなければならないのか。
心の底に、怒りが湧いた。怒りというよりそれは悲しみに近かった。
どうして、と。どうしてこんな目に遭わねばならないのか、と。
惨めに這いつくばって赦しを請わねばならない立場にあることを、初めて辛いと、悲しく苦しいと、思った。
ようやく若様とお嬢様の下から解放されたわたしは、ほとんど衝動的に屋敷を出、闇雲に駆けていた。
――雨が降っていた。
どこをどう走ったのか、まったく憶えていない。
気付けば港町に来ていた。頃は、夕刻だったろうか。雨にけぶる

港町は、寒々とした影に覆われているように薄暗かった。
そして、人影もまばらな路地で、わたし自身がそこに倒れているかのような憐れ姿の、だけどわたしとは比べ物にならないほどに美しい、憔悴しきった銀髪の青年を見つけたのだ……――

19．名残の雨

雨はまだ降り続けていた。
目覚めてもまだベッドから降りられず、わたしは上半身だけを起こし、小窓から見える外の景色に目を向けた。
重なり合った薄雲の向こう側、ぼんやりと霞んで見える太陽は、地上にわずかな光をもたらしている。
小降りになってきているから、そろそろ雨も上がるだろう。昼前には青空が戻るかもしれない。
深々とため息をついたのと同時に背中の傷が痛んで、思わず肩を竦めた。
痛みをすり替えるようにして、下唇を噛んだ。
もちろんそれで背中の痛みが薄れるはずもない。……傷が、消えてなくなるはずもなかった。
――どうして忘れていたのか。あれほどの記憶を。
細い線状の傷痕がいくつも背を這っている。蚯蚓腫れの傷痕は、もはや治らず、消えることもない。
普段は痛みも痒みもなく、さして気にならない。ただ雨の日……湿度の高い日なんかに少しばかり疼くくらいだった。
どうしてこんな傷が背中にあるんだろう。
そう疑問に思ったこともあったけれど、短絡的に、子供の頃に何か不慮の事故があってついたものなんだろうと結論付けていた。
その“不慮の事故”がどんな事故だったのか、遠い昔のことだから忘れてしまったのだと、深く考えないようにしていた。
「……」
両手に顔をうずめた。
違う……忘れていたんじゃない。
忘れさせられていたんだ。……ユエル様に“幻術”よって。

幻術は人間に特化した力であるらしく、そのため、ユエル様の眷族となったわたしは、ユエル様の幻術にはかからない。
だけど、ユエル様の眷族になるまでに、二年の猶予があった。二年ほど、わたしは人間のままユエル様のもとで過ごしていた。
たぶんその間に、ユエル様はわたしの記憶を読み、忌まわしい過去を忘れさせてくれたんだ。
――感謝……しなきゃいけない。
ユエル様はわたしのためにそうしてくれたんだから。
それなのに、どうしてこんなに心が揺れるの？　心が、背の傷が疼くように、痛むの？
思いだした過去が辛いからじゃない。
たしかに、思いだすには辛すぎる過去だ。忘れたままでいた方が心も安らかだったろうと思う。
だけど……だけど思いだしてしまった。忘れてはいけないのだとでも言うように。
過去の記憶を引き摺りだしたのは、わたし自身の気の緩みのせいだ。
ユエル様の伸ばされた腕、広い背、怒りに燃える瞳、低い威圧的な声、……まるで見知らぬ男の人のようだった。ユエル様ではない別の“男の人”が眼前に迫ってきた。
あの瞬間に、胸に去来した感情はいったいなんだったのだろう。
怖さもあったけれど、……それだけじゃなく、ひどく苦しかった。動悸が強くなり、それが脳裏を叩いて、封印されていた記憶を呼び起こした。
でも、違う。
記憶が戻ってしまったのはユエル様のせいじゃない。ユエル様のせいだなんて思うのは、お門違いだ。
顔をあげ、わたしは両手に力をいれてこぶしを握った。
傷の疼きはやわらいでも、甦ってしまった記憶はもう消せない。
消すないけれど、……せめて、ユエル様の前では何事もなかった

ように振る舞うべきだ。
ユエル様にこれ以上の負担をかけたくないもの。
ユエル様は優しい方だから、わたしがあの辛い記憶を思いだしたと知ったら、わたしを気遣って、きっと心配げな顔を向けてくる。
「どうしたものか」と困らせてしまうかもしれない。
そんな優しいユエル様を、わたしなんかのことで、あれこれと思い煩わせたくない。
ユエル様にはいつだって悠然と微笑んでいてほしい。
だってユエル様は、わたしを救ってくれた。わたしを、初めて「人」として扱ってくれた。
名を呼んでくれ、微笑みかけてくれた。
ユエル様はわたしのためを思って、あの苦い過去を忘れるべく、術をかけてくれたんだろう。
この上なく人道的な……吸血鬼という人外の存在ではあるけど……主人に、わたしも誠意をもって応えなくちゃいけない。
だからこそ、きちんと弁えていなくては。気を引き締めて、ユエル様にお仕えしなくちゃ！
それがわたしにできる、せめてもの“誠意”だと思うから。
眷族の意味を聞かされたおかげで少し（本当のところ、かなり）動揺したけれど、大丈夫、きっと自制心は保てる。保たなきゃいけない。
いままでだって、そうしてきたはずなのだから。
わたしは両手で両頬を軽く叩いて、気合を入れた。
まずは、謝ろう。
昨夜は失礼なことばかりしてしまったもの。
記憶が戻ったせいも手伝って、取り乱して無様な態度をとっちゃったから、ユエル様に不快な思いをさせたに違いない。
身体はまだ少し重い。けれど急いでベッドから降り、身支度を整えた。
まだ早いからユエル様は起きてないかもしれない。

だとしたらちょっと無作法になってしまうけど、それでもやっぱり、今日は一番に、ユエル様の顔を見よう。
ユエル様に、会いに行こう。

大急ぎで身なりを整えたわたしは、ユエル様の部屋へ向かった。
屋敷内で一番広い洋間がユエル様の私室になっている。わたしの部屋からも近く、同じ二階。
ドアの前に佇み、深呼吸をしてから、ためらう気持ちを押しやって、ノックをした。
返事はない。
やっぱりまだ寝てるのだろう。朝の六時。この時間にユエル様が起きていたことって、滅多にない。徹夜してた時は別として。
少しためらった後、静かにドアを開け、そっと室内を覗きこんでみた。顔一つ分くらい開けたくらいでは、ベッドのあるところまでは窺えない。
入っちゃっても良いものだろうか。でも、入らなければユエル様を起しようもない。
まさかこんな所から大声を張り上げて起床を促すのは傍迷惑だろうし、どうしたものかと二の足を踏んでいたら、ふいに声がかかった。
「いつまでもそんなところで覗き見していないで、入りなさい、ミズカ」
「……っ！」
不意をつかれ、髪の毛が逆立ってるんじゃないかってくらいに驚いて、思わずひゅっと息を飲んだ。
ユエル様は僅かに開けられたドアに手を添えている。
いつの間にやってきたものか、足音も聞こえなかった。
「お、起きてたんですか、ユエル様っ？」

「そんなに驚かなくてもいいと思うが」
「た、だってだって！　ユエル様がわたしより先に起きてるなんて、数えるほどもないくらいですし」
「そういう時は“数えるほどしかない”という言い方が正しいね」
ユエル様はわたしの軽口を、軽口で応えてくれた。そしてわたしを部屋に招きいれてくれた。
ユエル様はすでに夜着ではなく、薄い浅黄色の綿シャツと着古した感のあるジーンズという、カジュアルな雰囲気の服装に着替えを済ませていた。……ううん、着替え途中、なのかしら。だって、シャツのボタンはどれひとつとして留められていなくて、胸元は全開にはだけてる。下着、というのか、タンクトップとかそういったものをシャツの下に着ていないものだから、なんとも目に毒な、丸見えの状態！　目のやり場に困るんですけど！
「えーっと……その、改めて。おはようございます、ユエル様。珍しく、本当に“お早う”ございます」
「嫌味なら、もう少し遠まわしに言った方がいいね、ミズカ？」
ユエル様は嘆息し、やれやれと肩を落とした。けれど、不愉快そうでは全然なく、力みのない微笑を湛えていた。
ユエル様は手櫛で髪を整えながら、窓辺へと歩む。その背を見つめ、わたしは安堵のため息をこぼした。顔はちらっとしか見なかったけれど、不機嫌そうではなかったし、声にも重苦しさはない。……いつものユエル様だ。
「あの、ユエル様」
「ん？」
ユエル様はカーテンを開け、それから窓辺に寄りかかった。
雨はもうやんでいた。窓辺に滴が光っている。
ユエル様は額にかかる髪をしなやかな指で梳きあげ、寝起きのせいで少しだけ気だるそうな顔をわたしに向けた。
物憂げな表情が似合う美貌を向けられて、危うく眩暈を起こしそうになった。

綺麗な顔も三日続けて見れば慣れる、なんてよく言うけれど、並外れた美貌の場合、それは適用外だと思う。毎日毎日、どれほど見続けても見慣れるどころか、近頃は目があっただけで心拍数が跳ねて、平常心ではいられなくなる。

ユエル様の濃艶な美貌は、どれほどの月日がたっても色褪せない。まなざしの優しさも。

呆けそうになっていた気を取り直して、わたしは居ずまいを正し、低頭した。

「昨夜はすみませんでした、ユエル様。ご不快な思いをさせてしまったこと、お詫びします」

「……ミズカ」

言葉尻に、ため息が重なった。頭をあげ、ユエル様を見ると、苦笑が浮かんでいた。

「律儀だね、ミズカは。それを言いに、わざわざこんな朝早くに、私のもとへ？」

「はい。すみません、朝はご迷惑かとも思ったんですけど」

わたしがそう言うと、ユエル様はまたため息をついた。けれど、迷惑顔ではない。苦っぽく口の端を上げ、眉を下げた。

「起こすついでとも思って来たんです。まさか起きてらっしゃるとは思わなくて、その手間は省けましたけど」

「ずいぶんと驚かせてしまったようだね。……それにしても」

ユエル様は苦虫を噛みつぶしたような顔をし、わざとらしい所作で再三のため息をついた。

「寝ていたらいたで、早く起きてください、いつまで寝てるつもりなのかと小言を言われ、起きていたらいたで、まさかだの珍しいだのと皮肉を連発されるとは。……やるせないね」

ユエル様の口調は、冗談口をたたくように軽くて、わたしを本気で責めているわけではないのは、わかった。わかってはいてもやっぱりうろたえて、わたしは身を竦ませ、頬を赤くした。

「すっ、すみません、いつも一言多くて……っ！　あのっ、えっと

……すみません、ユエル様」
「それがミズカだし、いつものことでもあるから、別段不快ではないし、気にしていないよ。昨夜のことも」
「……」
ユエル様はさり気なく先手を取り、そして流した。
もう終わったことだと、ユエル様は静かな微笑を湛えて暗にそれを語った。
だから、昨夜のことはもう蒸し返さない方がいい。
謝罪しきれなかったという中途半端な気持ちが残ったせいで、心はすっきりとは晴れなかった。
けれど、もうこれ以上余計な口をきいて、ユエル様にため息を吐かせたくない。
わたしは口を噤み、視線を落とした。

20．天気予報

「ところでミズカ。今日の予定だが」
当たり障りのない会話の糸口を差し出してくれたのは、ユエル様だった。
「店は開けるが、今日は、ミズカは休んでいなさい」
「え、でもっ」
お店に出るなっていう意味での「休んで」というのには、さすがに焦ってしまった。
やっぱり昨夜のこと、使用人にはあるまじき態度だと、不愉快に思ってるのかも？　だから頭を冷やして、一日、じっくりと反省していなさいってことなのかな？
どうしよう、やっぱりもう一度、きちんと謝った方がいいかな。何度謝ってでも、ユエル様に赦してもらいたい。
赦してもらいたいなんて、それも我がままだと分かっているけれど、でも……っ！
「ミズカ」
くすっと、ユエル様が小さく笑った。
「そんな不安そうな顔をしないで、ミズカ。昨夜のことは、本当にもう気にしていないから」
「や、やだもう！　そうやってまた考え読まないでください、ユエル様！」
わたしが情けない声を上げると、ユエル様は肩を揺らして笑った。
「そうはいっても、分かりやすく顔に出ているからね」
「そんなぁ」
わたしは頬を両手で覆い隠した。それを見てユエル様はまた可笑しげに笑う。リラックスしきった、とても柔らかい、ユエル様らしい笑顔にホッとした。
「休みと言ったが、実はアリアから、午後になったら買い物につき

あってほしいという伝言を頼まれていてね。付き合ってやって欲しい」
「ああ、はい。そういうことなら、分かりました。アリアさんのお伴をすればいいんですね？」
「そういうことだ。アリアのことだ、色々と振り回されるだろうから、午前中は体を休めておいた方がいい。……ミズカ、こちらへ来なさい」
「……はい」
一瞬ためらったけれど、ユエル様の言葉に従った。
「特別サービスだ。ミズカの今日の運勢を占ってあげよう」
「はい？」
唐突に、何を言い出すのかと思えば。
わたしは目を瞬かせ、とまどいがちにユエル様の顔を窺った。ユエル様が浮かべているそれは、「営業用スマイル」だ。ユエル様の美貌観賞目的でやってくる多くの女の子達に向ける、美しくも神秘的な微笑みだ。
ユエル様はサイドボードに置かれていたタロットカードを持ち、それを数回シャッフルした後、扇状に広げてわたしに差し出した。
「一枚引いて。好きなところから」
「……」
当たるんですか、なんて訊いたりはせず、少しだけ考え込んだふりをしてから、一枚、カードを抜き取った。そしてカードは裏向けのまま、ユエル様にお返しした。
「その顔は、信用してないって顔だね、ミズカ」
「え、それは、その……」
「本当にミズカは、嘘をついたりごまかしたりするのが不得手だね」
「うぅ、すみません」
「それは美徳といえるよ、ミズカ。まぁ、ミズカとしてはそれで困ることもあるだろうけどね？」
「……」

ユエル様、当たってます、その「占い」。と言いそうになったけれど、堪えた。「また皮肉かい？」と返されそうだ。皮肉のつもりなんてないけど、からかわれてるのかなとは思ったから、褒められているのかもしれないけれど、少しだけ複雑な気分だった。
「大丈夫。当たるよ、私の占いは、おおよそね」
「おおよそ、ですか？」
「そう……六割弱くらいは」
「微妙ですね」
「カードを抜き取ったその時点で、占いの結果を、カードを選んだ者自身が抜き取っている。占者はそれに注釈を付けるのが役目だ」
「はぁ」
「そしてその注釈は、カード本来の意味に加え、占者の勘がものをいう。私は、勘が良いからね」
「そういえば、そうかもしれませんね」
勘というより、単にあてずっぽうという気もするけれど。それは言わずにおいた。
「まぁ、そんなわけだから、そこそこに当たるよ、ミズカが当たると信じて聞いてくれたなら」
「はぁ……そうですか」
何だか、短時間の間にどっと疲れましたけど、ユエル様……。
だけど、肩にこもっていた妙な力みが、それで落ちた気がする。疲れたけれど、気持ちは軽くなったような。
ユエル様はにこにこと笑ったまま、それからカードを表向けた。
女の子達相手に占いをする時、いつもこんなに愛想を良くしているんだろうか。
ふと、そんなことを考えて、何故だか胸がチクリと痛んだ。
「カードは『太陽』だ」
「良いカードなんですか？」
占いの店の手伝いをしているくせに、ユエル様が商売道具として使っているタロットカードについて、わたしはあまり詳しくない。

見せてもらった『太陽』のカードの不可思議な絵は、悪い結果が出そうなデザインではなさそうに思えた。けれど、『太陽』と吸血鬼の組み合わせは、果たして良い符牒なんだろうか？
「良いカードだよ、とても。……そうだな」
意味ありげに小首を傾げ、しみじみとカードを見やった後、ユエル様は視線をわたしに戻し、そしてユエル様は典雅に微笑んだ。
「少しだけ、何かトラブルめいたことがあるかもしれないけれど、結果的には良い方向へと向かいそうだ。あまり暗く考えすぎないのが良いね」
「……」
「太陽のカードは、大アルカナの十九番。希望や完成、活力などを意味するカードだ。ミズカが引いた時には正位置だったから、そのまま良い意味を成すカードとして受け止めていい。ただし、太陽のカードは、太陽の烈しさゆえに、マイナス要素も多少含まれている。ミズカに当てはめて考えるならそれは、渇きには注意しなさい、ということだろうね。……それから」
「はい」
わたしは神妙な面持ちでユエル様の占い結果を聞いた。六割弱の当たり率なら、もしかしたら当たるかもしれないと思って。
「午後からは、晴れそうだ」
……はい？
ユエル様は窓の外に視線を流して、そう言った。
それからもう一度わたしの方に向き直り、
「天気が回復すれば、気分も良くなるだろう」
そう、付け足した。
「……ユエル様。それ、占いじゃなくて、天気予報です」
「天気予報も占いの一種だよ、古い歴史のある、ね」
ユエル様はしれっと言ってのけるけど。
でもそれって……屁理屈な気がするんですけど、ユエル様。
わたしは呆れた顔をユエル様に向けてしまっていた。ユエル様は

泰然と構えていて、わたしの呆れ顔もまったく気にしていない風に微笑んでいる。
　こうしたやりとりは、ユエル様なりの気遣いだったのだろう。それに気づいたのは、後になってからだった。
　ユエル様はおもむろに、タロットカードを持っていない方の左手をわたしに差し出した。
「ミズカ、太陽のカードから渇きに注意の占い結果もでたことだ、一応、念のために飲んでおきなさい」
「え、いえ、いいです、あの……」
　わたしはふるふると首を横に振って、身を引こうとした。
　ユエル様はわたしが断るのを予想していたのだろう。強引にわたしの手を掴み、繰り返して言った。「少しでもいい、飲んでおきなさい」と。
　また、ユエル様に見透かされてしまった。
　もう渇き始めてる。飲ませていただいて一日、二日でもう渇き始めるなんて、今までになかった。
　渇ききっているわけではないけれど、物足りなさを感じて、落ち着かない。
「すみません、ユエル様」
　渇きのせいでまた倒れるようなことがあっては、さらに迷惑がかかってしまう。
　そう考え直して、生気を、飲ませていただくことにした。
　ユエル様の手をとり、指先から、生気を吸い上げていく。
　それは、ほんの数秒間のこと。
　満ちたという感ははっきりと得られなかったけれど、もう飲めないだろうと思う程充分に飲ませていただいた。
「ありがとうございます、ユエル様」
　それからすぐに、ユエル様から手を離した。それと同時に、わたしは後ろへ一歩、足を退いていた。
「……ミズカ」

ユエル様の手が伸び、わたしの頬に触れかけた。けれどその手はわたしに触れることなく、空を掴んでおろされた。
「コーヒーを淹れてきてくれないかな。熱いのを、ね」
ユエル様の双眸が、艶をおびた濃緑に沈む。言いかけた言葉を無理に飲み下してしまった、そんな表情だ。
でも、わたしにそれを訊く勇気はなく、口にしたのは了解の返事。
そして、笑顔をつくった。作り笑いなのは、ユエル様には分かってしまっただろうけど。
「あの、ユエル様。……ありがとうございます」
顔を上げ、まっすぐにユエル様を見つめてもう一度礼を言った。
「礼を言われるようなことはしてないと思うが？　生気のことなら……」
「それだけじゃないです。それだけじゃなくて、ちゃんと……言っておきたかったんです」
「律儀だね、ミズカは」
ユエル様は少し呆れたように、けれどとても穏やかなまなざしをわたしに向けてくれた。
「それじゃぁ私も、どういたしましてと言っておくべきかな」
茶化すようにそう言ったユエル様の瞳は、優しくて、だけどどこか寂しげな色を含ませていた。
胸が、わけもなくドキドキしはじめる。
「あのっ、じゃぁわたし、コーヒー、すぐにお持ちしますから！」
慌ただしくそれを言ってから、わたしは踵を返し、小走りになって部屋を出た。

そして、ドアを閉めてから、
「ごめんなさい、ユエル様」
俯いて、呟いた。

21．青雲と夏姿

――果たして。
ユエル様の「占い」は的中し、午後の空には太陽が姿を現し、燦々と輝いていた。

真夏の避暑地は大賑わいだ。
お土産屋さんが軒を連ねているショッピング街は、人だかりのせいでまっすぐ歩けないくらいに賑わっている。
背が低いからなのか、それとも単に鈍(どん)くさいからなのか、わたしはやたらと人にぶつかっては足を取られ、もたついてしまう。そのせいで、度々随伴している方に心配をかけてしまう。足元の覚束ない小さな子供でもあるまいし、我ながら本当に情けない。
本日お伴をさせていただいてるアリアさんは、雑踏をかき分けて歩くのがお上手だ。人とぶつかる割合は低い。向こう側から避けてくれるってこともあるだろうけど。何しろ目を瞠るほど華やかな雰囲気を持った金髪碧眼の美女だもの。自然と人ごみが左右にひらいて、道ができる。
それにしても、踵の高いピンヒールを履いているにも関わらず、アリアさんの足取りはとても軽やかだ。見るからに歩きにくそうな靴なのに、アリアさんは颯爽とした歩行で、つんのめったり躓いたりもしない。
ついでに言えば、アリアさんの本日のお召し物は地色はオフホワイトのドット柄のシフォンブラウスと、すらりと長い脚線美を惜しげなくさらす、黒のタイトスカート。肌の露出は多いけれど、上品に着こなしていて、ため息が出るほど美しい。
「ずっと爪先だって歩いている状態ですよね、その靴だと。すごいです！」

思わず感嘆して言ったわたしに、アリアさんは屈託なく笑って応えた。
「ふふ、こんなのは慣れよ、慣れ。ああ、でもね、こっちに慣れきっちゃったものだから、ローヒールの方がかえって疲れるようになっちゃったのよ」
そう言ってからアリアさんはちょっと困ったような顔をして、語を継いだ。
「だけど、別荘地の中は舗装されていないところが多いから、そういった場所はピンヒールだとちょっと不便でアブナイわね」
今朝方のことだそうだけど、苔むして湿った土にヒールの部分が全部埋もるほど突き刺さって、危うく派手に転ぶところだったのよと語って、アリアさんはご自分のことなのにころころと可笑しげに笑った。
その点、ショッピング街はちゃんとコンクリート舗装されているから安心ね、と言って。
さて、そのショッピング街はというと、一部地区は車両の乗り入れが禁止され、“歩行者天国”となっている。もちろん期間限定。
人も多いから当然車の数も多い。
一部地区の道以外の公道は観光バスやタクシー、自家用車がずらっと並んで渋滞している。ほとんどの駐車場で、満車の看板が出るくらいの混雑ぶり。レンタサイクル（貸し自転車）の数も多くて列を成してた。
とにもかくにも、大賑わいのショッピング街。
威勢のいい客引きの声、ひと時も落ち着いてられない子供達の騒々しい声、浮かれてはしゃぐ女性達の甲高い笑い声、観光バスの添乗員さんの人を探す慌てた声などがあちらこちらで飛びかって、ユエル様が好む清閑さはここには欠片も存在しない。
それでもたぶん今日はまだ、観光客は少ない方なんだと思う。まだお盆前だし、平日だから。今だって十分すぎるくらいに混雑してるけど、これはまだ前哨戦といったところなんだと思う。

何年前だったか、こことは別の避暑地でお盆の期間を過ごしたことがあった。そこも有名な観光地だったからすし詰め状態に観光客がごった返し、人口密度が上がったせいで気温まで上がり、「避暑地」の意味なんてなくなってた。

ユエル様も心底うんざりした顔で歎息し、それでも「仕方ない」と若干諦め気味ではあった。

「これでも街中に居るよりはずっと涼しい方なのだからね。それに観光シーズンは、観光客目当てに商売をしている地元民にとっては書きいれ時だ。しゃかりきになって観光ムードを盛り上げようとするのも当然だろう」

地元民にとってあまり有り難くないレジャー施設も多くあるのだけどねとユエル様は言下に足し、さらに「遠路はるばるやってくるほとんどの者が、避暑が目的ではないからね」と語を継いだ。

時代感覚の鋭いユエル様に、わたしは日本の行事や社会構造、その他諸々の事を教わった。ユエル様は飽き性なところも多々あるのに、わたしに関しては……だと思うけれど……、とても根気強く、ゆっくりと丁寧に、時代に対応した教育を施してくれる。そして、うまく時代感覚を掴めないわたしをサポートしてくれた。

……わたしって、本当に……ユエル様に迷惑をかけてばかりだ。

「ねぇ、ミズカちゃん？」

「あ、は、はいっ！？」

いけない！

並んで歩くアリアさんのことを、一瞬忘れてしまってた。

声をかけられて、わたしは慌ててアリアさんの方に顔を向けた。

「八月の中旬って、たしか仏教の……お盆って呼ばれる時期よね？

そのお盆はお墓参りに出かける時期だって聞いたんだけど、違うのかしら？　そろそろそのお盆の時期のはずだけど、なんだかそんな雰囲気じゃないわよね？」

アリアさんが、不思議そうに訊いてきた。

日本へは度々訪れ、長らく滞在したことのあるアリアさんは、日本の伝統的な習慣や行事についてある程度の知識はあるみたい。だからこそ、「よくわからない」と思うことが多いようだ。
わたしは少し考えてから、答えた。
「基本的には、ちゃんとお墓参りに行く時期ではあるんです。帰省ラッシュなんて言葉もあるくらいで、生まれ故郷で親戚一同集ってお墓参りに行く人はまだまだ多いみたいです。だけど昨今ではお墓参りは事前に済ませて、海外旅行に出ちゃう家族も多いみたいです」
「ふぅん、そうなの。バケーションだからって遊んでばかりもいられないってところなのかしら？　お墓参りにも行って、レジャーも楽しむとなると、なかなかタイヘンね」
アリアさんはなるほどと得心し、それから少し皮肉めいた笑みを浮かべた。
「それにしても、土産屋の多いのには驚いたわ。観光に来るというよりは、観光地の何かを買って帰る目的で来ているみたいね？　日本人って、オミヤゲっていう買い物を義務に思ってるような感じを受けるわ。買って帰って、配らなきゃ、みたいな」
「そう……ですね」
わたしが苦笑で応じると、アリアさんは呆れ顔をやんわりと穏やかな微笑に変えた。
「だけど、買い物自体がけっこうな娯楽よね？　買っても買わなくても、いろんなお店を見て回るだけでも楽しいわ」
もしかして、気を遣わせてしまったのかもしれない。“日本人”の、わたしに。ううん、もしかしなくても、きっとそう。
ユエル様にしても、アリアさん、イスラさん、そしてイレクくんも、みんな鋭くて、優しい。
わたしの心を読んだみたいに、思いもかけなかったことを聞いてきたり、気遣わしげな笑みを向けてくれたりする。
だから、アリアさんがわたしを誘い出してくれたのも、そうした気遣いだったのかなって思った。もしかしたらユエル様から何か話

を聞いていたのかもしれない。……これは邪推といってもいい憶測だけど。
「ショッピングは女の特権！　そして得意芸だもの。買いまくりましょうね、ミズカちゃん！」
アリアさんは朗らかに笑ってわたしの腕に、しなやかな腕を巻きつけてきた。

「一緒にショッピングしましょ」、というアリアさんのお誘いに応じたわたしは、真っ白いワンピースを着ている。アリアさんがワードローブから探し出し、選んでくれた。裾にフリルがあるひざ丈のワンピース。こんな可愛らしい服があったのかと驚いた服だった。
普段着なれない服だから、着るのにちょっと躊躇ってしまった。だけどアリアさんに「とっても似合うわ」と褒められては、別のものには着替えられず、恥ずかしさを押し込めて、袖を通した。
ワンピース一枚では心もとなくて、薄い生地の藍色のボレロを羽織った。半袖のボレロは、透け感はあるけれど肩から肩甲骨あたりまでちゃんと隠せる。背中は、できればきっきりと隠しておきたかった。
「ねぇ、ミズカちゃん？　服を漁ってて気づいたけど、シンプルというか、質素なものが多いのね？　アクセサリー系もないし……ユエルが用意してくれないの？」
アリアさんが、少しばかりユエル様を非難するような声音で訊いてきた。
「そんなことはないです。このワンピースだけじゃなくて、他にもたくさん買って下さいます。それこそわたしには似合わなそうな、可愛すぎる服も勧めてくれて……。でも、仕事をするのにはやっぱり動きやすいものがいいですから、シンプルなものをわたしが選んで、買っていただいてるんです」
とはいっても、ユエル様の趣味も大いに取り入れている。

ユエル様は趣味も良いし、わたしなんかよりはるかにセンスもいい。それにユエル様もシンプルな衣服を好まれるようだから、買ってきてくださる服は大抵わたしの好みとも合致する。
ただ金銭感覚がけっこう大雑把だから、ちょっと無節操に買い過ぎなのではと思う事もあって、控えるよう進言したりもするのだけど。
「仕事？　……仕事、ねぇ……。そう。そうなの。ミズカちゃんはそんな風に考えているのね。ユエルが踏み出せないでいるのも、わかる気がするわ」
「え？」
「ミズカちゃんがそう思ってしまうのも無理はないけれど、少し……困ったものね？　困りものねっていうのはミズカちゃんが、じゃなくて、ユエルよ？」
アリアさんの言葉の意味が分からない。
ユエル様が、困る……？
わたしのせいで、ユエル様が何か困っているというのなら、……どうしよう……。
「あらあら、ミズカちゃん、今、見当違いのことを考えちゃってるでしょ？　そんな不安そうな顔をしないで。大丈夫よ」
アリアさんは優しく微笑み、わたしの頭を撫でつけた。
……そういえば昨夜、イスラさんにもこんな風に頭を撫でられた。子供を宥めるような……落ち着かせるような、そんな優しい手つきと微笑みで。
そりゃぁ、お二人にしてみたら、わたしなんて子供のようなものなんだろう。年齢差や経験値を考えてみれば当然のことだ。だから、子供扱いされることに関しては不満もないし、ましてや不快感なんてまったくない。
ただ、慣れなくて戸惑ってしまう。
ユエル様がわたしにかけてくれる優しさとはまた別種の優しさだ。親切というのが近いかもしれない。ユエル様のそれよりもずっと直

截な表し方をするから、すぐに応対できなくて、あたふたしてしまう。……もっとも、ユエル様が示す優しさにもうろたえがちなのだけど。
どうして困ってしまうのか、分からない。わたし自身の気持ちの問題なのに、その気持ちの正体が分からず、それが焦りに通じてしまうのかもしれない。
そしてまた心配をかけてしまうのだ。ユエル様やアリアさんに。
アリアさんはちょっと首を傾けて、わたしの困惑顔を覗き込んでた。
「ミズカちゃん、もうちょっと肩の力を抜いて。ね？」
「えっと、……はい」
もうこれ以上、アリアさんに無用の心配をかけてはいけない。肩の力を抜くべく、深く息を吐き出した。
そんなわたしを見て、アリアさんは青い瞳を細めて小さく笑った。
「ユエル達ったらね、つれないのよ。あたしの買い物には付き合いきれないなんて言うんだもの。とびっきりの美女と連れだって歩けるっていうのに、男気がないわよねぇ？」
舌足らずな声と、拗ねた子供のような口調と仕草が、アリアさんの華麗すぎると言っていい外見からくる近寄りがたい雰囲気を和らげている。
「だからってわけじゃないけど、ミズカちゃんとこうして出掛けられて嬉しいの。ミズカちゃんもそう思ってくれたら嬉しいのだけど」
「はい！　それはもちろんです！　誘ってくださって嬉しかったです。ほんとに、ほんとです」
「そう？　なら、よかったわ。じゃ、早速見て回りましょ！　気になってるお店がいくつかあるの」
「はい、お供します！」
なるべく明るく元気な声を出して応じ、意気揚々と歩きだしたアリアさんについていった。

22．そぞろ歩き

慣れないといえば、「ウィンドウショッピング」というのもそうだ。

買い物には一人で出かける事が多いから、いろんなお店をゆっくり見て回る機会は少ない。ユエル様を放って、のんびり買い物に興ずるなんてできないし。

ユエル様とともに出掛けることももちろん何度かあったけれど、ウィンドウショッピング的なことはしたことがないような気がする。

たとえ最初から行く店を決めず、なんとなく買い物に出かけようかという気軽な気持ちから出掛けたとしても、ユエル様は基本的に自分好みでない店や用もなさそうな店にふらりと立ち寄るなんてことは滅多になさらない。

目的地の無い散歩は好まれるのにって、少し不思議。

雑踏する街中を歩くのを好まれないのだろう。それはわたしも同じだから、ユエル様の気持ちが分からないでもない。

それにつけても、ユエル様の買い物の仕方は素っ気ない。

ショーウィンドウに飾ってあるもので、目に留まり、気に入ったものがあったら即決即断で購入してしまう。自分の好みのデザイン、質、そしてサイズさえ合っていれば、値札すら確かめずに購入する。気に入ったものは「全て包んでくれ」と迷いも見せない豪気っぷり。

ちなみに、ユエル様の立ち寄られる服飾店は、高級店ばかりだ。

好みのメーカーやデザイナーズブランドがあるわけではなさそうだけど、ユエル様は無意識的にご自分の麗姿にあった高品質の物を選んでいる。そして高級店の店員さんも、さすがにプロだ。ユエル様の嗜好をさり気なく聞きだして、頭の先から爪先まで、ユエル様に似合うものを選出し、スタイルを提案してくるのだ。ユエル様も意見を出しつつも大抵は店員さんの勧めるそれに満足し、まとめて購入する。無駄な時間をかけない、即決即断の買い方だ。

わたしの服を買ってくださる時もそうだ。わたしがどれにしようかと選びかねていると、「気に入ったのなら全て買っておけばいい」と言って、さっさとレジを通してしまう。レジを通す前に慌ててユエル様を止めるのだけど、手遅れになってしまうことが多い。

それでも、わたしの衣服を買う時は、試着を勧めてきたりなんかして、わりあいゆっくりと付き合ってくれる。迷ったあげく買わないことがあっても、わたしの優柔不断さを怒ったりはしない。呆れ顔で苦笑し、ため息をつきはするけれど。

ユエル様にとって買い物……とくに服飾系のショッピングは、嫌いとまではいかなくとも、面倒に感じることの一つみたい。

「ユエルは何事に関しても面倒くさがりだものねぇ！　今日はね、実はユエルも誘ったのよ？　そしたらあたしのショッピングになんかとてもつきあってられないって、思いっきりイヤそうな顔して断ってきたのよ。もうほんと、失礼しちゃうわよねぇ」

と言って朗らかに笑ったアリアさんは、ユエル様と違って買い物好きのようだ。ユエル様にすげなく断られても別段気にする様子もなく、浮き浮きと足取りも軽くショッピング街に繰り出し、ウィンドウショッピングを思いきり楽しんでいる。

ショッピング街といっても山中の観光地だから、種々雑多のお土産屋さんや、レストランを含む食べ物関係のお店が圧倒的に多い。

だけど輸入雑貨等を扱ったおしゃれで可愛いお店もいくつかあるし、革製品や絹やレースなんかの専門店、服飾店もいくつかあって、アリアさんはそうしたお店を蝶々のように身軽に渡り歩いては、気に入ったものを購入し、あれよあれよという間に荷物が増えていった。

そして今は、スワロ……なんとかいうクリスタル・ガラスのアクセサリー店にいる。

ええっと……スワロフスキー、かな？

店頭に置いてあるカタログを手にとって確かめてみた。
オーストリアで創立されたクリスタル・ガラスの製造メーカーのことで、創業者のダニエル・スワロフスキーから付けられた、とのこと。百年以上もの歴史があるクリスタル・ガラスで、主にアクセサリーに使われているみたい。ビーズ・アクセサリーとはまた違った高級感があって、とても綺麗だ。
「スワロフスキーもビーズも歴史はそれなりにあって、アンティークやヴィンテージものもあるのよ。宝石に劣らない魅力があって、とても好きなの」
アリアさんがそう言うように、スワロフスキーのアクセサリーはどれも目がくらむほど素敵で綺麗で、……そしてお値段もけっこう高かったりする。お値段の方にもちょっと目がくらんだりして。
「あら、このネックレス、素敵。ね、どう、ミズカちゃん？　似合うかしら？」
「はい、とても」
アリアさんが手にとって自分の胸元に当ててみたのは、楕円形で深い紅色のペンダントトップのついたネックレス。照明の下、それは虹色にキラキラまばゆく光って、アリアさんの豪奢な金の髪と白い肌によく映えた。店員さんもここぞとばかりに褒めちぎって、他の品物も勧めてくる。
「そうねぇ、ミズカちゃんにはこれが似合いそう。デザインもシンプルで可愛いし。ほら、ちょっと当ててみて？」
「……は、はぁ……」
そしてアリアさんがわたしのために選んでくれたネックレスは、ハート形のペンダントトップのついたものだった。色は、少しくすんだ感じの水色で、それでも照明の当たり具合によって、様々な色に変化して、とてもきれいだった。
おそろいのイヤリングもございます、と店の人が勧めてくれたそれまでアリアさんにつけるよう言われて、不慣れな手つきで耳につけてみた。

「ミズカちゃん、とってもとっても似合うわ！　それにしましょ。ね？」
「え、あの……」
「他に何か気に入ったものがあったら言って。ね？　さっきからあたしが選んでばかりだもの。ミズカちゃんが欲しいと思うものがあったら、遠慮なく言って？」
「……でも、こんな……買っていただいてばかりで、申し訳ないというか……」
「そんなこと気にしないで、ね？　あたしが好きで買ってあげたいんだもの」
アリアさんは青色の瞳をキラキラと輝かせてわたしの顔を覗き込んでくる。ちょっと舌足らずで甘えたような声が、少女っぽい仕草と相まって、くすぐったいほどの可愛らしさを感じさせる。
少女のような屈託のない笑顔がアリアさんの華やかな顔立ちをふわふわとした柔らかさで包み、気安げな印象を持たせている。アリアさんは一見、迫力ある稀代の美女で、道を歩けば遠巻きに眺める人が多く、近寄りがたい雰囲気がある。けれど実際はとても気さくな方で、その点、ユエル様とは違っている。
それにアリアさんはユエル様よりうんと感情表現がおおらかで、あけっぴろげな方だ。
「それに今日のショッピングの目的は、ミズカちゃんへの贈り物を買うことなんですもの！」
「……」
何店舗か回っている間に、アリアさんはわたしに似合うからと言って、服飾品を色々と買ってくださった。冗談めかして、「イスラには負けてられないものね」なんて言いつつ。
もちろんご自分のものもわたしのもの以上に買ってはいるのだけど……。
何度も辞退したのだけど、「あたしが買ってあげたいんだもの。あたしのわがまま、きいて？　ね？」ってお願いされては、強く断

りきれない。
ユエル様同様に、アリアさんも値段なんて見もせず、気に入ったら即購入。お金のことなんてまったく頓着しない。
事情が事情だからクレジットカードなんて持ってなくて、そのため常に現金払い。ちらりと覗き見たアリアさんの長財布には相当の額と思われるお札がきっちりと入れこまれていた。
もしかして日本に滞在するために用意したお金なんじゃないかしら？　それを今日一日で遣いきってしまうのではと、他人事ながらひやひやしてしまう。
ユエル様もアリアさんも、そりゃぁ、いちいち値段を気にしてお財布の中身と相談しながら買い物をするなんて似合わないけど、でもっ、もうちょっと控えめなお金の遣い方をしてくれたらいいのに！
ユエル様には常々、無駄遣いは控えてくださいと口を酸っぱくして言っているのだけど、すると、
「老後のために貯蓄をしておく必要はないのだから、使いたい時に、使えるだけ使ってしまえばいいんだよ」
という、刹那的な返答が戻ってくる。
そりゃぁ、たしかに“老後”なんてわたし達にはない。ユエル様曰く、わたし達は常に“今”だけを生きている。そして何より、人間にその存在を知られてはいけない異界の存在なのだ。存在の痕跡は極力残さない方がいい。だから必要な財物は、必要に応じて手元に引き寄せ、遣いきってしまうのがいいのだと言う。
その理屈は分かる。
分かるけれど……目の前で湯水のようにお金を遣われると、かつてお金そのものに縁のなかったわたしとしては、どうにも落ち着かない。貧乏性だねとユエル様はからかって笑うけど、実際貧しい身分だったんだもの、当然だと思う。
だから、内心ではアリアさんの豪気な散財っぷりを、「勿体ないですからもう少し買い控えてください」と、止めたかった。だけど、せっかくショッピングを心ゆくまで楽しんでいらっしゃるアリアさ

んに水を差したくなくて、ずっと我慢していた。
とはいえやっぱり、わたしへの過剰なほどの“贈り物”のいくつかは、さすがに遠慮させていただいた。アリアさんは残念がったけど、わたしの気持ちを汲んでくれて、無理押しだけはしてこなかった。
「ミズカちゃんて、アクセサリー系はほとんど持っていないでしょ？　身につけるの、嫌い？」
「え、いえ、そんなことは……嫌いではないですけど……」
わかりませんと曖昧に返答すると、アリアさんはちょっと呆れたような顔をして嘆息した。
「たしかにゴテゴテつけるのはミズカちゃんには似合わないわね。だけど、嫌いじゃないわよね？　楽しそうに見てたし」
「はぁ……」
「ユエルも、ちょっとしたアクセサリーくらい買ってあげればいいのに。――まぁ、でもそれも無理かしらね？　ユエルって基本は敏いのに、妙なところで鈍感なとこがあるから」
しかたがないわねと、アリアさんは楽しげな笑顔を浮かべた。
「ここはあたしが、ユエルの代わりに買ってあげなくちゃね」
そう言って、アリアさんはネックレスやイヤリングをわたしに似合うだろうものを選び、買ってくださった。負担にならないようにと、ほんの四、五点。
買っていただいたスワロフスキーのアクセサリーはとても素敵で、買っていただいたということ自体は心苦しかったけれど、やっぱりとても……嬉しかった。
アリアさんはそんなわたしの心を読み取ったのだろう。
買ったばかりの水色のイヤリングを包み袋から取り出し、今着ている白いワンピースにも似合うからと、耳につけてくれた。
「せっかくなんだし、このままつけてるといいわ。とてもよく似合って、可愛いもの！」
アリアさんはまるで自分の事のように嬉しそうにはしゃぎ、笑っ

ている。
「そうだわ、きっとユエルも喜ぶわよ。ね、ミズカちゃん？」
「そ、そうで、しょうか……」
わたしは返答に窮して、ちょっと俯いた。
ユエル様が喜んでくださるかどうかは分からない。似合うと言ってくださるかどうかも。
でも……少しは気に留めてくれる……かな？
イヤリングなんて今までつけたことないから、「どうしたのか」と問いかけてくるかもしれない。そう……きっと、からかうような……悪戯っぽい笑顔を見せて。
そんな場面を想像したとたんに恥ずかしくなって、頬が熱くなってきた。
そしてアリアさんは、頬を赤らめているわたしを見やり、優しく目を細めて微笑んでいた。

23．フレンズ

スワロフスキー専門のアクセサリー店のすぐ隣にオープンカフェがあって、わたしとアリアさんはそこで一息入れることにした。
昼食を摂る必要のないわたし達だけど、喉は渇く。汗だってかくから、嗜好品としてだけじゃなく水分を取るのは必須のこの季節だ。
吸血鬼であるわたし達が熱中症にかかるかどうかは分からないけれど、渇ききって倒れてしまうのはあり得ることだ。……身に覚えがあるもの。気をつけなくちゃ。
だからわたしの方から、喉も渇いたことだし、お茶でも飲みませんかと誘った。
アリアさんは「ええ、そうしましょ！」と即答してから、うふふと悪戯っぽく笑って語を継いだ。
「さすがに歩き通しで渇いてきちゃったから、さっきのお店でちょっと飲ませてもらっちゃったのよ」
「もしかして、店員さんからですか？　……いつの間に……」
「ふふっ」
アリアさんが浮かべるそれは気紛れな妖精のようで、魔性っぽさがないでもないけれど、人口に膾炙してる吸血鬼のイメージからかけ離れてるだろう、まろやかで明朗な笑顔だ。
わたしが言った「渇く」って、そっちの意味ではなかったのだけど……。
でもまぁ……事なきを得、アリアさんの渇きが癒されたのならよかった。
「それはそれとして。何か冷たいものでも飲んで、一息つきましょ。ね、ミズカちゃん」
「はい」
頷いて、わたしはアリアさんの後に従った。

お昼過ぎ、オープンカフェはほぼ満席の状態だったけれど、運よく席が空いてそれほど待たされることもなく、席につけた。
ところで、ユエル様はあの美貌ゆえに、こうした人の多い場所に来ると非常に目立って、四方八方から視線が集中し、ざわめきが起こることもしばしばある。ユエル様はそれを辟易しつつも、やむないこととして諦め、且つ近寄りがたい雰囲気を全身に漲らせている。
目立つという点では、アリアさんも同様だ。
アリアさんがカフェに足を踏み入れた瞬間、波立つようなどよめきが起こり、好奇に彩られた視線が集中した。金髪碧眼の外人が物珍しいというだけでなく、アリアさんの華やかで美麗な容姿はどうしたって注目を浴び、窺い見られてはひそひそ話され、関心事の的になってしまう。
けれど当のアリアさんは注がれる視線を不快に感じたりはしないようで、すっかり慣れきっているようだった。不愉快な顔一つせず、見知らぬ人でも目が合えば、さり気ない微笑みで受け流すという余裕もある。アリアさんはコミュニケーション上手な方だと、つくづく思う。人懐こい性質だから、きっと友人も多いのだろう。
「ね、ミズカちゃん」
ふっと思いだしたかのように、アリアさんはぱんっと軽く手を叩いた。
席に着き、オーダーしたアイスコーヒーで渇いた喉を潤した、すぐ後のことだ。
「あのね、ミズカちゃんにお願いがあるの」
「はい、何でしょう」
「お願いというのもおかしいかもしれないけど、ミズカちゃんのこと、友達だと思っていいかしら？」
優しく笑って、アリアさんはそう言った。
「とっ、友達って……、わたしがですかっ？」
「迷惑？」

「迷惑なんかじゃ！　で、でもっ、友達だなんて、そんなの、とんでもないです！」
わたしは両手をぶんぶんと振った。暑さのせいではなく、汗が額から流れる。
だって、友達だなんて！　そんなの恐れ多くて、簡単に頷いたりなんかできない。
アリアさんはちょっと上体を前に傾けて頬杖をついた。もう片方の手でストローの先をつまみ、グラスの中の氷をカラカラと音をたててかきまわしている。
「同性の友達って、もういないのよねぇ。同族で同性って、なかなか見つけられないし出会えないのよ。だからちょっと淋しいなって思ってて」
ユエル様のお母様とは親しい友人だったそうだけど、その方が亡くなって以降、同族同性の友達はいなくなってしまったのだとアリアさんは語った。
親しくなった人間の女友達はたくさんいて、中にはアリアさんの正体を知ってもなお変わらずに友情を示してくれた人も複数いたという。けれど、人間と吸血鬼であるわたし達では、過ごす時の長さがあまりに違う。
映画や小説の中の吸血鬼のように、血を分け与えて“仲間”にすることもできない。
「私達は、酷く孤独な種なのだよ」と、いつだったユエル様も自嘲めいた口ぶりで零したことがあった。
その通りだろうと思わざるを得ない。
「耐え難い、というほどでもないのよ？　ただ、ほんの少しだけ淋しくなるの。語りあえる誰かが傍にいたらいいのにって。女同士でね」
「……」
アリアさんの気持ちは、なんとなく分かる。
同性の友達がいたら、どんなにか心強いだろうと思うもの。

役立ったりそうでもなかったりする情報を交換し合ったり、他愛無い悩み事を相談したり、くだらない時事を笑いあったり、……そんな友達がいたら、どんなに楽しいだろう。
友達という存在自体、わたしにはなかったから。
正体を隠し、期間限定で学校にもぐりこんだこともあったけれど、友達を作るほどの時間はなかったし、勇気もなかった。どうしたら作れるのかも、分からなかった。
――だからずっと憧れてた。高望みだと分かっていたけど、友達ができたらいいのにって、夢見てた。
アリアさんはわたしの動揺を宥めるかのように、ふわりと包み込むような穏和な笑みを浮かべた。
「ユエル達も、もちろん大切な友人だと思ってるわ。でもね、同性の友人がいないのは、やっぱりちょっと物足りないっていうか、淋しいの。だからだからミズカちゃんと知り合えて、本当に嬉しいのよ。ミズカちゃんもそう思ってくれたなら嬉しいわ」
「それは……っ、わたしもとても嬉しく思ってます。だけど、……――」
「それならもう友達ね、あたし達」
「そんな！」
「あら、やっぱりこぉんな年上の友達はいやかしら？」
「いえ、そんな！　そういうことじゃなくて！」
お年のことも、それは……ちょっとはあるけど。嫌とかではなくて、単に目上の方なのにって。でも、とまどうのはそれ以前の問題で……！
「友達だなんて、そんな、滅相もないですっ！」
思わず声が上擦ってしまう。
「……あのね、ミズカちゃん」
アリアさんは穏やかに凪ぐ海面の青を思わせる双眸をわたしに向け、静かに語りだした。
「ミズカちゃんの昔のこと、少し、ユエルから聞いたわ。ユエルと

出会う前、どんな境遇にいたのか。どんな身の上だったのか」
「……」
「でもね、ミズカちゃん。もう、今は違うわ。ミズカちゃんがユエルの眷族になる前の頃は、たしかに身分階級に囚われ、差別される時代だった。だけど、今はそうじゃない。それは知ってるわね？」
「……」
わたしは無言で頷いた。だけど、戸惑う気持ちは拭えない。
「差別がなくなったとは言わないわ。だけど、ミズカちゃん自身がそれに囚われたままではダメよ？　いつまでもそんなことにこだわらないで、ね？」
「……わたし、そんな、こだわってなんか……」
「しみついた習慣というのは拭いにくいものかもしれないけれど、時々、ミズカちゃんは意識してそれを口にしてるように思うわ。違う？」
「……」
わたしは俯いた。
アリアさんの言う通りだったから、今度は「そんなことはありません」って答えられなかったし、気まずかった。
今ほど自分が情けなく感じたことはなかった。
なんて言葉を返せばいいのか、ただの一言すら思い浮かばない。
「もっと自由になっていいのよ、ミズカちゃん。そして自分自身を解放してあげて。ミズカちゃんのためにならないわ。ううん、ミズカちゃんのためだけじゃないわ。そんなミズカちゃんを見ているのはとても悲しいし、……きっとユエルは、ミズカちゃんと同じくらいに辛いと思うの」
わたしは顔をはっとして顔をあげた。
――ユエル様が……辛い？
そうかもしれない。
ユエル様は優しい方だもの。わたしが過去に囚われているのを気がかりに思っているかもしれない。だからこそ、……あの記憶を封

じ込めていてくれた。
それなのに、いつまでもわたしが辛気臭い顔をしていては、ユエル様を落胆させてしまう。
そんなのわたしの望むところじゃないのに、どうしてうまく立ち回れないのだろう。
ユエル様の負担になんかなりたくないのに……。
アリアさんは気遣わしげな表情をし、眉を下げ、わたしを見つめて「ごめんなさいね」と語を継いだ。
「あたしったら言い過ぎちゃったわね。ミズカちゃんのこと、責めるつもりなんてないのよ？　ただ、すこぉしもどかしくって、心配だから、つい無遠慮なこと言っちゃって。……あらあら、ミズカちゃん、そんな泣きそうな顔しないで？　気に障ったのなら謝るわ」
「そんな……わたし、気になんて……」
「あたしね、ミズカちゃんがとても好きよ。もちろんユエルも」
アリアさんはわたしの様子を窺いながら徐にそう言った。
「だから二人には、今よりもっと幸せになってほしいの。そのためにミズカちゃんを応援したいって思ってるわ。友達として、ミズカちゃんを手助けしたいの」
「……っ」
泣きだしてしまいそうになったけれど、寸前で堪えられた。
ううん、堪えきれなかった。だって鼻が赤くなってるだろうことは容易に想像できるもの。鼻先がツンとして、痛い。視界がちょっぴり滲んで、アリアさんの顔がまともに見られない。
優しさって涙腺を緩ませる。嬉しいのに、どうしていいのかわからなくなってしまう。
何か言わなくちゃって思うのに、言葉が出ない。喉の奥が締まって、一言発したら、それを機に泣きだしかねなかった。
アリアさんは少し困ったような、心許なげな顔をしてわたしの様子を窺う。何かを言いかけたようだったけれど、代わりに小さく息を吐き、話をかえた。

「――ミズカちゃん、そろそろ帰りましょうか。あんまり遅くなるとユエルも心配するでしょうし」
「あ……そう、ですね」
応えてから、わたしは大急ぎで半分以上残っていたアイスコーヒーを飲みほした。
水出しコーヒー（ダッチコーヒー）のコクのある濃い目の味は、口当たりも良くてとても美味しかったけれど、わたしにはちょっと苦く感じられるコーヒーだった。
「荷物もたくさんあることだし、タクシーで帰りましょ。ちょっとずるをして、店員さんに呼んでもらうわね？」
どうやら幻術を使って店員さんに言う事を聞いてもらうようだ。アリアさんは近くにいた店員さんを呼び寄せると、にこりと微笑みかけて、こともなげに術をかけた。
「タクシーを呼んでちょうだい、今すぐ」
笑みの優しさとは裏腹に、語気はとても鋭い。店員の女の子はこっくりと木偶人形のようにぎこちなく頷くと、身を翻してレジのある方へと向かった。
程なくして、タクシーが店の前に着き、アリアさんは支払いを済ませて「いきましょ」とわたしを促した。
「今日はいっぱい買い物できて楽しかったわ。寄りたいお店はまだまだあったし、また一緒に来ましょうね、ミズカちゃん」
「あ、……はい。わたしも楽しかったです。いろいろ買っていただいて、あの……ありがとうございました」
素直に賛同し、礼を述べると、アリアさんはちょっと小首を傾げ、円（まど）やかな笑顔を返してくれた。
「どういたしまして。そう言ってもらえて、とっても嬉しいわ」
アリアさんの笑顔は、美しいだけではなくて大らかで、包み込んでくれるような寛容さがある。
その笑顔に、胸がきゅぅっと締めつけられる。
温かな何かが胸に……全身に沁みいってくる。甘い芳香に抱擁さ

れているようで、その安堵感に切なさすら覚え、泣きたくなってしまう。

――アリアさんに、記憶にすらない人への思慕を重ねているのかもしれない。

どんな女性だったのかと想像することすら能わない、見知らぬその人……。

だからやっぱり戸惑ってしまうのだ。アリアさんの「友達」という言葉に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1721u/

薔薇のまねごと

2011年10月1日03時15分発行